平成２０年度文部科学省　戦略的大学連携支援事業　事業報告書

共同図書環（館）の ネットワークシステムの構築と 新たな教養教育プログラムの開発

2008 〉〉〉 2011　本　編

代表校 ●
愛知県立大学 ▲
連携校・機関 ■
愛知県立芸術大学 ◆
愛知淑徳大学 ●
名古屋外国語大学 ▲
名古屋学芸大学 ■
長久手町 ◆
愛知県図書館 ●

は　じ　め　に

文部科学省戦略的大学支援事業
「共同図書環（館）のネットワークシステムの構築と新たな教養教育プログラムの開発」事業報告書の制作にあたって

今日、ますます複雑化する社会状況の中で、大学には、縦割りの学問体系から横断的な学問体系への組み替えや、環境、国際、生活など現代的でかつ地域社会のニーズを捉えた新たな学問体系の構築が求められ、それらを通して、特色ある魅力的な大学づくりや教育・研究・地域貢献の機能の充実を図っていくことが期待されている。

しかし、それぞれの大学の限られた人的・物的資源の中で、この社会的要請に十分応えていくには限界がある。各大学がこれまでの教育・研究の実績を通して築いた人的・物的資源の活用を図りながら、各大学の機能の相互補完が必要となってきている。

具体的には、学際的融合や共同研究の実施に加えて、大学間の施設の共用化、教育分野の相互補完などの取組みを本格化する時期が来ている。また、近年、全国的な傾向として、①学生の学力の低下、②学生の学習意欲の減退、③学生の図書離れなどの現象が指摘され、その傾向は顕著に現れており、これらの克服が共通の課題として認識されてきている。

その具体的な対応策として、文部科学省の当該補助金を活用して「５つの大学の連携による図書の共同利用や図書情報の共有化のための新たな図書検索システム（Tosho Ring）の開発と活用」、合同キャリア教育や地域学の構築など大学の特色を活かした「新たな教養教育プログラムの開発」に平成２０年度から３ヶ年かけて取組んだ。

その結果、「Tosho Ring（共同図書環）」においては11,000冊の共同図書を既存図書と別に購入し、21,000冊の貸出と1,700件におよぶ活発な書評活動を展開することができた。「新たな教養教育プログラム」においては、大学の連携と企業の参画による「キャリア教育」や教員間の連携による「教養講座」、自治体との連携による「長久手学」など17のプログラムを教職員の知恵やアイデア、学生の参画を得て多彩に展開することができた。

予想以上の成果は、「Tosho Ring（共同図書環）」において携帯電話やパソコンから利用者が書き込んだ書評からも図書の検索ができ利用者間相互の交流を可能となり、利用者参加型の新たな図書検索の手法の有効性を顕示すことができたこと。また、授業でTosho Ringを活用することで、図書を選び、読み、書評を書くといった学生の基礎学力を高めるための導入教育として効果的であることが実施した教員から報告されている。

このような成果を連携校で共有した結果、いくつかの連携事業を継続し発展させることになった。具体的には「Tosho Ring（共同図書環）」については３ヶ年を目安に各大学で費用を負担して継続することになり、「長久手学」や学生や企業からの評価も高かった「キャリア教育」も、新たに学生のインターンシップのプログラムとして事業を展開することになった。

そして、さらなる連携を進めるために、連携校の学長と所在の市長、町長による「学長懇談会」を定期的に開催し、知恵を出し合い、知的資源や物的資源を寄せ合うために意見を重ねることになったことは、３ヶ年の大学連携事業の成果の象徴である。

この報告書の本編は、冒頭に事業の概要や成果、課題をまとめてあり、評価委員会の評価に続き連携校の学長の事業実施後の所感を掲載してある。その後は、この連携事業を成功に導いたのは関わった方々の情熱や知見であったことから、「共同図書環事業」と「教養教育プログラム事業」に関わった教職員と参加した学生・一般県民、協力いただいた企業・団体の方々５０名の臨場感あふれるレポートで編集してある。

資料編は、各事業の方針や実施結果・アンケートなど本編のレポートを裏付ける各種の資料を編集した。今後、同様な事業の実施を考えている大学や研究機関・企業・団体の皆様に活用いただくために整理したものである。

本編や資料編についてはCD-Rとして配布しているが、代表校の愛知県立大学のホームページからも必要な個所の閲覧やダウンロードができるようになっているので、類似事業の検討や実施のための資料としてご活用いただければ幸いである。

本事業の成果や継続事業の経過については､機会を捉え連携校の広報誌や関係の学会･研究会、職員の研修会などで発表して、当該事業の成果だけでなく戦略的大学連携支援事業の意義や有用性について広く普及して行きたい。

戦略的大学連携支援事業事務局
（愛知県立大学学術情報部）

連携校の学長と図書部会･教育部会の教職員（拡大運営委員会終了後撮影　２３．３．２３）

文部科学省 平成20年度戦略的大学連携支援事業

共同図書環（館）のネットワークシステムの構築と
新たな教養教育プログラムの開発

事 業 報 告 書

本　編　／　連携校の教職員・学生・講師からのレポート

愛知県立大学（代表校）
愛知県立芸術大学
愛知淑徳大学
名古屋外国語大学
名古屋学芸大学
長久手町
愛知県図書館

目　次

はじめに

第１章　連携校の学長からの報告

大学連携事業「共同図書環（館）のネットワークシステムの構築と新たな教養教育プログラムの開発」に思うこと ・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
愛知県立大学　学長　佐々木　雄太

大学間連携から地域へ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
愛知県立芸術大学　学長　磯見　輝夫

違いを共に生きる ―その実践と拡大の機会として ・・・・・・・・・・・・・・ 3
愛知淑徳大学　学長　小林　素文

日本中の大学連携のあり方のお手本となる ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
名古屋外国語大学　学長　水谷　修

大学連携支援事業について思う ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
名古屋学芸大学　学長　井形　昭弘

＜特別寄稿＞

「図書環」のつなぐもの ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
名古屋外国語大学　副学長　松野　和彦

「共同図書環」のアイデアが生まれるまで ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科　加藤　義信

共同図書環と“Tosho Ring” ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
長久手町中央図書館館長　本多　英太郎

第２章　共同図書環

Tosho Ringから生まれた温かな Rings ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
愛知県立大学学術情報センター長　宮崎　真素美

Tosho Ringと芸大図書館 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
愛知県立芸術大学芸術情報センター長　寺井　尚行

Tosho Ring の起爆力と可能性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
愛知淑徳大学図書館長　久保　朝孝

大学図書館運営への学生の関与 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長　岸　恭一

公共図書館からみた共同図書環事業について ・・・・・・・・・・・・・・・ 13
愛知県図書館　村上　昇平

共同図書環(館)が示した大学図書館の新しい機能と課題 ・・・・・・・・・ 14
愛知県立大学学術情報センター長補佐　中田　晋自

共同図書環ネットワークシステム“Tosho Ring”開発の成果と課題 ・・・・・・ 15
愛知県立大学学術情報部　落合　弘之

Tosho Ringを活用した実践授業について ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
名古屋外国語大学　大矢　芳彦

魅せる共同図書環 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
愛知県立大学学術情報部　大仲　聡子

愛知県立大学におけるTosho Ring ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
愛知県立大学学術情報センター図書館　新川　裕美

共同図書環（館）Tosho Ring 3年間を振り返って ・・・・・・・・・・・・・ 20
愛知淑徳大学図書館事務室長　武藤　まり子

目　次

共同図書環事業の成果と今後 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館課長 守田 正江
共同図書環が大学図書館を変えていく ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館 槙島 隆教
Tosho Ring サポーターとともに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館 東槇 典子

＜特別寄稿＞

戦略的大学連携事業に関わって ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
愛知県書店商業組合理事長 谷口 正明
共同図書環ネットワークシステムの開発に参加して ・・・・・・・・・・・・ 25
株式会社ジェンアークス代表取締役 田中 真一

第３章　教養教育プログラム

教養・学び・生きること ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
愛知県立大学学術情報センター長 宮崎 真素美
教育部会の活動と成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
名古屋外国語大学総合教養主任 石田 勢津子
大学の前途 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
名古屋学芸大学教養教育委員長 大島 龍彦
「連携して行うキャリア支援・キャリア教育」の意義 ・・・・・・・・・・・・・ 29
愛知淑徳大学学生部長 石田 好江
連携によって可能になる地域貢献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
愛知県立芸術大学教養教育等(音楽学部)21年度主任 水野 留規
図書館が元気な大学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
愛知県立大学教育研究センター長 宮浦 国江
外から三分の二見た大学連携事業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
愛知県立大学学術情報センター長補佐 臼田 毅
地域連携から見た長久手学の可能性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
愛知県立大学地域連携センター長 加藤 史朗
長久手学の成果と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
愛知県立大学地域連携センター長補佐 福沢 将樹
地域が盛り上がる気持ちを育てる ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
愛知淑徳大学 谷沢 明
「長久手の古地図を読む・歩く
―旧版地形図にみる長久手の原風景― 」を通して ・・・・・・・・・・・ 36
愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科 山村 亜希
愛知郡長久手町の民俗芸能－棒の手と馬の塔－ ・・・・・・・・・・・・・・ 37
愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻 今野 元
祭りを伝える ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
長久手町中央図書館 三浦 肇
参画した教職員の「情熱」「思い」が『長久手学』を構築した ・・・・・・・ 39
愛知県立大学学術情報部長 春日井 隆司
待てば海路の日和あり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
愛知県立大学学術情報部 坂元 理恵

目　次

フィールドワークは参加者に何を残したのか ・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
愛知県立大学学術情報部 石田 里美
東西の地獄絵のコーディネーターとしての成果と所感 ・・・・・・・・・・・ 42
愛知県立大学日本文化学部国語国文学科 中根 千絵
大学連携事業でのキャリア科目の開放 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
愛知県立大学キャリア支援室長 吉川 雅博
プログラムのサポートを通して見えたこと ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
愛知県立大学学術情報部 刑部 理恵

＜特別寄稿＞

自然豊かな東部丘陵からの提案 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
愛知県立大学非常勤講師
名古屋市立大学生物多様性研究センター研究員 小木曽 学
フィールドワークとしての私の農業について ・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
長久手町役場田園バレー事業課 成瀬 守
長久手野菜に惚れて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
高野 泰輔
「長久手学2010」参加日記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
橋本 暁夫・小夜子
地域社会の総力結集へ向けて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
（株）電通名鉄コミュニケーションズ局長 古園井 直紀
がんばれ!大学生たち ～5大学セミナーの現場から～ ・・・・・・・・・・・ 50
中部日本放送（株）総務部長 北辻 利寿
合同キャリア教育に参加して ～交流の場の重要性～ ・・・・・・・・・・・ 51
株式会社エンパワー代表取締役 橋本 友美
大学連携事業 集団模擬面接に参加して ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
トヨタホーム（株） 服部 誠
学生と企業間、双方向の“思い”を育む共同プログラムにするために ・・・・・ 53
株式会社阪急交通社中部メディア営業一部長 田中 明
振り返ってみてわかること ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
愛知県立大学文学部社会福祉学科卒業生
四日市社会福祉協議会 阿部希美

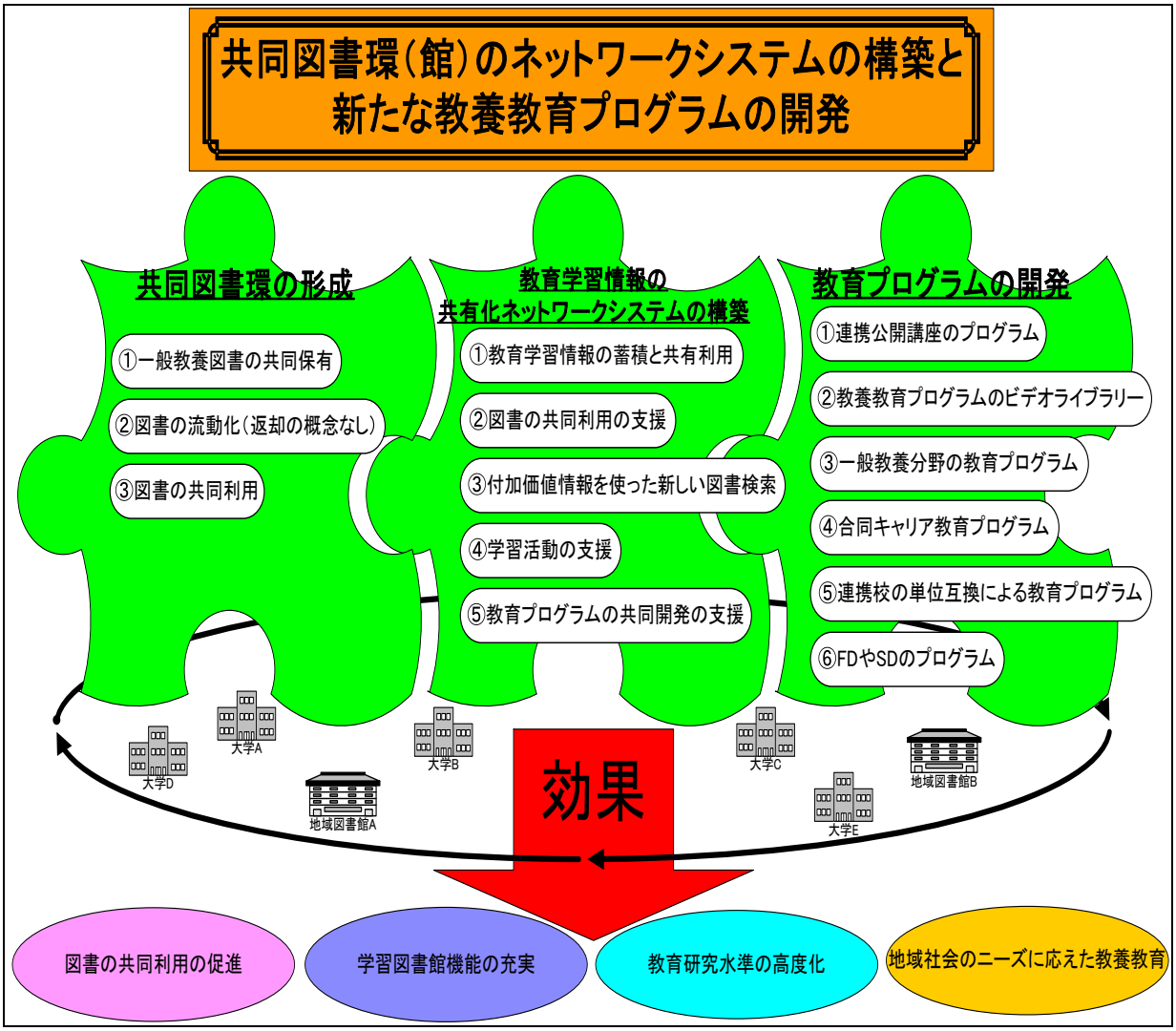
「共同図書環（館）のネットワークシステムの構築と新たな教養教育プログラムの開発」の事業概要

１　事業目的

平成２０年度から平成２２年度の３ヶ年、名古屋東部丘陵地域の５つの県立・私立大学（愛知県立大学、愛知県立芸術大学、愛知淑徳大学、名古屋外国語大学、名古屋学芸大学）と２つの地方自治体（長久手町、愛知県図書館）が連携し、図書館の共同蔵書構築と併せて新しい図書検索システムの開発と教養教育プログラムの共同開発、キャリア教育や FD 活動の共同実施、新たな地域学の構築と公開講座の開催などに取り組む事業である。

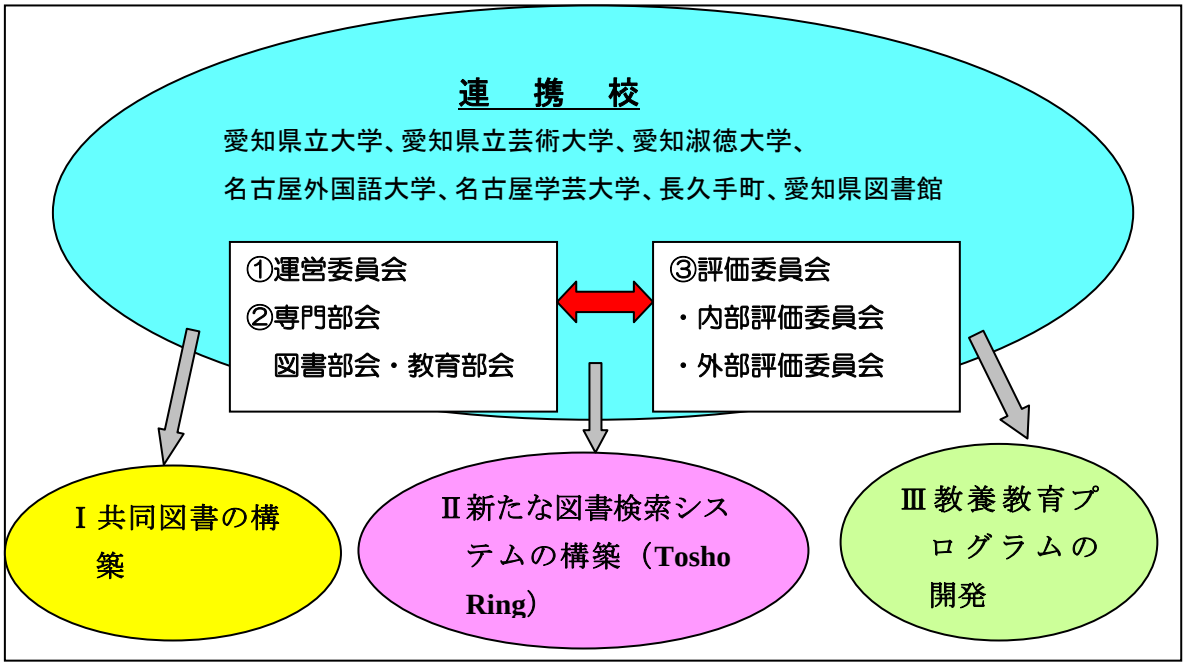
将来的には、本事業の成果を名古屋東部丘陵地域の他の大学や研究機関へ普及することで連携の輪をいっそう広げ、この地域全体の教育研究水準の高度化を図るとともに、「知の拠点」の名にふさわしい地域の大学連合の形成を目指すこととした。

２　事業概要



３ 実施体制

５大学の学長と長久手町長、県立図書館長で連携事業の方針や計画をなどを決定する「運営委員会」を設置。その下に図書部会と教育部会を設置し実務や企画の調整を行った。



４ 事業の展開と課題

（1）「共同図書環事業」

（共同図書の構築・新たな図書検索システム Tosho Ring の構築）

Ａ「共同図書環事業」の特徴

ⅰ 既存図書とは別に、連携校の学生・教職員が選んだ新たな共同図書の構築

ⅱ 利用者である学生の視点に立った次世代的OPAC機能と、図書の取り寄せ処理が可能な図書管理機能を持つ独自システム(Tosho Ring)の開発

ⅲ 図書館間の返却を行わないで、取り寄せ先の図書館が保管することによる取り寄せサービスの効率化

ⅳ 連携校の学生が利用した図書に関して情報交換することができる書評活動

ⅴ 共同図書を学生が選べる様々な多様な選書イベントの実施

ⅵ 広報ツールの作成や学生選書バスツアーの企画・運営への学生の参画

ⅶ Tosho Ringを活用した授業の実施（読書、書評の書き込み、意見交換など）

Ｂ 成 果

ⅰ 一般教養書を中心にした多様な共同図書を約１１，０００冊構築したことにより、Tosho Ring 稼働前も含め約２年間で２１，０００冊の貸出となった。

ⅱ Tosho Ring の ID 登録者数が約３，０００名（連携校の学生の６分の１）となり、活発な書評の投稿が行われた。また、図書の貸出をする上で有効な情報となったほか、書評をめぐって学生間の意見交換も行われるようになった。（投稿数約１，７００件）

ⅲ Tosho Ring を活用した授業では、選書や読書・書評活動を進め、学生の選書に対

する意識の変化、講義参加への意欲の向上、学生の図書への興味を喚起、書評を書くことで文章力の育成となるなど、導入教育としての効果は高かった。

ⅳ 学生がキャラクターのデザインやイベントに参画したほか、連携校の学生間での交流が進む機運が生まれた。

ⅴ 共同図書を利用することで図書情報への関心を高めることになり、連携校の図書館の利用率の向上に繋がった。

ⅵ 上記の成果を共有することにより、２３年度から３ヶ年を目安に費用負担をしてTosho Ringを継続することになった。

C 事業を実施する上で工夫した点

ⅰ 連携校図書館の実務担当者による会議や専用のサポートサイトを活用して意見交換、情報の集約、会議記録の掲載を徹底した。（現場主義と情報の共有化）

ⅱ 画一化した事業の進め方ではなく、連携校の状況に応じた取組みを尊重し、固有の知恵やアイデアで事業を進行した。（緩やかな連携）

ⅲ 利用者である学生の視点でシステムを構築するため、事前リサーチや学生からのヒヤリング、利用者の動態調査を有効に活用した。（利用者視点）

ⅳ 短期間のシステム開発、効果的なカスタマイズ化、既存システムとのダブルスタンダードへの配慮から段階的で計画的な開発・運用を、システム開発会社と進めた。（段階的で計画的なシステムの開発）

D 今後の課題

ⅰ 共同図書の書評数や貸出数の増加

ⅱ 学生参加のスキームづくりとサポート体制の整備

ⅲ 書評活動や選書活動を通じての学生間の交流促進

ⅳ 図書館システムベンダーや図書館関係者、大学の研究機関との連携による次世代OPACの開発研究

ⅴ 学習活動における読書や書評活動の効果を検証し、図書を起点とした学習や学習支援の方法の研究

（2）「教養教育事業」

A 「教養教育プログラム事業」の特徴

ⅰ 連携校の知見である文学、歴史、芸術、音楽、教育などの特色を活かした教養教育プログラムの実施

ⅱ 大学の地域貢献をテーマとした魅力的なシンポジウムや新たな公開講座の実施

ⅲ 連携校の学生を対象にした合同キャリア教育プログラムの実施や企業や団体との連携による学生のキャリア支援シンポジウムの実施

ⅳ 教養教育プログラム研究会など教員間の多様な交流を促進し、新たな教養教育プログラム開発の基礎を形成

Ｂ 成 果

ⅰ 多様な教養教育プログラムとして、連携校の学長による「地域連携シンポジム」、連携校の枠組みを活かした「合同キャリ教育プログラム」、連携校の教員の知見を活かした地域学講座「長久手学」を新たに立ち上げるなど１７のプログラムを実施した。加えて、６回の連携校教員による教養教育研究会を実施した。その結果、本プログラムへの参加総数は１，６００名であった。

ⅱ「地域連携シンポジム」を契機に連携校学長と近隣の長久手町長や日進市長による学長懇談会を定期的に開催し、今後の地域貢献や連携を模索することになった。２３年度当初には、連携校の学生や近隣の大学の学生を対象とした「首長と語るツアー（仮称）」を実施することになった。

ⅲ 地域学「長久手学」は参加者のニーズや学際的評価、地域連携の成果として、対象エリアを拡大して「愛知・長久手学」として連携校協力のもとで継続することになった。

ⅳ 合同キャリア教育プログラムにおいては学生からの継続ニーズも高く、複数の大学の連携で進める効果もあって、学生のインターンシップの実施プログラムとして「模擬集団面接」と「卒業生に聞く」を継承事業として取組むことになった。

Ｃ 事業を実施する上で工夫した点

ⅰ 教養教育プログラム研究会は、連携校の教養教育の状況報告や直面している問題点にフォーカスして意見交換を行った。また、連携校の教養教育の関連教員のFDとして参加を促した。（教養教育の現状認識の促進）

ⅱ 特色あるプログラムとしては、連携校教員からの提案を周知し、関心のある教員間のコーディネートを進めるために場の設定や情報交換を進めた。
（教員の知見のコーディネート）

ⅲ 本来、キャリア教育プログラムは競争関係にあるため、１～２年生を主体として複数の連携校ならではの斬新な設定で実施した。また、複数の異業種の企業からの参画を得るなど、従来にはない新たなスキームでのキャリア教育プログラムを目指した。（連携を活かした特色あるキャリア教育）

ⅳ 「長久手学」は連携校教員に加え、他大学、自治体などと共同で講座を計画するため、事前調査や関係教員からの意見集約の上、かつ、継続を意識した内容とした。（先見性をもった地域貢献）

Ｄ 今後の課題

ⅰ 連携校の教職員間の意見交換や学生の交流の場の提供

ⅱ 学生のニーズの応え、学生の参画を活かした「キャリア教育プログラム」の実施

ⅲ 新たな教養教育プログラムの研究

ⅳ 連携校の知見を活かした「愛知・長久手学の実施」

ⅴ 地域と学生との交流プログラムの実施

５ 事業の目的が達成できた要素

（１）連携校の成り立ちや特色を活かした緩やかな連携を進めた。

（２）連携校の学長のイニシアティブが発揮された。

（３）各連携校において学長と事業担当の教職員との間で成果や課題に関するボトムアップが適時行われていた。

（４）教育部会、図書部会の教職員の熱意やアイデア、細やかな対応があった。

（５）専用のサポートルサイトや定期的会議で、情報や課題認識の共有化を進めることができた。

（６）学生がプログラムの企画や実施に参画して十分にスキルを発揮した。

評価委員会における事業評価

内部評価委員	長久手町中央図書館　館長	本多　英太郎
	愛知県立大学　教授	井手口　哲夫
	名古屋外国語大学　副学長	松野　和彦
外部評価委員	都留文科大学　学長	加藤　祐三
	金城学院大学　准教授	薬師院　はるみ

評価委員会の模様

1　共同図書環事業の評価・アドバイス

①当初より素晴らしい取り組みと思う反面、残念に思っていたのは３年期限の取組みということであったが、更に継続するということで嬉しく思う。これだけのことを３年で終わるのはもったいない。

②授業の一環で、学生を共同図書の活用や運用に参加させ実働させたことは、有効な方法であった。また、学生が他の連携事業へ参加したことはより事業効果を高めることになっている。

③いきなりコアは部分に踏み込むのではなく、それぞれの大学で緩やかにできることから始めたことが良い結果を導き出している。

④Tosho Ring を活用した授業は、学生の反応を活かしながら双方向的な講義を展開する上で効果的であったと思う。これからの教育のモデルとなる取組みであった。特に、学生に書評を書かせることは読む力や書く力、文章を構成する力を養う上で効果的で

あった。このことは導入教育として注目するべきことである。

⑤教員と学生による選書は、学生の選書に対する意識の変化、講義参加への意欲につながっている。また、参加学生は一般的な消費活動をするのと選書は違っていることを実感したことと思う。

⑥共同図書環事業が、各大学の図書館の利用者が増えるなどの効果があったことは、多くの学生が、当該事業に魅力を感じ利用した実態があったからである。

⑦いくつかの大学が協力し合い、システムにプラスアルファのコンテンツを設計準備してはどうか。

⑧スカイプ、画像、動画で図書紹介やバスツアーの疑似参加が可能であれば、実際に参加している感覚が得られるだろう。

⑧システムについては、企業や研究機関などをと情報を共有して、新たなコンテンツの開発や商品化に向けて取組むことも成果の発展として必要である。

⑨今後の継続を考えると、各大学の学生用図書費の一部を共同図書用に使うこととしてはどうか。

2　教養教育プログラムの評価・アドバイス

①大学間でうまく手を取り合って機能したことによって、連携の礎ができた感じがする。この連携の枠組みに近隣の日進市が参画したことは連携の成果である。長久手学を発展させ日進市や瀬戸も対象にすることは面白い展開である。

②今後は職員の交流を積み重ねお互いを理解し、事例発表会を行ってはどうか。

③各大学間の学生や教職員の交流、自治体との協力・連携を進める。

④合同キャリア教育は複数の連携校の参画がないとでないとできないプログラムで、新たなキャリア教育として注目したい。

3　運営等の評価・アドバイス

①GP 等が大学教育制度・内容・方法等に定着している事例としてまとめ、文科省へ報告していく。各部会のできたことできなかったこと、これからやりたいことを議論すると、課題やアイデアが出てくる。

②教員だけではここまでできない。職員の意欲で引っ張っていくこれからの大学の良い前例となった。

連携校の学長から
「さらなる連携を進めるために」

●連携校学長
愛知県立大学　学長　佐々木　雄太
愛知県立芸術大学　学長　磯見　輝夫
愛知淑徳大学　学長　小林　素文
名古屋外国語大学　学長　水谷　修
名古屋学芸大学　学長　井形　昭弘

＜特別寄稿＞
名古屋外国語大学　副学長　松野　和彦
愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科　加藤　義信
長久手町中央図書館　館長　本多　英太郎

大学連携事業「共同図書環（館）のネットワークシステムの構築と新たな教養教育プログラムの開発」に思うこと

愛知県立大学　学長　佐々木雄太

平成20年度に文部科学省の戦略的大学連携支援事業として標記事業が採択され、早くも3年度目が終了しようとしている。この事業の構想は、もともとは愛知県立大学図書館職員によるブレーン・ストーミングから生まれた。近隣の大学の図書館をひとつの環につなぐ「共同図書‘環’」を構築できないかという構想であった。このアイディアは、文部科学省との協議を経て、図書館のネットワークを教養教育に関わる大学間連携や大学と地域との連携につなげようという豊富なコンセプトに膨らみ、近隣4大学のご賛同を得て申請し、採択されることになった。

正直なところ、当初は、この事業を発案した本学とこれを受け入れてくださった連携諸大学との間の、取組に対する温度差を心配した。しかし、これは杞憂であった。連携諸大学の学長をはじめ関係教職員の深いご理解と積極的なご協力の下で、2年度目に入った時から本事業は、当初の予想を超えた活発な展開を見ることになった。多くの学生がTosho Ringに登録し、少数ではあるが積極的・自主的にこの事業や図書館の運営に関わってくる学生も登場した。これまでにない5大学の学生間の行き来も生まれた。各大学の図書館はいずれも活気を増した。事業も、共同図書の構築、共同図書の利用と教養教育を結ぶ情報ネットワークの活用、5大学の共催による教養教育関連の講演会、講座、シンポジウム、そして合同キャリア教育「模擬集団面接」の開催、さらに5大学の教員と大学の所在地長久手町との協力による「長久手学」の試みなど、多彩に展開された。5大学学長と日進市長、長久手町長とをパネリストとする「地域連携シンポジウム」は、「大学のある街づくり」を目指そうという市、町と大学との連携を促進するための重要な契機となるイベントであった。

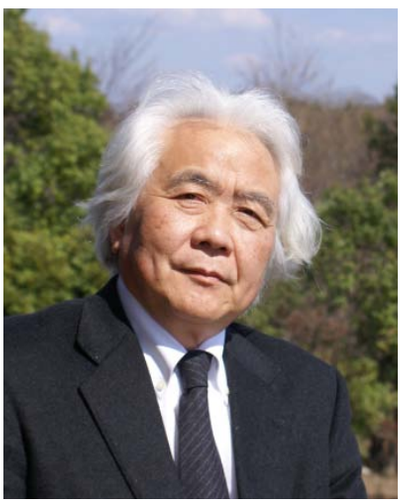
何が成功の理由であったのか。第一に、本事業の趣旨を共有した5大学教職員の熱意である。そして、おそらく、大学連携という課題を大仰に振りかぶらずに、教養教育や図書館といった教職員の身近な活動領域に見出したことが大きな要因ではなかったか。教養教育についても、それぞれの大学の教育理念が埋め込まれているコアの部分をいじるのではなく、差し当たってはその周辺で共有できる課題（例えば、キャリア支援教育や「長久手学」）に共同の余地を求めたことである。さらに、名古屋市東部丘陵線（リニアモーターカー）沿線の大学という地域的アイデンティティの共有も有意義で、これが大学所在地の自治体との連携を促す基盤にもなった。

文科省の教育改革支援プログラム（いわゆるGP）などこの種の支援事業の大きな問題は、所定の年限の助成金が切れた後の対応である。とりわけ複数大学の共同事業となれば、継続について合意を形成することは必ずしも容易ではない。しかし、これも杞憂であった。幸い本事業は、参加5大学が資金を拠出して、少し規模を縮小してではあるが、差し当り3年間継続することに合意した。その先に何が生まれるか、楽しみである。

少子化に伴う問題を含めて大学を取り巻く状況は深刻である。本事業の背景には各大学それぞれの危機感が存在する。学生本位の、個性ある大学づくりをどう進めるか、複数の大学が知恵を出し合い、知的資源、物的資源を寄せ合って構想しくことも、ひとつの有意な方法であろう。

大学間連携から地域へ

愛知県立芸術大学　学長　磯見輝夫



三年間の「Tosho Ring」の連携事業は一応の区切りと、その継続による新たな出発を迎えようとしている。この事業はまず学生の図書への関心を高め、各大学の図書館の活性化につながった。また、その中で学生間の交流も生まれ、特に学生選書ツアーはユニークな試みであり、学生の主体的な力を養う効果があったと思われる。また、長久手学、教養教育プログラムなど、それぞれの教員、学生の工夫があって、その事業が拡大したことも特筆に価する。この「Tosho Ring」の事業は、今後も予算の範囲内で継続してゆくことが望ましい。

この事業において近隣の５大学に新たなきずなができ、また、地域への貢献の芽が生まれたことは、将来この地域に、思いがけない展開が生まれるきっかけができたということであろう。また、この連携に長久手町や日進市という地域の人々が関わることで、地域貢献は現実的なものとなり、ともすると形式的になりがちな大学間の連携を実質的な活動につなげてくれる。

大学連携、地域連携といっても、実際に連携するのは、教員、学生あるいは職員、また住民であり、人間のつながりが全てを動かしてゆく。そのきっかけを提示することが、この事業の役割であろう。

５大学にはそれぞれの特徴があり、それを生かすことができれば、大きな成果を挙げることができる。これまでは「図書」という各大学に共通したもので連携ができたが、今後それを展開するためには、それぞれの大学が得意とする分野や特徴をどう結びつけることができるか、それが鍵となろう。長久手学や教養教育のプログラム等もそれが有効に生かされたことで成果を得たといえる。各大学に共通するものと、それぞれの大学が得意とするものと、両面から考えていけば良い試みが生まれるのではないか。

以前から長久手町文化の家で行っているオペラ公演では、名古屋学芸大学のメディア造形研究科の先生と学生の協力で、見事なDVDを制作して貰っている。また、長久手町文化の家の援助に支えられて毎年開催される、ながくてアートフェスティバルには、芸大の有志が「ながくて芸術団」として参加しているが、草の根的に、大学という枠を越えて参加する学生が増えている。おそらくこうした活動への学生の欲求は潜在的に眠っているのであって、大学連携の中で掘り起こせば、様々なところで開花するのではあるまいか。

まず連携にはそれぞれの大学に対する理解が必要だろう。参加している他の４大学についてどれだけの知識を持っているかと問われれば、残念ながら私の知識はそう多いとはいえないと答えるしかない。その知識を共有するための、各大学の活動や教育について、この連携事業を視点にした資料を作るのも一つの方法ではないか。各大学に対する知識を広げ、その中から新しいプランを考えるヒントになるであろう。

大学間、地域と連携が進み、大学は地域に学び、地域は大学の知的資産を利用する。大学と共にある町の実現に期待したい。

違いを共に生きる－その実践と拡大の機会として

愛知淑徳大学　学長　小林素文

本学は昭和50年4月に、文学部（国文学科・英文学科）のみの女子大として開学したが、その後平成7年4月に現代社会学部を増設するに当たって、明治38年以来の女子校の伝統を乗り越えて男女共学とした。その際、新たな教育理念を表現するために、「違いを共に生きる」を標語として決定した。また、同時に「地域に根ざし世界に開く」を、教育研究のあり方の一つとして目標化した。

標語の意味するところは、性・人種・国籍・年齢の違い、宗教・信条・思想の違い、社会生活又は専門領域における経験の差、ハンディキャップの有無等々の、様々な「違い」を乗り越えて、教育研究の場における相互理解・相互研鑽・相互向上を目指すものである。また、そのためにはまず地域に根ざすことが原点となることを、深く認識したものである。

これを実現するために、本学はその後それまでの愛知淑徳のイメージを越える試みを不断に継続している。具体的には、本学の教育研究を地域に開放するためのエクステンションセンター、地域社会と大学とのパートナーシップを推進し学生が社会の一員として地域の発展に貢献できる態勢を支援するコミュニティ・コラボレーションセンター（略称CCC）、地域社会の医療体制をサポートするためのクリニック（眼科・耳鼻咽喉科・心療内科・精神科・内科・糖尿病内科）、さらには地域の方々からの高い信頼を得ている心理臨床相談室の開設等々。

また、大学の基本組織である学部の編成も、平成22年度をもって以下のような8学部体制に再構築した。文学部（国文学科／英文学科／教育学科）、人間情報学部（人間情報学科）、心理学部（心理学科）、メディアプロデュース学部（メディアプロデュース学科）、健康医療科学部（医療貢献学科言語聴覚学専攻・視覚科学専攻／スポーツ・健康医科学科）、福祉貢献学部（福祉貢献学科社会福祉専攻・子ども福祉専攻）、交流文化学部（交流文化学科）、ビジネス学部（ビジネス学科）。いずれも時代と社会の要請に応え、かつ将来の必要に備えて編成したものである。

このたびの戦略的大学連携支援事業の内容は、大づかみに言うなら、連携大学間における図書と教養プログラムとの共有又は共通利用ということであろう。それを実効あらしめるためには何が必要なのか。それは連携する各大学が、それぞれの個性を遺憾なく発揮するということに尽きるのではなかろうか。別の言い方をするなら、「違い」すなわち個性を際だたせるということである。「違い」があるからこそ、「共に生きる」意味がある。

すべての大学が百貨店を目指す必要はあるまいし、またそれは不可能なことでもある。それぞれが専門店としての個性と実力を身につけ、地域全体として総合百貨店が実現できれば、それでよいのではないか。名古屋の東部丘陵地帯にキャンパスを置く各大学が（連携校の拡大が望まれる）、それぞれの個性をキラキラと光り輝かせながら、相互に足らざる所を補い合い、また単独では不可能な学際的教育プログラムを編成し、さらにはともに充実・発展できる大きな仕組みが、このプロジェクトを契機に実現されることを切に願ってやまない。

日本中の大学連携のあり方のお手本となる

名古屋外国語大学　学長　水谷 修

３年間という限られた年月ではあったが、この大学連携支援事業の作りあげた成果は極めて大きいものであった。

大学連携の事業は様々な形で各地で実施されてきているが、その多くは横への広がりに重点が置かれて地域社会を深く巻きこんだものとはなっていない。

５つの大学に数が限定され、地域社会と密接に結びついた形で実施されたことの成果は活動の内容をより深く厚味のあるものとした。

図書館の連携活動から出発したかと思われた活動は図書の利用の範疇にはとどまらなかった。教養教育のプログラムにも活動は拡大し、活発な交流活動を展開した。

さらにそれは地域学―長久手学のような形を取り、地域社会の中に深く入りこんでいった。それに加えて活動はキャリア教育の領域までにも進展していった。

恐らく企画の段階からこういった進展をめざす計画が愛知県立大学の事務局の中にはあったのであろうが、実に見事に事業は展開していった。関係者としてその先見の明に敬意を捧げなければならない。

連携して活動する組織づくりでは、ともすれば数を多くすることに重点が置かれがちであるが、組織の数を限定し、より深く実効のある成果を求めようとする方式は、今後の大学と地域・実社会組織を結びつけるやり方に大きな示唆を与えることになるだろう。

この事業が３年で終ってしまうことがあっては大きな損失となる。もうしばらくは頑張って地域に結びついた大学連携のモデル作りを推し進めてほしいと心から思う。

すでに今までの活動の中にも芽ばえてきているが、更に意義のある活動を深めていくために第２期、第３期の計画を用意すべきであると考える。

その中で是非進めていただきたいことは、少なからずあるが、すでに開始されている教養教育領域の研究活動は教育社会学的にとらえても大きな意義を持つものと思われる。

地域社会の中での文化活動、交流活動との強い結びつきを用意することも大きな意義を持つ。どのような領域に重点を置くかについては予測することが難しいが、成人教育の領域、国際化対応の領域での連携活動は社会から大きく歓迎されるものと思われる。

幸い、日進市、長久手町の行政担当者も誠意をもって参加していて下さるのであるから、じっくり相談して企画を立てていくべきだと思う。もしかしたらそのための行政と大学そして住民をかかえこんだシンポジウムの開催も企画の中に入れても良いかもしれない。

事業の内容を広げすぎるのは決して望ましくないが、より深く地域社会と結びついた大学連携の形は他の地域での活動のお手本となるに違いない。

大学連携支援事業について思う

名古屋学芸大学　学長　井形昭弘

本学は三年間、愛知県立大学の主導する戦略的大学連携支援事業に参加させていただき、大きな成果を得たことを喜び、かつ誇りに思っている。

各大学は公立、私立を問わず、それぞれの建学精神に則って知の探求と教育に成果を目指しているが、社会あっての存在であり、特に地域社会とは連携と成果還元の視点から共に発展すべき責務を有している。

その大きな使命を遂行するためには、各大学の努力とともに地域の各大学と相互に連携、協力してその相乗効果を挙げることが出来る。この視点から先進的な愛知県立大学は大学連携支援事業を先導し、われわれもその目標を充分理解して欣然参加した。今、三年間の本事業を経て、多くのことを学び、かつ一段と大きな成果を挙げることができた。

最初に本事業では各図書館が軸となり、Tosho Ring の立ち上げ、図書の共有と図書館相互利用の具体化を介して各大学の図書館における制約の壁を突破する力となった。このような連携は図書館に限定されず、各大学相互の理解を深め活性化する効果をもたらした。特に現在はまだ小規模ながら、学生選書ツアーも今後さらに展開して行くことと期待している。また、共同での模擬集団面接や地域学の創成などにも大いに刺激を受け、切磋琢磨のエネルギーとなった。

現在、それぞれの大学は生き残り時代のライバル関係にもなりうるが、この大学連携支援事業の成果を見ると、一足す一を三にも五にもする力となると思われる。特に印象に残ったのは 2010 年 6 月共同で開催した地域連携シンポジウムである。各大学から地域貢献の実績、経験あるいは進め方を発表し、中日新聞編集局長の司会で地域の首長をも交えて相互理解を進め、成果を挙げることができた。このシンポジウムを介して相互に地域貢献のあり方を学び、次の発展に結びつけることができたのは望外の喜びであった。このシンポジウムはマスメディアにも報道され、地域からも高く評価され、今後も継続して開催することを希望している。本学では 2011 年 2 月に「大学における教養教育の現状と未来」とのシンポジウムを開催し、学内研究班の成果を発表したが、この成果も是非関連大学にも広めたいと希望している。

私は「対立点を抑え、共通点を広げる」ことを人生のモットーとしてきたが、その意味で、この大学間の連携支援事業は私にとってピッタリの事業であった。

今、三年間の事業試行を終えて各大学はその成果を確認し、多少の負担の上、本事業を継続するとの意思統一ができたことを喜んでいる。

「図書環」のつなぐもの

名古屋外国語大学　副学長　松野和彦

それは「しゃれ」で始まったと言ってもいい。古くからの知己である愛知県立大の佐々木学長がある日ふらりと外大に来られ、文科省の主唱する「戦略的大学連携支援事業」の計画に乗ろうと思うが、名古屋外大にも参加してもらえないか、との話。

さし当たってリニモでつながれた大学同士で「図書館の環」を作って共同の蔵書の枠を広げようではないかということであった。複数の大学の「図書環」を作り、そこから教養教育、キャリア教育などのプログラムを含む大学相互の連携事業に広げようというのである。

さっそく学長水谷氏にもその場に加わっていただき、この計画に参加することとなった。

学生が本を読まなくなったと言われるようになって久しい。多様なメディアを通じてのコミュニケーションが可能となった今、それも無理のないことかも知れない。文字を使っての伝達だけでなく、映像・音声を用いてトータルなコミュニケーションが力を持つと言われる時代の中で、動かない文字の列を相手に、そこから意味を取り出す作業に取り組むことは、だんだん難しいものとなりつつある。

特に外国語大学の学生は、音声による伝達に強く惹かれる傾向があり、ややもすれば文字から離れることを志向しがちである。外国語を学ぶことに熱心になればなるほど、日本語から離れ、文字から離れるという段階が生じるのは必然とも言える。

しかし、音声とは時間の流れの中で単線状に提示され、つぎつぎと消えて行くものであり、外国語ともなれば、学習者の習得レベルによっては、さらに不安定な媒体となる。とらえて記憶に残ればよし、残らなければそのままを取り戻すことはできず、無意味な雑音と化してしまう。

だからこそ、「読む」というこの技術を身につけることは、大きな意味を持つことになる。平面状に展開される文字列による安定した提示を通じてであれば、その中から論理の構造をとらえ、大きな全体像を描くという受けとり方が可能となるからである。

外国語習得に集中している者は、無意識で自然な母語の使用との落差から、必然的にコミュニケーション不全を感じざるを得ない。そのため、ときに日本語の文字言語を触れて、バランスを取り戻すことが必要となる。

外国語大学の学生が専攻言語を習得するための訓練に費やす時間は多大であり、そのために、ときに、内容よりも言語の形態への意識が勝る段階があることは否定できない。この連携事業により、他の分野を専門とする学生たちとの交流の場が提供されたおかげで、形態の向こうにある内容への意識を呼び戻すことができたとすればありがたいことである。

時代の変化は速く、読む対象は、紙の書籍のみとは限らない状況となりつつあるが、提示面はことなっても「読む」という技術の有用性は変わらない。

友人たちとともに、読みたい・買いたい本を好きなだけ買うことができるという体験の場となった選書ツアーや、キャリア教育の一環としての合同での模擬面接などは、特に他大学に比べて同質度の高い集団である外国語大学の学生たちにとっては、実に貴重な機会であった。

この事業がさらに発展することを祈るものである。

「共同図書環」のアイデアが生まれるまで

愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科　加藤義信（前学術情報センター長）

2008年4月始め、私は学術情報センター長の任期2年目を迎えていました。今から振り返ると、この時期は、他大学に比べて様々な面で立ち遅れの目立っていた県立大学の図書館に、前年度から少しずつ新しい風が吹きはじめた時期にあたります。図書予算の圧倒的不足、見るべき電子ジャーナル・データベースもないこれまでの状況に、「何とかしなければ」という機運が全学的に生まれ、法人化を機に図書館充実のための特別な予算上の措置も期待できるようになって、学術情報センターの教員や職員スタッフの間に新しい活力が生まれつつありました。そんな中、年度始めの部局長会議で学長より、文科省の2008年度からの新たな大学教育支援事業の一つとして「戦略的大学連携支援事業」が開始されるので、積極的にチャレンジしてみてはどうか、との提案がありました。年間5000万円、3年計画で1億5000万円規模という、当時の図書館の予算からすると一桁違う金額に、正直なところ、まず私は目が眩みました。しかし、ただ「予算がほしい」ということだけであったなら、このとき積極的に手を挙げることにはならなかったでしょう。やはり、「大学連携」というこの事業のフレームがたいへん魅力的に思え、大学図書館のあり方をこうしたフレームの中で模索できるのではないか、という思いが湧いたからこそ、このとき一歩前に踏み出すことになったのだと思います。

それから、申請締め切りまで2カ月という時間的制約の中で、近隣大学図書館との連携事業として何ができるかの議論を図書館内部で開始しました。4月16日夕方には、全図書館職員が参加して大学図書館連携の基本コンセプトを作るためのブレインストーミングを行いましたが、このときの議論の熱気を私は今もはっきり覚えています。中小規模の大学図書館を繋いで図書環とし、大規模大学の図書館に比肩するサービスを提供できるようにしようという奥田センター長補佐からの提案、共同所有によって一大学当たりの利用可能な蔵書数を増やし、本を各大学の需要のあるところに自在に移動させようという発想、1冊の本を巡って教員や学生どうしの間で情報や意見を交換してさらに読書の幅を広げていくことのできる、ダイナミックな参加型図書館情報システムの構築という着想等、このとき様々な斬新なアイデアが飛び交いました。図書館が大好きな教員・職員どうしで図書館の未来を語る愉悦を、私はこのとき初めて味わうことができたと言えます。この中で生まれたいくつかのアイデアが核になって、連携事業案が作られていくことになります。もちろん、予算上・制度上の制約、各連携大学に固有の伝統や事情の違いから、実際の申請案の中身やその後の展開は、断念や縮小や修正を余儀なくされた部分も少なくありません。しかし、あの4月16日に私たちを捉えた「大学図書館の未来に夢をもって前進する」という熱い思いは、大学の枠を越えて広く共有され、この3年間で多くの成果を生んだことを、関係者のみなさんと共に心から喜びたいと思います。

終わりに、県立大学からの提案を快く受け入れ今日まで一緒に歩んでくださった連携大学の諸先生方・職員の方々、終始この事業を支援してくださった佐々木学長、2年目からの事業を見事に花開かせてくださった宮崎現センター長・補佐の先生方、申請書案の作成から文科省との交渉、連携大学間の調整に至るまで本事業の実務を支えた春日井部長、新たな事業展開が労働強化となることを厭わずその時々の課題に真摯に取り組んでくれた職員の方々に、心からお礼申し上げます。

共同図書環と“Tosho Ring”

長久手町中央図書館館長　本多英太郎

地域社会を基盤とした大学間の連携・交流の促進は、各大学固有の知的資源を豊かにするとともに、地域社会の発展に大きく貢献する。それは若い力と知的資源を地域社会に注ぎ込み、さらには大学の教育研究を活性化させることになる。そのような連携・交流を立ち上げる場合に重要なのは、何を共通の基盤とするかということである。戦略的大学連携支援事業「共同図書環（館）のネットワークシステムの構築と新たな教養プログラムの開発」（以下、共同図書環という。）では、この共通の基盤を図書館に据え、教養教育に係る共通の新ネットワークシステムの構築を企図したところに事業の斬新さがある。

共同図書環のアンテナは３本。①共同図書環の構築、②新ネットワークシステムの構築、③新しい教養教育プログラムの開発。この３本のアンテナで結ばれる図書空間は、従来の大学図書館をイメージさせるような閉鎖的な知的空間でも、大学同士の図書館連合といった同質的な教育研究機関の集合体でもない。この空間は、連携各大学が生活基盤とする地域社会、具体的には「農都共生」を目指し、万博理念の継承を町づくりの理念として掲げている長久手町、さらに県下最大の県民のための図書館である愛知県図書館をも包み込んだハイブリッド型の知的空間である。共同図書環は連携大学の図書館ネットワークを回路にして教養教育プログラムの構築という目標を掲げ、大学と自治体という異質な組織を結びつけたのである。学生及び地域住民に身近な図書館という知の拠点から、地域に密着した知的空間を創造したところに共同図書環の大きな成果があると認識してよいだろう。

共同図書環の基礎は図書資料の収集とその活用にある。収集された資料は連携大学の各図書館を保存書庫とし、大学間を循環する。そこでは新たに構築された図書館検索システム“Tosho Ring”が大学間を連結し、学生にとってまさに知的探求のためのアリアドネの糸となる。“Tosho Ring”によって最大の難関がクリアされた。共同図書環の図書資料は大学間の垣根を払い、各大学の教養教育プログラムの構築のための図書館サービスを提供することになる。したがって、重要なのは４点。①共同図書環の所蔵資料を豊かにすること、②資料の選択に学生が恒常的に関与する体制を確立すること、③各教員が教養教育プログラム開発のために、共同図書環を生きた保存書庫として活用する仕組みを構築すること、④事業継続のための資金確保。これが共同図書環の今後の課題であろう。

現行の学習指導要領において「生きる力」を育むことの重要性が指摘されているのであるが、生きる力の涵養は高等教育でも変わらない。その要となるのは教養教育であろう。したがって、新たな教養教育の構築を企図する共同図書環はその基本理念をあらためて確認し、その持続的な発展に取り組むことが重要である。それには地域社会との連携・交流が大きな役割を果たすであろう。大学がどのような強力な絆を地域社会と結ぶことができるかに、共同図書環を核とする教養教育の成否はかかっている。その意味で22年度に実施された地域学講座「長久手学」に大きな期待がかかる。長久手学は、新たな教養教育プログラムの開発、大学の生活基盤である地域社会との協働的な連携・交流強化のモデルとなるであろう。連携大学が地域社会に根を張りながら、共同図書環を発展させ、高レベルの地域協働型の図書館ネットワークの構築と学生の「生きる力」を培う教育力の強化を目指せば、共同図書環が達成した教養教育の成果はさらに豊かなものになると考えられる。

共同図書環

愛知県立大学学術情報センター長　宮崎　真素美（事業責任者）
愛知県立芸術大学芸術情報センター長　寺井　尚行
愛知淑徳大学図書館長　久保　朝孝
名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長　岸　恭一
愛知県図書館　村上　昇平
愛知県立大学学術情報センター長補佐　中田　晋自
愛知県立大学学術情報部　落合　弘之
名古屋外国語大学　大矢　芳彦
愛知県立大学学術情報部　大仲　聡子
愛知県立大学学術情報センター図書館　新川　裕美
愛知淑徳大学図書館室長　武藤　まり子
名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館課長　守田　正江
愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館　槙島　隆教
名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館　東槇　典子

＜特別寄稿＞
愛知県書店商業組合理事長　谷口　正明
株式会社ジェンアークス代表取締役　田中　真一

「共同図書環事業」実績一覧　　（平成２０～２２年度）

＜平成２０年度＞

実　施　日	実　施　内　容
12 月 1～24 日	「近所の書店で蔵書を選ぼう」　（参加者　教職員 6 名、学生 26 名） 図書への関心を高め、貸出を促進するため、学生が愛知県書店商業組合が指定した書店へ出かけ、図書館司書や教員とともに共同図書を選書する事業を展開。
12 月 17 日	「第一回　学生選書バスツアー」書店：ちくさ正文館　（参加者　教職員・学生７名） 学生の図書の貸出促進や書評活動のきっかけとするため、連携校合同によるバスツアーを実施。

＜平成２１年度＞

6 月 5 日	［愛知県立大学図書館］　教員と学生による図書の選書 （参加者　教員１０名、学生１２４名） 平成 20 年度に引き続き、連携校図書館で個別に実施。
6 月 15 日 ～7 月 22 日	［名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館］ 「共同図書環ライブラリーカードデザイン」を学生対象で公募し、利用案内や PR ツールのデザインとして活用。　（応募点数４５点）
6 月 29 日	［愛知県立芸術大学図書館］　教員と学生による図書の選書 （参加者　教員４名、学生１５名）
7 月 1 日	［名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館］　教員と学生による図書の選書 （参加者　教員６名、学生３０名）
7 月 1 日～24 日	［愛知淑徳大学図書館］　大学生に薦めたい本（一般教養図書・準専門図書）選書
7 月 1 日 ～10 月 23 日	［愛知県立大学図書館］　内田樹氏の著作を集めた展示 内田樹氏の教養教育の講演会の開催に合わせ著書の展示を行った。
7 月 2 日	［愛知県立芸術大学図書館］　共同図書環（館）選書募集
7 月 15 日～30 日	［名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館］ 共同図書環サポーター募集　（参加者５名） 各種掲示・配布物作成、書架レイアウト、ノベルティ考案・制作などを行った。
7 月 21 日	［愛知県立大学図書館］　読書チャンレジ開始（第１期）　（応募者３名） 共同図書環への関心と書評活動を促進するため実施。
8 月 26 日	［教員と学生による図書の選書］結果報告
9 月 16 日 ～12 月 9 日	［名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館］ 「共同図書環ライブラリーカードデザイン」原画展の実施。
9 月 24 日	［名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館］ 「共同図書環ライブラリーカードデザイン」表彰式　（授賞者４名）

10 月 13 日	［愛知県立芸術大学図書館］　第二回教員と学生による図書の選書 （参加者　教員４名、学生２１名）
10 月 19 日	“Tosho Ring”運用開始 図書の貸出や書評の書き込み機能があるシステムを新たに開発し、本格的な運用を開始した。
10 月 20 日	［愛知県立大学図書館］　読書チャンレジ開始（第２期）　（応募者２名）
10 月 20 日	［愛知県立大学図書館］“Tosho Ring”運用開始セレモニー　（参列者１０名） 運用開始を周知するために、佐々木学長自ら Tosho　Ring 端末を利用し検索するセレモニーを実施。
11 月 4 日	“Tosho Ring”で連携校の図書を取り寄せる業務を開始。
11 月 5 日	［名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館］「読書スタンプラリー」開始
11 月 18 日	「第二回　学生による選書バスツアー」実施　（参加者２６名） 選書バスツアーも二回目となり、学生や教職員が多く参加した活気ある取組みになってきた。
3 月 3 日	“Tosho Ring”登録 1,000 人目記念品贈呈式（1 月 21 日に達成） Tosho Ring の運用開始から約３か月で達成。　（愛知県立大学　参列者１１名）

＜平成２２年度＞

5 月 24 日 ～6 月 23 日	［愛知県立芸術大学図書館］　「日本と西洋の宗教美術」　展示 教養教育プログラムのシンポジウムである「映像と音で探る東西の地獄絵の旅―神曲と道絵―」に関連した企画として、仏教美術、キリスト教美術に関する図書を展示紹介。
6 月 10 日	「第三回　学生による選書バスツアー」実施　（参加者　教職員・学生２２名） 共同図書環事業の定着とともに、参加学生間での意見交換や学友のための選書活動に関する学生が増えてきた。
6 月 14 日	［愛知県立大学図書館］　「学科専攻２０冊」展示 教員が学生にむけて専門分野への入り口となる図書を選書し、「学科専攻の２０冊」として配架。学生の専門学習意識の向学心を高める効果があった。
7 月 1 日 ～10 月 31 日	［愛知淑徳大学図書館］　「書評・感想文」募集　（応募者２名） 学内随所に掲示し、共同図書環の書評機能の周知となった。
7 月 28 日	“Tosho Ring”登録 2,000 人目記念品贈呈式（5 月 24 日に達成） Tosho Ring の運用開始より約７か月にて達成。4 月の新入生への登録呼びかけの効果ができた。　（名古屋外国語大学・名古屋学芸大学　参列者９名）
8 月 20 日	「次世代 OPAC 研究会」　（参加者　職員・研究者、ベンダー　２１名） Tosho　Ring 成果の普及と図書検索システムの開発に関して情報交換を行った。 また、同研究会の継続を進め、図書検索システムの発展を目指すことになった。
10 月 5 日 ～11 月 5 日	［愛知県立芸術大学図書館］　「芸術祭コーナー」　展示 「あいちトリエンナーレ」、「瀬戸内国際芸術祭」参加アーティストの著書および現代アートに関する図書を紹介。

10 月 13 日	「学生選書バスツアー・学生企画委員会」開催 学生の参加意欲を活かすために、バスツアーの企画運営について学生が主体に取組んだ。 （参加者　教職員・学生１１名）
11 月 17 日	「第四回　学生による選書バスツアー」実施 学生達が学友のために選書し、学生間で選書理由について意見交換した。また、連携校のビューポイントを見学。バスツアー後に、学生から連携校の学生の交流コンテンツ Tosho Ring に新設希望があり、新たに開設した。　（参加者　教職員・学生２１名）
12 月 22 日	［愛知県立大学図書館］　「書評大賞」授賞式　（授賞者３名） 書評活動を促進するために実施し、授賞者との意見交換も行った。
1 月 17 日	“Tosho Ring”登録 3,000 人目記念品贈呈式（12 月 27 日に達成） Tosho Ring の運用開始より約１年２か月にて達成。 （名古屋外国語大学・名古屋学芸大学　参列者５名）
2 月 14 日	実務者会議の開催 3 ヶ年の事業の評価と継承事業と次年度以降の計画について検討

Tosho Ring から生まれた温かな Rings

愛知県立大学学術情報センター長　宮崎真素美

Tosho Ring は、携帯電話やコンピューターから利用者が書き込んだ書評によって本の検索ができ、書評を介して利用者相互の交流を可能にしてゆく、いわば「体温」を持った図書検索機能と言える。ここでは、Tosho Ring 画面のうちそとに生まれたさまざまな “Ring” のいくつかを紹介しながら、それらにかよう「体温」の意味を明らかにしたいと思う。

まず、連携５大学の学生・教職員あわせて登録者数 3000 人を超える Tosho Ring の画面の中でおこなわれている交流の一例を紹介したい。誰もが知る夏目漱石の『こころ』をめぐるものである。県立芸大の学生が自身の書評で、「K がお嬢さんのことが好きとわかっていながら、K がいないときを見計らって結婚を申し込んだ「先生」は卑怯だなと思ってしまった」と感想を述べたところ、同じく芸大生から、「「先生は卑怯だと感じた」ということに強く同意します」という書評が投稿された一方で、「私はお二方とは違うように感じました。卑怯だとは思うものの、（中略）友人との恋愛での争いというのは日常でもあり得ることであります」という名古屋外大の学生による投稿が重なった。人間の「こころ」のありようを、それぞれが生身で照らした温感あふれる思いの行き交いを見ることができる。

さて、このような内側での交流に加えて、実は画面の外側にたくさんの Ring が生まれたことも Tosho Ring の誇るべき特徴である。５大学で共有する図書は、現時点で約１万冊にのぼるが、そのうちの１割程度を占める約１千冊の図書は、学生と教職員で出かけた４回の「選書バスツアー」での選書に拠っている。毎回十数名の学生たちが参加し、５大学の位置する東部丘陵地区から名古屋市内の書店へバスを仕立てて出かけ、各自２万円程度の選書をするのである。１時間ほどの車中では好きな本の話などしながら本好きならではの交流を深め、書店での選書ののちは、それぞれお薦めの１冊を披瀝する盛り上がりを見せる。このツアーをきっかけに、連携大学でおこなわれている講演会などの催しに足を運ぶようになった学生も生まれた。

そのほか、各大学図書館ではそれぞれに工夫を凝らした試みが展開された。名古屋外語・学芸大図書館が先陣を切った Tosho Ring ノベルティーグッズの制作やデザインコンテストは他大学に刺激を与え、県立大では Tosho Ring コーナーの季節展示や教員たちを巻き込んでの「学科・専攻の 20 冊」と、その書評大賞など、各大学図書館に新しい空気を送り込むことに成功した。これは、学生のみならず、この事業を運営する各大学図書館の職員の人たちの交流を意味しており、「図書館雑誌」をはじめとする関連雑誌・研究会・学会などで積極的に報告もなされた。そして、教員たちによる Tosho Ring 活用授業や、授業単位での教員と学生による選書への積極参加が、Tosho Ring の基盤をしっかりと支えた。

一見、画面の中の交流で完結していそうな Tosho Ring の眼目は、実は、画面の外へ飛び出し、顔と顔を合わせ、話をし、楽しみを共有するというところにある。同じ土地柄にキャンパスを置く、言わばご近所の５大学による連携は、そういった「体温」を感じられる幅広い人的交流の実現に大きな意味を持っていたのである。

Tosho Ringと芸大図書館

愛知県立芸術大学芸術情報センター長　寺井尚行

戦略的大学連携支援事業の一環として実施されたTosho Ringでは、様々な関連行事、会議、他大学図書館の見学会等が開催されました。関連行事、書架や書籍整備等の直接的な活動の有益性は言うまでもなく、会議を始めとして関係者が集まる場における情報交換は、効率的な運営や利用者サービスの向上に大きく貢献しました。その核である、他大学の書籍を取り寄せられるシステムについても、効率的な運用をさらに押し進めるための課題はありますが、挨拶をする程度の近所付き合いであったものが、醤油を借りに行ける程度にまで発展したとも言え、地域の連携が良い関係に育ちつつある事を物語っております。

今後は、Tosho Ringの方向性を明確にして、より有意義で良好な連携を築く意識を共有して行くことが大切だと思われます。

愛知県立芸術大学の「芸術情報センター図書館」（以後、芸大図書館）では芸術系書籍を中心とした整備を行っています。図版や楽譜等の比較的単価が高い書籍が多く、限られた予算で充実を諮るための的確な選定作業は欠かせませんが、そのような努力を持ってしても、新しい作品の楽譜や専門書が不足していることも否めません。こうしたことから、一般書籍への配分が手薄になるのは仕方のないことながら、芸大図書館の開架ブースにTosho Ringの書架が設置された事実は、単に蔵書が増えたと言うことのみならず、一般書籍や芸術の入門書的性格を有する書籍がそこに並ぶことを意味しており、図書館として、より利用し易く魅力的な性格を持ち得たとも言えるでしょう。

Tosho Ringでは、連携校が互いの専門性を生かした上で選書が行われているため、全体的に広範な領域の書籍がカバーされることとなり、通常の一般書籍の選書とはアプローチの異なる方法で一般書籍の拡充が行われています。こうした選書システムの上からも、それぞれの書籍は、興味を持つ利用者が最も多い図書館に配架されることとなり、芸大図書館においても、美術、音楽それぞれの学生が、お互いの分野をより身近に知る機会も増え、より効率的に書籍の活用が行われております。

Tosho Ringの関連行事を実施する上で、芸大では、実技系授業形態を主とするカリキュラム上、幾つかの課題も見受けられます。書店へ出向いて本を選定するツアーには数名の芸大学生も参加しておりますが、合奏や合唱のように1人の欠席がダメージとなる授業も多く、土日を含めて、参加しやすい日程の設定が鍵となるでしょう。また、学生の関心を喚起するためには芸術系書籍を扱う書店の協力を得ることも必要であるし、Tosho Ring自体の広報活動、関連行事の実施方法論等についての、さらなる研究も必要であると言えるでしょう。

戦略的大学連携支援事業としての期間を終える今、構築されて来たシステムを今後とも維持、発展していくための予算措置が当面の課題となりますが、各大学や地域の「知」を担うシステムとして、Tosho Ringがさらに成長して行くことは、既に必須の課題とも考えられ、芸大図書館においても、前述のような特殊性から若干の問題も存在しますが、より積極的な活動を展開しつつ、魅力ある「知」の拠点作りに力を注ぐことが重要であると思われます。

Tosho Ring の起爆力と可能性

愛知淑徳大学図書館長　久保朝孝

Tosho Ring プロジェクトに参画して、早くも三年が経過してしまった。企画・準備・運営・調整・記録保存に当たってこられた愛知県立大学のスタッフの方々には、あらためて深い感謝の意を表するとともに、ご期待に沿う十分な貢献ができなかったことについてこの機会にお詫びを申し上げておきたい。

このプロジェクトの理念・目標・展開・評価・展望については、県立大学チームによる総括の中で明らかにされるであろうから、本稿では一現場からの部分的かつ些細な問題点の指摘と、本学にとっての収穫の紹介をさせていただきたい。

本プロジェクトは当初において、参画する各大学がそれぞれの判断で①一般教養書を新たにコレクションとして整備し、それらを各大学が自由に利用できるようにする、②その際図書の貸借は最寄りの大学図書館とし、③かつ当該図書には読了者の書き込み書評を付して後続利用者の便に供する、というものであった。

①については、各大学がそれぞれの判断で（ということは自由に）選書するということであったが、「一般教養書」という枠組みと相俟って、実質的には基準のない選書作業となる危険を孕んでいたように思われる。むしろ各大学の特色を生かした選書、あるいは幅広い教養書をジャンル分けして分担選書するという方法もあり得たのではないか。二年目からは、授業で使用する「専門書」をも選書範囲とするという軌道修正が行われたが、それが有効であったかどうかは疑わしい。本学では基準のない選書ではなく、準大手出版社の入門・啓蒙書のシリーズを揃えるとか、あるいは新聞の書評欄に取り上げられた図書をすべて揃える、とかいった対応を取ってみた。読みたい本が結構排架されているとして、学生には好評であったと受け止めている。

②は、すでに大学・公共図書館間で行われている相互貸借制度の機動性向上に、一定の効果はあったものと思われる。

③については、すでにアマゾンなどで行われているサービス機能に追随するかたちのものだが、問題点としては、書評書き込みの督励と実現の困難をどう乗り越えるのか、さらには、民間の責任のない自由な書き込みと公共性をもった大学図書館蔵書への書き込みとを同列に扱いうるのか、といったことがあげられる。また、書き込み数が増えたとしても、それが少数者による多重書き込みであった場合は、別の問題が浮上してくる。

以上のような問題を抱えながらも、本学図書館としては本プロジェクトに参画することによって他大学図書館の積極的な取り組みに大きな刺激を受け、いくつかの新たな取り組みを開始した。そのうちの一つは、学生による図書館サポーター制の導入であり（2010 年度より）、一つは「書評大賞」の創設である（2011 年度より）。前者は Lib.Mates と称して、図書館広報誌の編集、館内テーマ展示および Tosho Ring 活動支援を分担して活動している（20 人）。後者は図書館蔵書を対象に書評を募集して優秀作を表彰するもので、現在応募規定を検討しているところである。

Tosho Ring は、プロジェクト自体の目的実現という成果のほかに、参画させていただいた本学図書館の変革にとって大きな起爆力となったように思われる。このプロジェクトの含み持つ未発の可能性に、さらに大きく期待したいところである。

大学図書館運営への学生の関与

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長　岸 恭一

学生が本を買わなくなり、本を読まなくなったと言われて久しい。図書館としても何とか学生の利用を促進したいと苦慮している。ややともすると社会にでてからも、いわゆる漫画本にしか目が行かないのは残念である。今回の戦略的大学連携支援事業による共同図書環（館）（Tosho Ring）の試みは、学生の本離れを食い止める効果があったことは非常に有り難く、感謝している。

支援事業により本学図書館に約3,000冊の蔵書と専用の書架を購入し、蔵書を充実させせることができたことを大変喜んでいる。Tosho Ring購入図書は、図書館の正面入り口から入って直ぐ右側にまとめて配架されている。色とりどりの大小様々な書籍が並び、人目につきやすく、利用者に好評であった。Tosho Ringの選書には学生も加わり、学生選書バスツアーには本学からも毎回数名が参加した。この企画は学生の図書館に対する意識改革に貢献したと考えられる。バスツアーの学生企画委員会も開催され、5大学の学生が参集して熱心に討議した。委員らはツアー企画・実施の苦労と達成感を味わい、また大学間学生交流の絶好の機会ともなり、課外活動の一環としても有意義であった。

本学のTosho Ring利用者ID登録者数は1,000名近くに及び、Tosho Ringに対する関心の強さをあらわしている。それを象徴するかのように、名古屋学芸大学の短大部2年生が登録者の2,000人目に、管理栄養学部3年生が3,000人目にそれぞれ当たったことは、本学図書館にとっても幸運なことであった。2010年7月と2011年1月にささやかながら表彰式を行い、二人を祝った。その際、副賞としてTosho Ringストラップ、小物入れ（メベルクラムボックス）、しおり（本学限定スタンプラリーノベルティ）、スタンプラリーカードなどを贈呈した。彼女ら2人が友人を巻き込んで、Tosho Ringを大いに活用してくれることを期待している。

本学では、Tosho Ringサポーターとして学生5名を委嘱し、書架のレイアウト、Tosho Ringの案内チラシ、案内ポスター、オリジナルしおり・ステッカーなどの掲示・配布、検索用パソコン端末の案内、オリジナルプラスティックバッグの配布などをお願いした。Tosho Ring読書スタンプラリーでは、共同図書の書評・感想文を募集し、応募者には応募の都度スタンプを押し、貯めたスタンプ数に応じて、フォトフレームブックマーク、ピンバッジ、トートバッグ、ブックカバー、シャープペンなどを贈呈した。ライブラリーカードのデザインも募集し、45点の応募から、大賞1、特別賞1、奨励賞2を選考し、図書館多目的室で4名の学生に対する表彰式を行った。名古屋学芸大学にはメディア学科やデザイン学科があるお陰で、プロ顔負けのライブラリーカードを作成できたのは幸いであった。

大学図書館は、教育と研究を支える学術情報基盤の中核施設であり、学生の人格形成と知の創造を担う大学にとって必要不可欠な存在である。利用者のニーズは多様化しており、図書館が備えるべき情報は増加の一途をたどっている。予算、スペース、人員の点から、一大学で整備できる情報源は限られる。各大学の特色を生かした図書館を構築するとともに、今回のTosho Ringのような近隣の大学・公共図書館が協力したネットワーク形成が必要である。愛知県立大学主導のもと、関係機関が協力して大きな成果を挙げたことは誠に喜ばしい。3年間に培った大学間連携のknow-howは、大学の図書館のみならず各大学の発展に必ずや生かせることであろう。

公共図書館からみた共同図書環事業について

愛知県図書館　村上昇平

愛知県図書館は、公共図書館として長久手町中央図書館とともに、共同図書環事業に参加している。共同図書環の事業に直接係わることがないが、節目に開催される運営委員会や図書部会などで、事業の目的や進捗などの報告をいただき、オブザーバー的な立場から提案などをさせていただいた。

県内の大学図書館間の連携については、中部大学・愛知学院大学・南山大学の図書館が構成するCAN私立大学コンソーシアムや豊橋技術科学大学と愛知大学との図書館相互利用などの先行する事例がいくつかある。また、大学図書館と公共図書館との連携事業も進んでおり、県図書館では、東海地区図書館協議会の幹事館のいくつかの大学図書館との間で、定期便を配送することで資料の相互利用の活性化を図る実証実験を行っている。これらの連携活動は、お互いの蔵書を補完することを目的に、既存のOPAC（蔵書検索システム）などを検索して所蔵を確認し、相手館へ出向くことで閲覧や貸出しを受けたり、ILL（相互貸借）による利用者への提供を目指す穏やかな連携関係といえる。

それに対して、今回の共同図書環事業は、収集した資料の共同利用のためのネットワークシステムを新たに構築し、5大学に分散する資料を、予約することで所属する大学図書館まで配送して利用できるようにするなど、これまで行われてきた大学図書館間の連携事業とは、一線を画した意欲的な取組みであるといえよう。

また、学部構成が異なる参加5大学の図書館は、それぞれの特性を生かした資料を収集されているが、今回の事業では、学生への教育・学習活動を支援する学習図書館機能の強化を図ることを目的に、教養書や文芸書、実用書を中心に1万冊の資料を新規に購入することで、これまで大学図書館で収集されることの少ない分野の蔵書の充実にもつながったと考えられる。こうした事業の展開は、戦略的大学連携支援プログラムという補助事業の活用なしには実現できないものであろう。

連携事業に参加された各大学図書館では、事業の進捗にあわせて、学生や教職員へのPRが積極的に取り組まれるとともに、大学ごとに独自の活動として、ライブラリーカードのデザインを学生から募集したり、スタンプラリーを行うなど、様々なイベントが企画・実施されており、連携事業に携わった方々のご努力には、敬意を表するものである。

3年間の事業期間を経て、各大学図書館の連携意識が深まったであろうと思われるが、共同図書環により構築された共同蔵書の維持・発展と、さらには、各大学図書館が所蔵する既存の教養図書の共同蔵書化の構想が、今後の目標としてあげられている。共同図書環のネットワークシステムをベースとして、参加される大学図書館が一層のスクラムを組まれることで、各大学図書館の学習環境が一層整備され、大勢の学生に活発に利用されることを期待したい。

共同図書環（館）が示した大学図書館の新しい機能と課題

愛知県立大学学術情報センター長補佐　中田晋自

はじめに

「共同図書環（館）」（通称 Tosho Ring、以下 TR と表記）の取り組みから、われわれは何を学んだのか。この問いに対し、愛知県立大学図書館の管理運営に携わる立場から回答を試みることが本論の目的であるが、特にここでは従来からある大学図書館と新しい TR の「機能」に着目して考察してみたい。というのも、TR の「環」という側面に注目するならば、日本の大学図書館はすでに蔵書検索と文献相互貸借のネットワーク（＝環）で結ばれた状態にあり、それでもなお TR に独自性が見出されるとすれば、むしろそれはユーザー相互の知的交流を支援する「機能」にあると考えられるからである。

共同図書環（館）が示した大学図書館の新しい機能

ある特定の作者・テーマ・分野に関連する資料の入手を目指してやってくる学生・院生や教員に対し、大学図書館が行っている支援はまさにその本務といえるが（研究支援機能）、この機能自体はユーザーが当該文献・資料を入手した時点でさしあたり完結する。ユーザーが入手した文献・資料をどのように読了したのかについて、大学図書館は関与しないのである。

これに対し TR はむしろ入手後のプロセスに関与する。しかも特筆すべきは、TR のポータルサイト（https://tosho-ring.aichi-pu.ac.jp/opac/）における書評やコメントの書き込みを通じて、登録ユーザー間での相互的な知的交流を支援している点である（書評・コメント交流支援機能）。これこそ TR に独自の機能と言えるが、この事業に携わった教員の多くが指摘しているように、この機能を有効活用することによって、大きな教育効果が期待できることも明らかになっている（書籍の魅力を語ることを意識した読書による読解力の飛躍的向上）。

また、TR における学生選書の取り組みは、「読書離れ」のレッテルを貼られることが多い今どきの学生たちが、実際にはどのようなジャンルの書籍を好んで読んでいるのかを明らかにした点で意義深い。学生から図書購入希望を受け付けているとはいえ、大学図書館には研究・教育に特化した独自の蔵書収集方針があり（研究資料収集機能）、学生たちの読書傾向との間にズレが生じることはある意味当然である。大学図書館は、今後どのような図書を、どのように収集し、推薦していくのか。極めて難しい問題である。

この点で、TR における教員選書の一環として愛知県立大学で行われた「学科・専攻の 20 冊」は、われわれに重要な視点を提供している。というのも、大学教員は日々教育現場に身を置きながら、教育的観点から大学図書館の選書に関わることはまずなく、その意味で、各学科・専攻の教員が学生向け図書を選定し、推薦したことは、すぐれて斬新な取り組みであると思われるからである（良書推薦・読書啓発機能）。

共同図書環（館）が示した大学図書館の課題―まとめにかえて―

以上のように、TR の取り組みは大学図書館が今後担うべき新しい機能を明らかにしたが、なかでも「学科・専攻の 20 冊」の事例が示しているのは、従来もっぱら図書館ユーザーの立場にあった教員をも巻き込んだ協同・協力の人的ネットワークが、まさに大学図書館にとって不可欠であるということではなかろうか。大学の研究・教育において大学図書館が中心的役割を担いうるか否かが大学にとって戦略的課題とさえいえる今日、大学の研究・教育に携わるすべての人々が大学図書館の機能開発とその実践に関与し、協力していく体勢づくりが求められている。

共同図書環ネットワークシステム “Tosho Ring” 開発の成果と課題

愛知県立大学学術情報部　落合弘之

共同図書環の取り組みとそのシステムである “Tosho Ring” の開発は、「クラスメートや授業の担当の先生が書いた書評や感想、推薦文を手掛かりにして、興味のある図書を探し出し、どの図書を読めば良さそうかを決める参考にできると便利なのではないか」、「複数の大学図書館で図書を共同利用することで、大学を越えて学生や先生が気に入った図書をお薦めし合えるような大学図書館は作れないのか」という大学図書館の利用者視点での素朴な発想がきっかけで始まった。そしてこの大学連携の取り組みでは、そういった大学を越えて利用者同士の情報交換ができる大学図書館の実験的サービスを２年半という短い事業期間の間に実現し、実際に利用してもらい、その利便性を学生や先生など大学図書館に係る皆さんに実感してもらうことを目標とした。

この実験的取り組みを実現するために “Tosho Ring” では、書評や図書の扱い方について従来の図書システムとは違う独自の３つの拘りを持ってシステムを開発した。

１つ目は「利用者が自由に図書と自分の感想や書評を関連付けて書き込むことができ、google 的な自由なキーワード検索を使って、図書だけでなく書評そのものを検索でき、書評からも図書を探し出せること」に拘った。そういったことを実現するために “Tosho Ring” では日本で初めて CMS（Contents Management System）という Web 標準技術を利用した仕組みを使って図書などを検索するための利用者向け画面（OPAC）を作った。そうすることで、簡単に図書と関連付けて書評を書き込め、書評から検索しても図書を見つけられるようにし、興味を持っているトピックのキーワードから、興味の似通った人の書評を探し出し、そこからその人が書評を書いた図書を探し出すことができるようにした。書評を介して知らない図書にめぐりあう機会が得られ、新たな発見に結び付く「ディスカバリーインターフェース」である。これを使うことで例えば、「A 大学である種のアルゴリズムを勉強している情報科学部の学生が書評を検索することで、B 大学の情報科学部の学生が書いた似たアルゴリズムを考えるうえでヒントとなった図書を紹介する書評を探し出し、そこから情報科学部の学生では思いもよらない生物学の図書にたどり着く」という目録情報での図書検索では見つけられない発見が展望できる。

２つ目は「利用者を連携する大学内の人に限定できること。書評の投稿者は、教員については実名参加できる上でどこの誰なのかが分かり、学生については匿名参加できる上でどの学部学科の学生なのかが分かること」に拘った。ユーザアカウントの仕組みを工夫することで、各大学の利用者が固有の ID でログインして利用できるようにし、書評の投稿者などとして画面に表示される利用者情報としては、所属大学と学部学科名までの情報に加え、教員は登録者名と同じ実名表示、学生は登録者名とは別にニックネームを持てるようにすることでニックネーム表示が可能なようにした。そのようにすることで、自分が受講している授業の先生や興味のある論文を書いた連携大学の先生がお薦めしている図書を探したり、実名はわからないけど自分と同じような勉強をしている他大学の同種の学部の学生が書いた書評から同じ図書をどのように読んだのか、どんな勉強の参考になったのかを調べたりすることもでき、そのような形で書評を集めることで、“Tosho Ring” を利用した連携大学でしか入手できない情報の蓄積ができた。この蓄積から将来は大学を越えた情報交換のコミュニティに発展が展望できる。

3つ目は、書評の活用と同時に大学図書館の間で図書を取り寄せるが返却を行わずに配架場所（図書を保管する場所）が取り寄せた図書館に移動となる取り寄せサービスの実現に拘った。通常、他の大学図書館から取り寄せて借りた図書は利用者が返却するとすぐに元の図書館に返却されてしまう。しかし、“Tosho Ring”では、連携する大学図書館が共同保有する共同蔵書を持ち、配架場所が明らかであればどの図書館に図書が配架されても問題ないことから、図書の情報として配架場所と別に購入図書館の情報を持ち、取り寄せで自動的に配架場所が移動となる機能を作り、「どこの図書館が購入した図書がどこの図書館に配架されているのか」管理できるようにした上で、他の図書館から取り寄せ借りた図書は利用者が返却すると次に取り寄せ依頼が発生するまでは取り寄せた図書館で配架できるようにした。こうすることで他大学が購入した図書を取り寄せした大学の他の学生も手にとって見る機会が得られるようになった。興味を持てる新たな図書に出会う機会がより増えることを展望できる。

以上のような独自機能を持ったシステムを自分たちで一から作るために、6ヶ月の海外では研究が進んでいる将来あると便利そうな図書館の利用者向けの画面（次世代OPAC）の機能についての調査、研究し、その後6ヶ月の短い期間で、実験的なシステムの開発が得意な開発業者に協力してもらうことで、オープンソース（公開されているソフトウェア資源）を利用して開発した。そして、まずは必要最低限の基本機能として、図書と関連付けて書評を書き込むことができ、書評からも図書を検索できる利用者向けシステムと4つの大学図書館で図書の貸出、返却、取り寄せなどの業務ができるスタッフ向けシステムを完成させることで、2009年10月に大学を越えて利用できるネットワークシステム“Tosho Ring”を利用して共同図書環を開始することができた。そこから少しずつ機能を追加し、現在に至る。

興味を持って各機能を体験してもらえる“Tosho Ring”は実現できたと思うが、短い事業期間での開発であったため、事業終了に際して心残りが3つある。1つ目は、使いやすさを考慮した画面デザインの部分の工夫に時間をかけられずに終わった部分が多く、特に日常業務を行う図書館スタッフの負担をかけてしまったことである。2つ目は、「貸出予約」などの普通の図書システムが持つ機能を用意できなかったことである。3つ目は、「借りた図書に基づいて新たな図書を薦めるレコメンド機能」、「貸出人気ランキング」、「借りた図書や借りたい図書などの情報を収集管理できるマイライブラリ機能」、「既存の図書館、授業、論文などシステム外部の情報と連携したサービス」、「各大学図書館の従来の所蔵の連携検索」など当初はいろいろと計画していた次世代的な機能をあまり用意できなかったことである。

また、この取り組みの経験から日本の図書館システムが持つ2つの課題を感じた。1つは利用者が知りたい情報をうまく組み合わせて表示できる利用者向け画面を作ったりするためのWeb標準技術の利用の遅れ、もう1つは各システムの情報を他のシステムから自由に利用できるための情報の入出力の標準化の遅れである。そういったことが整備されていれば、“Tosho Ring”ももう少し機能が盛り沢山で使いやすいシステムにできたかもしれない。今後は大学図書館が知恵を出し合い、メーカーと協力して、日本の大学図書館システムを利用者のニーズに合わせてより良く変えていくためにも、利用する技術の標準化をきちんと行う必要があると感じる。そうすることで、今回“Tosho Ring”で実現した機能や、その後に出てきたカーリルのような図書館の情報とAmazonの情報をうまく組み合わせた横断検索のサービス、現在開発中の九州大学付属図書館の図書、論文、電子ジャーナルといった様々な資料を区別なく全文検索できる検索システムなどWeb標準技術を利用した様々な次世代的な機能を各図書館システムに手軽に取り入れることができるようになることが展望できる。

最後に、この実験的取り組みの実現に協力してくれた様々な開発業者や書店組合の皆様、取り組みに参加していただいた学生、教職員の皆様、また非常に割り切ったシステムを使ったサービス運用に知恵と手間で対応いただいた連携大学の図書館スタッフの皆様に心より感謝したい。

Tosho Ring を活用した実践授業について

名古屋外国語大学　大矢芳彦

名古屋外国語大学では、2年次に教養科目選択必修授業として「教養ゼミナール」と呼ばれる演習科目を設けており、学生数約20名で半年間、テーマを決めて本を読み最終的に論文形式にまとめることを目的とした演習授業を行っている。今回は、Tosho Ring をその授業に取り入れるという機会を得て、授業計画を若干変更し、Tosho Ring の書評欄に投稿することもひとつの目的とした授業を行った。その内容は、書評についての基礎知識を学び、実際に書評を読み書きして書評に対して親しみをもたせた後に、Tosho Ring の蔵書の中で学生が希望する書籍を選んで精読し、それに対して書評を作成し Tosho Ring の書評欄に投稿し、最後にプレゼンテーションとレポートを提出するというものである。

この Tosho Ring 活用授業は、平成21年度後期および平成22年度前期にパソコンが利用可能な教室で行った。本学では1年次に基礎ゼミⅠ・Ⅱという日本語文章能力の向上を目的とした授業を行っているため、文章を書くのにはそれほど抵抗なかったものの、書評に関しては読んだことすらない学生が多くいたが、授業前半で試行錯誤を繰り返しながら学生に書評のノウハウを学ばせた結果、最終的にほとんどの学生が満足のいく書評を書くことができるようになった。また、選書の段階で、学生が本を探してその書籍を Tosho Ring で購入することができたため、本に対する選択意識も増した。さらに、自分で書評が書けるようになると別の書評を書きたくなり、そのためにまた本を読むという学生が増え、今まで読書に興味のなかった学生も積極的に読書をするようになった。このように、ただ本を与えて論文を書かせるという今までの教養ゼミの授業に比べ、学生のモチベーションが上がり、読書量も増えた点において、Tosho Ring 活用の効果が得られたと思われる。

次に、学生の事後アンケートを見ると、83%の学生が今回の授業が楽しかったと回答し、書評を書くことに対しても59%の学生が楽しかったと答えていた。さらに Tosho Ring に対しても65%の学生が良かったと答えており、Tosho Ring を活用した今回の授業は学生にも高評価であったことが窺える。さらに、この授業を通して41%の学生が読書が好きになったと回答し、94%が書評を書くことで本の内容の理解が深まったと答えており、学習効果も Tosho Ring を利用したことにより高めることができた。自由記述で Tosho Ring について質問を行ったところ、良かった点としては、他者の書評を閲覧できたこと、他大学の学生がどんな本を読みどのような書評を書いているかを知ることができたこと、書籍の検索システムなど、Tosho Ring システムの機能に高い評価をしていた。逆に、問題点としては、パスワードの入力が面倒、大学蔵書と関係が煩わしいなどの意見が認められた。

今回は理系の教員が学生に書評を書かせるということで、試行錯誤の繰り返しであったが、総合的に判断すると教養ゼミナールにおける Tosho Ring 活用授業は学生にも高評価であり、学習効果としてもまずまずの成果を上げることができ、何よりも多くの学生が読書に対する興味を持った点で成功した授業実践のひとつの事例となったと思われる。

魅せる共同図書環

愛知県立大学学術情報部　大仲聡子

大学図書館は学生の人間形成等に大きな影響を与える重要な知的財産の宝庫である。

大学図書館の中で共同図書環のスペースは、学術情報提供と同時に知的活動により疲れた心身を癒す場、図書展示・紹介の場と考え、ラーニング・コモンズとはひと味違う新しい空間を形成した。そして共同図書環は書評機能により知的情報交流、各種選書活動は連携校間のジョイントとして機能した。

大学連携事務局として蔵書構成にかかる図書の選書、発注、納品のみならず、ガイダンス、ヒヤリングを行った。連携校間の活動として「教員学生選書」「Tosho Ring 活用授業」「学生選書バスツアー」「読書チャレンジ」「ID 登録記念式」「教養教育プログラム」等を行った。

共同図書環の蔵書は、一般教養図書、特色ある連携校の分野を活かすための専門図書、教養教育から専門教育への連続性を重視した専門図書で構築されている。

「教員学生選書」では教員が学生を伴い書店で選書活動を行い、「Tosho Ring 活用授業」では教員が授業と連動した内容での選書を行った。「学生選書バスツアー」では学生視点での選書を行った。愛知県立大学での「学科・専攻の 20 冊」では専門分野への入り口となる選書を各学科・専攻教員よりなされた。

共同図書環蔵書約一万冊は、大学での授業・学生ニーズに即した蔵書構成を成した。

平成 20 年から 4 回の「学生選書バスツアー」を催行した。連携校から参加希望者を募り、バスで各大学を巡った後、名古屋市内の書店へ赴き選書を行う学生選書ツアーである。

連携校学生との共同図書環選書活動は、連携校間の交流とともに公共性という意識の高い選書を可能とさせ、私的達成感を学生に与えることができる事業である。そして学生目線での選書は利用頻度の向上を高めることができた。学生の利便性・企画内容・学内掲示物を学生感覚で見直すため学生企画委員を募集し、その協力を得た。今後より充実したツアー環境を整えるため、学生との意見交換を行う必要があると考える。そして連携校間の交流、各図書館の他のサービスにも発展させていければと思う。

愛知県立大学での共同図書環装飾展示は、学生生活に季節感・年間行事を想い浮かばせ、心に潤いを与えてきた。テーマに即した図書展示の装飾には、折り紙、風船、木の実、楽器、民芸品などを用い、さまざまな工夫を凝らした。

図書の貸出意欲は、まず見て 40~50%、手に取り 70% が決まると言われている。そのため背ざしでの図書配架ばかりではなく、雑誌架や書架空間での図書面出し展示を行い、表紙デザインを有効的に用い、図書の魅力を引き出し、利用促進に結びつけた。

また教養教育プログラムの一環として、平成 22 年 12 月に公開講座「香音なときによせて」を連携校である愛知県立芸術大学の演奏家と催した。楽器演奏に解説を交え、香りと音楽を結び付け、受講者の聴覚・臭覚・視覚を刺激し、知的活動を喚起した。共同図書環蔵書を展示紹介し、受講者を読書へ誘うことができた。

向後も「魅せる共同図書環」として、各大学の専門性を活かし、好奇心を刺激する選書活動による蔵書を構築し、図書に演出工夫した展示を行い、より多くの学生に夢を与える知的情報交流の「環」となるよう積極的活動に努める所存である。

愛知県立大学における Tosho Ring

愛知県立大学学術情報センター図書館　新川裕美

本学の共同図書環コーナーは、長久手キャンパス図書館一階の、以前はブラウジングコーナーとしてパンフレットや新聞などが置いてあったスペースに設けられている。このコーナーは、この三年間で劇的に変わった。

共同図書環コーナーでまず目を引くのは、コーナーの入口部分に設けられた、平置き三段の木製ディスプレイ書架だろう。新着図書や話題の図書を、表紙を見せる形でゆったりと見せており、コーナーへと自然に誘うような雰囲気を演出している。実は、この書架は以前、ブラウジングコーナーの目立たない場所にあった。書架に対して多すぎるパンフレット類が、ほとんど隙間なく半ば重ねて並べられていた。一冊手に取れば必ず乱れてしまうような無理のある置き方だったにもかかわらず、実際はほとんど整頓する必要はなかった。それだけ使われていなかったのである。パンフレット書架としては使いにくい、むしろお荷物だった書架を、共同図書環に使ったらどうかと事務局担当者から言われたときは、こんなものが使えるのかと思ったことを覚えている。しかし、ご覧頂ければわかるように、それはもちろん誤りだった。この書架が、既成概念にとらわれない共同図書環の活動を象徴しているように思う。

共同図書環事業は、実験的事業という位置づけが前提にあるため、自由度が高い。もし、他大学との連携はもちろん、学生選書ツアーや Tosho Ring 活用授業、「学科・専攻の 20 冊」などを図書館独自の事業として行おうとすれば、予算の裏付けや事業規模、継続の有無など、導入には多くの検討を要しただろう。この事業では、まずは試し、その結果をみながら柔軟に変更、改善していける。そうはいっても、事務局の苦労は傍で見ていても相当なものだったが、図書館としては非常に貴重な機会をいただいたと思う。

自由度の高さは蔵書のカラーにも表れた。通常の選書では、学習・研究用図書を中心とした蔵書構築を意識せざるを得ないが、共同図書には、学生選書による気軽に読める図書や、時季に沿った新鮮な図書が多い。他の参加大学の選書内容にも各々の特色が色濃く、時折取り寄せられてくる他大学の図書は、職員にとっても楽しく刺激的だった。

共同図書環によって、図書館がより親しみやすい場所となり、全体の利用率アップにつながった。その一例であるが、最近、図書館あてに「司書によるお勧め本コーナーを作ってください」という投書があった。それを生かして、急遽、投書した学生にも参加してもらい、お勧め本ミニ企画を行った。このような学生からの働きかけも、共同図書環の活動がきっかけになったことは間違いない。

今後も共同図書環事業は続く。共同図書環だからやれる、というだけではなく、従来の図書館活動とも融合しさらに発展できるような、新たな形を模索していきたい。

共同図書環（館）Tosho Ring 3 年間を振り返って

愛知淑徳大学図書館事務室長　武藤まり子

①選書について

初年度は一般教養書を中心とした選書を教職員および学生に依頼するとともに、図書館は入門書である世界思想社の『○○○を学ぶ人のために』シリーズ全巻、大手新聞社の書評欄に取り上げられた図書を中心に選書を行った。

平成 21 年度、平成 22 年度についても同様に書評欄に取り上げられた図書を中心に選書を行なった。次年度以降もこの方針で選書を行なう予定である。

学生からは入門書、当館が所蔵していない図書も多く利用しやすいとの声も聞く。

② Tosho Ring 活用授業について

平成 22 年度に実施された Tosho Ring 活用授業は、図書館情報学科の授業であったため、図書館は“場”の提供と貸出・返却の業務のみを行なった。掲示物の作成およびその掲示、図書の排架、図書への授業受講者用シールの貼付などの作業を Tosho Ring 活用授業を受講している学生達自身が行なったため、図書館情報学科学生として良い経験ができたのではないかと思われる。Tosho Ring 活用授業の成果については当該教員からの報告書を参照していただきたい。

また、授業受講者が Tosho Ring 利用者 ID 登録、図書の借出し、書評執筆をするので、この時期にそれぞれの数値が飛躍的に伸びた。

③書評の募集について

平成 21 年度、平成 22 年度と広く学生に募集を行なったが、書評を書くと言うことは敷居が高いのか伸び悩んでいる状態である。

④学生選書バスツアーについて

当大学としては平成 22 年度に実施された 2 回（6 月、11 月）の「学生選書バスツアー」に学生が参加した。当館は図書のリクエスト制度はあるが、選書ツアーは行なっていないので、学生達は実際に書店で読みたい図書、興味のある図書を選書できること、他大学の学生と交流できることを楽しんでいたようである。特に第 2 回の学生選書バスツアーは学生選書企画委員を募集して、学生達自身が企画をしているので得ることが多かったのではないかと思う。

⑤今後について

共同図書環（館）の当初の目的であった書評図書館、所蔵館に行かなくても希望の図書を取寄せることができるという点において、全蔵書数に対しての書評の数、貸出冊数に対して取寄せ数の少なさが課題として残る。当館としても他大学に比べ利用者 ID 登録者が少ない点などもっと広報をしていかなければいけないと反省している。

さいわい、平成 22 年度より図書館学生サポーター（Lib.Mates）を募集し、今年度は 20 名の学生が活動を行なっている。活動内容は図書館広報誌の発行、図書館のテーマ展示、Tosho Ring の広報活動の 3 つを活動の中心としているので、学生達をバックアップしながら Tosho Ring の広報を進めたいと思っている。

共同図書環事業の成果と今後

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館課長　守田正江

2008年度より、戦略的大学連携支援事業として名古屋東部丘陵地域の五大学の連携が開始された。共同図書の構築を始めとする様々な試行を経て、我々は大きな成果を得た。この最大の要因として、五大学の図書館同士の連携が非常にスムーズに進んだことが挙げられる。

図書館業務には所蔵資料のやり取りを始めとする相互協力が欠かせず、図書館界は、事の大小を問わず互いに協力しあう文化がある。私立大学図書館の間では、以前から頻繁に連絡を取り相談や問い合わせをしあう例は珍しくなかった。「共同図書環（館）」を柱に置くこの事業がまず各校の図書館の連携から始まったのは、中核を担う図書館に従来から相互交流の下地があり、連携の大きな推進力たりうるとの判断があったためである。私立、公立という母体の違いで、公立大学とは過去にほとんど交流の機会がなかったため、事業の開始当初は多少のぎこちなさがあったが、そこは同業、顔を合わせ、企画を練り、問題点を改善していくうちに、関係は密になっていった。

Tosho Ring システムが稼動して以来、利用希望者は日を追うにつれ増加した。学生の間に共同図書の「環」はしっかりと広がり浸透した。本学の場合、来館した学生の目に留まりやすい一階正面入口の近くに共同図書環用のスペースを設けたことや、読書スタンプラリーなどの取り組みを行ったことが功を奏し、新たな利用申請がコンスタントに月50件を越す程の反響を呼んだ。しかし何よりも、バラエティに富んだ多くの本を用意したことで、学生たちの「知りたい」「読みたい」「学びたい」といった知識欲をくすぐったことが大きいのではないだろうか。

一般教養から専門領域への橋渡しを担う本をターゲットとした共同図書は、多くの教職員と志ある学生諸子によって選ばれた。「教員･学生選書事業」や「選書バスツアー」といった、学生が指導教員や連携校の司書の助言を得、書店の棚から直接本を手に取って選ぶという企画が、選書に参加した学生に少なからぬ影響を与えたのは勿論のこと、一般の学生に対しても、本に向かう意欲を掻き立てる効果があったことは間違いない。事業三年目の2010年10月に、選書バスツアーのための学生企画委員を初めて募集したところ、各校から多くの学生が手をあげた。彼らのエネルギーを引き継ぐ新たな面々が次年度以降も現れ、パワーアップさせていくために、我々図書館員はどのように仕掛け、どのように支えていくべきか。

マンネリに陥らず、学生の知識欲に一層働きかけるような事業としていくためには、連携校間で忌憚ない意見を出し合い、改善を続ける努力が必要である。大学間の交流を深め、本来の目的である「教育研究学習活動の活性化と効率化に資す」ためにすべき課題は多い。選書後に図書館へ本が納品されるまでの時間の短縮しかり、図書部会と教育部会の双方向の深い関わりと連動するための仕組みしかり、連携校が近隣に存在していることのメリットを最大限に活かす取り組みしかりである。

様々な取り組みを実現するために五大学は連携し、多くの実りを得た。これを足がかりとし、将来的展開として掲げた「地域全体における大学連合の形成」を目指したい。

共同図書環が大学図書館を変えていく

愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館　槙島隆教

共同図書環に参加したことは、愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館にとって大きなプラスであった。その理由は二つある。一つは共通のネットワークシステムのもとに図書の共同利用を行うという、新しい図書館間の連携づくりに協力できたこと、そしてもう一つは、利用者と図書館、利用者と図書館職員との距離を近づけることができたことである。

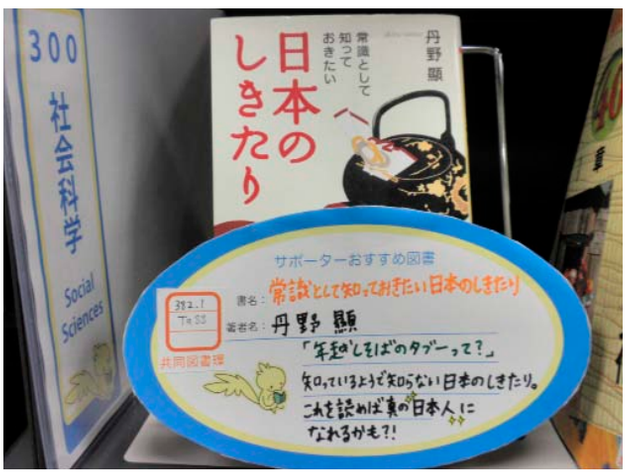
愛知県立芸術大学は学生、教職員あわせても1000人強、図書館の所蔵資料数も約16万点と共同図書環に参加した大学の中では最も小規模である。これまでも他大学の図書館との間で自館にない資料の複写依頼や現物の取り寄せといった相互利用サービスは行なっていたが、収集資料が美術・音楽の分野中心ということもあってか、芸術系以外の大学図書館との協力はほとんどなかった。また利用者、特に学生にとって芸大の図書館は、決して満足度の高い図書館とは言えなかった。少し古い資料になるが、2005年3月発行の自己点検評価報告書の中でも図書館は学生の厳しい評価を受けていた。そうした状況の中で始まった共同図書環。事業が掲げる新しい、一歩進んだ図書館間の連携サービス―“Tosho Ring”という共通のネットワークシステムを基盤にした図書の共同利用―の形成にどこまで貢献できるのか、手さぐりの中で活動を続けた。取り組みの中で意識したことは、図書館の中だけで完結させないこと、利用者である学生、教職員にもっと向き合おうということの二つであった。共同図書の選書ではゼミ・授業単位での共同選書や学生選書バスツアーといった形で教員や学生が主体的に書店で選べる機会を作り、図書館職員による選書でも芸術分野中心にしつつ自然科学や社会科学、語学、文学といった芸術分野以外の本からも学生が読みたい、利用してもらいたいと思う本を積極的にリストアップした。「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」（岩崎夏海著、ダイヤモンド社、2009.12）、「インターネットで文献探索　2010年版」（伊藤民夫著、日本図書館協会、2010.6）、「男鹿和男画集Ⅰ」（男鹿和男著、スタジオジブリ、1996.6）もその中の1冊である。

現在、図書館2階にある共同図書環コーナーには約2000冊の共同図書が並んでいる。そして毎日学生の利用が絶えない。読みたい本をさっと見つけて借りていく学生、近くの閲覧席に腰掛けゆっくり読んでいる学生、授業で共同図書の書評を書く課題を出され、何を選ぼうか棚をあちこち探している学生…さまざまなニーズに共同図書環は応えている。“Tosho Ring”の登録者数も累積で300名を超えた。共同図書への書評投稿数も250件まで増え、“Tosho Ring”のネットワークの中で連携校への貴重な図書情報として活用されている。小規模な大学であることを考慮すれば健闘している数字であり、新しい図書館間の連携サービスの形成に貢献することができたと考える。一番驚いたのは、学生選書バスツアーに参加した一人の学生が、その後カウンターに訪れバスツアーや共同図書環を紹介した四コママンガを描いてきてくれたことだった。ラフな絵ではあったが、学生の関心がこうした形ではっきり目の前に示されたことは職員にとって大きな励みになった。学生と図書館の距離が縮まったと感じた瞬間であった。

芸大の図書館は共同図書環を通して着実に変わりつつある。図書館間の新しい連携サービスに今後も協力していくとともに、ここで得た経験を活かして、より学生はじめ利用者に身近な図書館を目指していきたい。

Tosho Ring サポーターとともに

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館　東槇典子



まもなく3年間の戦略的大学連携支援事業が終了する。本学で学生と共同で取り組んだ Tosho Ring の広報活動を報告するとともに取組みで感じたことを述べたいと思う。共同図書環（館）ネットワークシステム Tosho Ring が本格的に稼動したのが 2009 年 10 月である。稼働に伴い共同図書の貸出カードとして学生証、教職員証を流用することになったが、本学のみ学生証の仕様が異なるため、別途専用の Tosho Ring カードを作成することとなった。これが、学生と共同で広報活動に取組むきっかけであった。Tosho Ring カードのデザインを学内で募集したところ 45 点の応募があった。「作品を募集する」ということを図書館としてこれまで行ったことがなかったため、どれだけの応募があるか正直不安な部分が大きかった。しかし、結果として学生から良い反応があったことは大変嬉しく、同時に学生が図書館に関心を持ってくれていることがわかったのは収穫であった。また、応募デザインの中から Tosho Ring のキャラクター（トリ）が誕生し、本学に限らず連携校で共通に利用したことで連携意識が強まり、デザインを考えた学生の自信にも繋がったようである。

その後、Tosho Ring の PR も学生に手伝ってもらおうとの提案から、学生にサポーターとしての協力を呼びかけた。丁度、学生サポーターの起用を検討していた時期でもあり、この事業は良い契機となったように思う。活動開始当初は我々職員も学生もどのように活動を展開していったらよいか手探りではあったが、サポーターとしての活動目的が明確であったため、Tosho Ring について知ってもらい、利用してもらうには「何が必要か」をお互いにアイデアを出しながら、積極的な広報活動ができたように思う。具体的な活動内容は利用登録の呼び掛けポスターや利用案内の作成、ポップによる共同図書の紹介、書架の見出しやインデックス等のサイン、ステッカーやしおりの作成などである。ステッカーやしおりは先に紹介したキャラクターを用いたもので、自由に持って行ってもらえるように貸出カウンターをはじめ数箇所に配置したところ、デザインの異なるものを数点もっていく学生もおり、興味を持ってもらえていることが伺えた。また書評 (感想文) の投稿に楽しく参加してもらおうと、投稿した書評数に合わせたノベルティを用意し、「読書スタンプラリー」を実施した。このノベルティのデザインもサポーターが手がけたものである。彼らの頑張りのおかげもあり、利用登録者数が少しずつのび、記念すべき 2000 人目、3000 人目が本学の利用者となったことは喜ばしいことである。サポーターの協力がなければこれだけの広報活動はできていなかったように思う。我々職員だけではなく、学生だけではなく、一緒になってこの大学連携支援事業に携われたことは今後の様々な取組みにおける良い経験であった。今回の事業に限らず、学生の力を上手く取り込みながら「ともに」取組むことが良い成果を導くポイントのひとつだと感じることのできた取組みであった。

戦略的大学連携事業に関わって

愛知県書店商業組合理事長　谷口正明

愛知県が主催する「青少年によい本をすすめる県民運動」（県民生活部社会活動推進課担当）には、私ども愛知県書店商業組合も協力させて頂いているが、以前その運動でお世話になった春日井隆司氏からこの事業への協力を依頼されたときには、一瞬戸惑いが頭をよぎった。公立と私立の大学が協同で書籍を購入することへの驚きと、書店組合で対応できるのかという不安からであった。しかし、詳細を伺ううちに、公立私立の枠を超えた発想のユニークさと、学生の皆さんに本を読んでもらいたいという春日井氏の情熱に動かされ、全面的にご協力することをお約束したのである。

書籍の完全調達やデータの装備などに関して乗り越えるべき実務的な課題はいくつかあったが、個々の書店としてではなく、組合として、こういった形で公の仕事に関わることができたのは、大きな収穫であった。競争ではなく、共同体として組合が機能したことは、今後の組合活動に何某かの示唆を与えるものであった。

現代は、インターネットで何でも済まそうという時代だが、私ども書店は、本は手にとって選ぶもの、との想いが強い。本は、単なるコンテンツではなく、視覚・嗅覚・触覚にも訴えかけてくる、他に替えがたい文化財である。だからこそ私どもは、店舗を構えているのである。より文化的な雰囲気の中で本との出会いがあるように、と努力するのである。「本屋のある生活」というライフスタイルを、と願うのである。その意味で、今回、学生の皆さんが本屋の店頭で選書したことには、非常に大きな意義がある。手前味噌ではなく、本屋で本と出会う喜びを体験することは、これからの人生に大きな潤いを与えてくれるものと確信する。春日井氏の慧眼に心からの敬意を表するものである。

以前、私は、公共図書館の蔵書の仕方について、河村たかし前名古屋市長（平成23年1月26日現在）に次のような提案をしたことがある。いま、公共図書館は、家庭では蔵書できない人類の文化遺産を蔵書するという図書館本来の役割を忘れ、「市民のニーズ」に応えるという大義名分のもと、税金で娯楽的な読書をしようとする人達のとっての無料貸本屋に堕してしまっている。貸出率で評価されるので、その時点でのベストセラーを複本で置いて貸出率を高めているが、翌年そのベストセラーを読む人は少ないので、廃棄処分にしてしまう（名古屋市は5,000円未満の書籍は消耗品扱いなので簡単に廃棄できる）。税金の無駄遣いである。複本をやめ、さらに各区にある図書館ごとに特色を持った蔵書（例えば、東図書館は予算の30%を歴史書の蔵書に充て、港図書館は予算の30%を海運関係の蔵書に充てる、など）をすれば、税金も非常に有効に使われることになる、と。

今回の「戦略的大学連携支援事業」は、この先、各大学が相談してそれぞれ特色ある蔵書をすることによる図書購入資金の有効な活用にも道を開く濫觴となりうるのではなかろうか。「紙の本という文化」を守り続けたいと考える私ども書店にとっても、ユニークな大学が増え、若い人達が本物の本と出会う機会が多くなることは、大いに歓迎すべきことである。

このような機会を与えて頂いたことに、改めて深甚なる謝意を表するものである。

共同図書環ネットワークシステムの開発に参加して

株式会社ジェンアークス代表取締役　田中真一

弊社は愛知県立大学において2008年度から取り組みが始まった、文部科学省戦略的大学連携支援事業「共同図書環（館）のネットワークシステムの構築と新たな教養教育プログラムの開発」において、システムの開発担当という立場で参加させて頂いた。本稿を書き始めてみたところ、本プロジェクトの実施期間である3年間の満了まで残すところ2ヶ月余、本当にあっという間の3年間であった。今回このような機会を頂いたので、プロジェクト開始当初を振り返ってみたいと思う。

「複数機関の図書館で蔵書を共通化し、次世代OPAC的機能や学習支援機能を持つシステム」

少々乱暴かもしれないが、本プロジェクトで要求されるシステムを一言で表すとこのようになるかと思う。言葉にしてしまうと簡潔で、個々の要素は特別に難易度が高いという雰囲気ではないが、実のところは、既存の図書館システムのカスタマイズでは対応しきれない、図書館システムという枠にどうにも収まりきらないシステムである。このようなシステムを実現するために、本プロジェクトではシステムの新規開発という、ある意味冒険的とも言えるアプローチを取ることになった。

しかし、時間も予算も限られたプロジェクトである以上、できることは自ずと限られている。選択と集中、早急に妥協すべき点と集中すべき点を明らかにする必要があった。既存の図書館システムに存在する機能を盛り込むのは最小限に留め、実験的な部分を盛り込むことに主眼を置くという基本方針を定めた。システムをOPAC部分である利用者向けシステムと、蔵書管理・貸出業務等を行なうスタッフ向けシステムに分離したうえで、利用者向けシステムに実験的な開発の軸足を置くというわけである。この時点でスタッフの方々にとってはあまり使い勝手の良いシステムにならないことは予想できたので、業務面での評判が芳しくないことは早々に覚悟した（我ながら気の早い話とは思うが）。

開発に当たってはゼロベースの新規開発ではなく、オープンソースの各種フレームワークやライブラリを積極的に使用することで、開発のスタート地点の底上げを計った。とはいえ前例の極めて少ないことであり、定番のフレームワークがあるというわけではない。いろいろと悩んだ挙句、OPACも一種のデジタルコンテンツを扱うシステムであると考えることで、ウェブベースのコンテンツ管理システムが使用できるのではないかというアイデアを得た。このアイデアを検証するためにプロトタイプの作成を行い、コンテンツ管理システムを用いたOPACが実現可能であるという確証を得ることが出来た。その結果、工数の削減に加え、カスタマイズの容易さ、柔軟さを確保できる目算が立った。

このような方針が固まったのが2009年度初頭のことであるが、当然この時点では実際に動作するシステムは影も形も存在しない。当初の予定では同年9月、実際には1ヶ月延期されたために10月にサービス開始という極めてタイトなスケジュールであったが、なんとか無事サービスインすることができた。その後も怒涛のような開発ペースが続くことになるが、幸いにしてシステムが停止するといった大きなトラブルも無く今に至っている。また、OPACにコンテンツ管理システムを用いるというアプローチも一部で注目されているようで、開発者としては嬉しい限りである。

今回、このような振り返りの機会が与えられたのも、共同図書環という試みが、連携スタッフ及び連携機関の皆様のご尽力により、今もって継続しているからこそと考える次第である。この事業に携わる皆様と、このような機会を与えてくださった愛知県立大学 春日井部長に深く感謝を申し上げる。

教養教育プログラム

愛知県立大学学術情報センター長　宮崎　真素美（事業責任者）
名古屋外国語大学総合教養主任　石田　勢津子
名古屋学芸大学教養教育委員長　大島　龍彦
愛知淑徳大学学生部長　石田　好江
愛知県立芸術大学教養教育等(音楽学部)21年度主任　水野　留規
愛知県立大学教育研究センター長　宮浦　国江
愛知県立大学学術情報センター長補佐　臼田　毅
愛知県立大学地域連携センター長　加藤　史朗
愛知県立大学地域連携センター長補佐　福沢　将樹
愛知淑徳大学　谷沢　明
愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科　山村　亜希
愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻　今野　元
長久手町中央図書館　三浦　肇
愛知県立大学学術情報部長　春日井　隆司（実務責任者）
愛知県立大学学術情報部　坂元　理恵
愛知県立大学学術情報部　石田　里美
愛知県立大学日本文化学部国語国文学科　中根　千絵
愛知県立大学キャリア支援室長　吉川　雅博
愛知県立大学学術情報部　刑部　理恵

＜特別寄稿＞
愛知県立大学非常勤講師　名古屋市立大学生物多様性研究センター研究員　小木曽　学
長久手町役場田園バレー事業課　成瀬　守
高野　泰輔
橋本　暁夫・小夜子
（株）電通名鉄コミュニケーションズ局長　古園井　直紀
中部日本放送（株）総務部長　北辻　利寿
株式会社エンパワー代表取締役　橋本　友美
トヨタホーム（株）　服部　誠
株式会社阪急交通社中部メディア営業一部長　田中　明
愛知県立大学文学部社会福祉学科卒業生　四日市社会福祉協議会　阿部希美

「教養教育プログラム事業」実績一覧　（平成２０～２２年度）

３ヶ年で多様な講演会・講座・研究会を連携校の教員２５名の参画で実施。
総参加者数は約１，７００名（学生の参加者数は約１，１００名）。

	取　組　名
1	＜ＳＤ＞ ○大学図書館司書のためのＳＤ　「大学図書館司書の視点と役割」 日　時：平成２１年３月６日（金）　１３：３０～１７：００ 場　所：愛知県立大学　学術文化交流センター文化交流室Ａ 講　師：「大学図書館員の専門性を支えるために」愛知淑徳大学　　伊藤　真理氏 「図書館の活性化と図書館員の使命」明治大学　　大野　友和氏 「情報探索講座から見る司書の専門性と図書館改革」横浜市立大学　高橋　克明氏 田中　千尋氏 参加者：２４名 内　容：大学図書館司書の専門性についての講演や大学図書館の利用者サービスの視点や手法について学ぶ研修会を開催。 ○大学職員のためのＳＤ　「グラフィックデザイン入門講座」 日　時：平成２３年３月１０日（木）　１３：００～１７：００ 場　所：愛知県立大学　学術情報部図書館会議室 講　師：「大学における効果的な広報ツールの活用」 株式会社 I&S BBDO 名古屋支社　中野　晴夫氏 「Illustrator＆Photoshop 入門講座」 株式会社 Too カスタマーサポート部大阪テクニカルサポート課　柏木　沙織氏 参加者：１５名 内　容：広報ツールの活用法を学び、Adobe 社の Illustrator や Photoshop といったグラフィックソフトの操作をマスターしながら、実務に活かせるデザイン基礎力を習得。
2	＜教養教育＞ ○クロストーク「ヤングアダルト小説を読む」 日　時：平成２１年３月２５日（水）　１３：３０～１６：００ 場　所：長久手町文化の家　光のホール 講　師：「おすすめのヤングアダルト小説」、「ヤングアダルト小説の翻訳の難しさ・楽しさ」 法政大学　金原　瑞人氏・翻訳家　代田　亜香子氏 参加者：６９名 内　容：翻訳家である金原瑞人さんと代田亜香子さんがヤングアダルト小説の魅力について語ったクロストーク。 ○「映像と音で探る　東西の地獄絵の旅～神曲と六道絵～　」 日　時：平成２２年６月１９日（土）１４：００～ 場　所：名古屋市千種区　浄願寺 講　師：「日本の中世における地獄絵」愛知県立芸術大学　　水野　留規氏 「ダンテの神曲における地獄と煉獄」愛知教育大学　　鷹巣　純准氏 シンポジム：「東西の地獄を比較する試みについて」 コーディネーター：愛知県立大学　中根　千絵氏 参加者：８０名 内　容：通常では見ることのできない組み合わせの講師をお招きし、東の地獄として鷹巣先生、西の地獄として水野先生が演奏をバックにお話しいただき、東西の地獄を比較する試みについて議論することで、一般や学生の国際的興味を喚起した。

2	<u>○地域連携シンポジウム「大学は地域にどのように貢献を進めるのか」</u> 日　時：平成２２年6月２８日（月）　１３：３０～１５：３０ 場　所：愛知県立大学　学術文化交流センター多目的ホール シンポジスト：　愛知県立大学　佐々木　雄太学長 愛知県立芸術大学　磯見　輝夫学長 愛知淑徳大学　小林　素文学長 名古屋外国語大学　水谷　修学長 名古屋学芸大学　井形　昭弘学長 ゲストスピーカー：長久手町　加藤　梅雄町長 日進市　萩野　幸三市長 コーディネーター：中日新聞社編集局長　志村　清一氏 参加者：１２０名 内　容：多様な大学連携事業を進めてきた五つの大学の学長と関連の自治体の長により、これからの大学の地域貢献の進め方について意見交換し、新たな地域連携の取組みを模索した。 <u>○「伝説となったマドンナたち-イタリア文学・珠玉の名作への誘いー」</u> 日　時：平成２２年１１月３日（水）　１４：００～１７：００ 場　所：愛知県立大学　学術文化交流センター多目的ホール 講　師：東京大学名誉教授　西本　晃司氏 愛知学院大学　松薗　斉氏 名古屋外国語大学　阪上　眞千子氏 京都市立大学　落合　理恵子氏 愛知県立芸術大学　水野　留規氏 演　奏：愛知県立芸術大学在校生・卒業生・教員及び辰見由加子氏、重永まゆみ氏 参加者：８０名 内　容：多くの日本人にはあまり馴染みがないイタリア文学の名作を演奏や朗読を交えて紹介し、作者や作品にまつわる美女たちをテーマに据え、他分野の研究者を交えて討論を行った。 <u>○「香音なときによせて」</u> 日　時：平成２２年１２月８日（水）１３：００～１４：００ 場　所：愛知県立大学　学術交流文化センター 演　奏：愛知県立芸術大学　佐藤　光氏 愛知県立芸術大学　海老原　優里氏 コーディネーター：愛知県立芸術大学　天野　武子氏 参加者：８０名 内　容：「香り」と「音楽」をテーマで、愛知県立芸術大学の佐藤光さんと海老原優里さんによるチェロとピアノ曲の演奏を行った。演奏曲と香りとの関係の解説を交えた内容で、聴衆に「香り」の記憶を呼び覚ましたコンサートであった。

3	＜合同キャリア教育＞ ○第一回　模擬集団面接　「面接力」 日　時：平成２２年１月２７日（水）　１３：３０～１５：３０ 場　所：愛知淑徳大学　星が丘キャンパス１号館３階 面接官：トヨタ自動車株式会社、三菱東京ＵＦＪ銀行、株式会社 阪急交通社、 日本航空　名古屋支店、株式会社 電通　名鉄コミュニケーションズ、愛知県 参加者：１３６名 内　容：連携大学の２・３年生を対象に、就職希望の多い業種から採用担当者６名を面接官として招き、実践に近い模擬集団面接を行った。面接終了後は、面接官から直接アドバイスを受けた。 ○第二回　模擬集団面接「夢をあきらめないで」 日　時：平成２２年１０月１６日（土）　１３：３０～１５：４０ 場　所：愛知淑徳大学　星が丘キャンパス５号館５階５５Ｃ 面接官：トヨタホーム株式会社、株式会社 阪急交通社、東海テレビ放送株式会社、 株式会社 電通名鉄コミュニケーションズ 参加者：１３２名 内　容：5 大学の 2・3 年生を対象に、模擬集団面接を行った。10 名の学生が 4 名の異業種の面接官による本番さながらの面接を実体験し、面接官から直接アドバイスを受けた。また 116 名の学生が臨場感あふれる集団面接を聴講し、客観的に観察することにより自身の就職活動の参考にした。 ○五大学の先輩たちに聞く「生声　先輩から学ぶ」 日　時：平成２２年１１月２０日（土）　１３：３０～１５：３０ 場　所：愛知淑徳大学　星が丘キャンパス５号館５階５５Ｃ コーディネーター：株式会社電通　名鉄コミュニケーションズ　古園井　直紀氏 中部日本放送株式会社　北辻　利寿氏 通訳者　満薗　めぐみ氏 参加者：７５名 内　容：就職後１・２年の 5 大学の卒業生 6 名を招き、車座になって、3 名のコーディネータの進行で①就職活動、②入社してから分かる会社の実態、③大学でやっておけばよかったと思うことなどの体験談を話してもらい、聴講の学生たちにリアルな就職をめぐる出来事を体感してもらった。 ○「大学、企業、卒業生が共に考える学生のキャリア支援シンポジウム」 日　時：平成２２年１２月４日（土）　１３：３０～１６：００ 場　所：名鉄グランドホテル１１階「柏の間」 シンポジスト：株式会社電通　名鉄コミュニケーションズ　古園井　直紀氏 愛知淑徳大学　　真田　幸光氏 愛知県立大学　　吉川　雅博氏 有限会社 ＳＡＮディレクション　　周　思昊氏 中部日本放送株式会社　　北辻　利寿氏 参加者：５２名 内　容：企業から大学、学生への期待、大学から企業への期待、卒業生から企業、大学への期待について、5 名のシンポジストが発表し、会場から集めた意見を元にシンポジストとコーディネーターとで意見交換を行った。

＜教養教育プログラム研究会＞

○第一回「他大学の事例から学ぶ先進事例発表と意見交換会」
日　時：平成２１年7月３１日（金）　１３：３０～１６：３０
場　所：愛知県立大学　学術文化交流センター文化交流室Ａ
講　師：戦略的大学連携支援事業事務局長　桃山学院大学　副学長　木下　栄二氏
南大阪地域大学コンソーシアム統括コーディネーター　難波　美都里氏
福井県立大学　山川　修氏
福井県立大学コミュニティ推進員　澤崎　敏文氏
参加者：１５名
内　容：戦略的大学連携支援事業に取組んでいる２大学より講師をお招きして、先進事例発表と意見交換会を行った。

○第二回　連携公開講座　内田樹氏の講演会「大学で何を学ぶか」
日　時：平成２１年９月２６日（土）　１３：３０～１５：３０
場　所：愛知県立大学　学術文化交流センター講堂
講　師：神戸女学院大学　内田　樹氏
コーディネーター：愛知県立大学　加藤　義信氏
参加者：６２５名
内　容：世の中における「雪かき仕事の大切さ」を説きながら、「教育」をめぐるさまざまを照らし、切り込む内田樹氏を招き講演とコーディネーターの加藤義信氏とのディスカッションを行った。

4

○第三回　事例発表「平成２１年度全学共通科目について　その現状と課題」
日　時：平成２１年１１月２７日　１３：３０～１５：３０
場　所：愛知県立大学　特別会議室
発表者：愛知県立大学　宮崎　真素美氏、竹越　孝氏
参　加：１２名

○第四回　事例発表「総合教養カリキュラムの概要と特徴」
日　時：平成２２年3月１日　１３：３０～１５：３０
場　所：愛知県立大学　特別会議室
発表者：名古屋外国語大学　石田　勢津子氏
参　加：１２名

○第五回　事例発表「芸術系学生に対する教養教育」
日　時：平成２２年８月２日　１３：３０～１５：３０
場　所：愛知県立大学　特別会議室
発表者：愛知県立芸術大学　水野　留規氏
参加数：１１名

○第六回　事例発表「大学における教養教育の現状と未来」
日　時：平成２２年１２月２４日　１３：３０～１５：３０
場　所：愛知県立大学　特別会議室
発表者：名古屋学芸大学　大島　龍彦氏
参　加：１０名
内　容：連携５大学より教養教育分野の代表者が集まり、各大学の教養に関する事例発表と意見交換を行った。

＜地域学「長久手学２０１０」＞

○第一回　フィールドワーク「長久手の農業を観る、食べる」
日　時：平成２２年９月１２日（日）　１０：００～１５：００
場　所：長久手町文化の家　食文化室
講　師：長久手町役場　成瀬　守氏、「出雲」店主　大谷　重治氏、「御膳所」店主　高野　泰輔氏
長久手町在住　鈴木　禮子氏
参加者：２６名
内　容：長久手固有種野菜の現場を観て、収穫も体験。その長久手野菜を使い、料理人たちのアイディアと経験のコラボレーションによって創られた「新作いろどり野菜御膳」を食した。

○第二回　フィールドワーク「長久手の植生観察」
日　時：平成２２年１０月２日　１０：００～１５：００
場　所：愛知県立大学　学術文化交流センター文化交流室Ａ
講　師：愛知県立大学　小木曽　学氏、環境省希少野生動植物種保存推進員　村松　正雄氏
参加数：２２名
内　容：長久手町と周辺の多様な植生、伊勢湾地域のごく限られた湿地にしか見られない「シラタマホシクサ」を観察し、自然を体感した。

○第一回・二回　講座「地域学概論」・「小牧・長久手の戦をめぐる考察」
日　時：平成２２年９月１８日　１３：００～１６：３０
場　所：愛知県立大学　学術文化交流センター小ホール
講　師：愛知淑徳大学　谷沢　明氏、三重大学　藤田　達生氏
参加数：３２名
内　容：「地域学概論」においては、地域学とは何か、その必要性、目指すものなどをテーマに講座が行われ、「小牧・長久手の戦をめぐる考察」では、長久手の戦が残したものは何かについて講座が開催された。

○第三回　講座「長久手町の地域づくりと芸術」
日　時：平成２２年１０月２３日　１３：００～１５：００
場　所：長久手町文化の家　講義室２及びながくてアートフェスティバル会場
講　師：愛知県立芸術大学　　神田　毎実氏
参加数：２６名
内　容：「愛知県立芸術大学と長久手町のアートをめぐる過去から未来」について講座を行い、「ながくてアートフェスティバル会場」では作品を観賞しながら解説を行った。

○第四回　講座「長久手の文化・伝統芸能」
日　時：平成２２年１１月６日　１３：００～１４：３０
場　所：愛知県立大学　学術文化交流センター小ホール
講　師：愛知県立大学　今野　元氏
愛知県棒の手保存連合会　顧問・長久手町文化財保護審議会委員　加藤　康雄氏
参加数：２９名
内　容：「長久手の文化・伝統芸能」をテーマに愛知県内の祭について解説、さらに長久手町で毎年開催される警固祭にスポットを当て、その歴史などを振り返った。

○第三回　フィールドワーク・第五回　講座「長久手町の古地図を読む・歩く」
日　時：平成２２年１１月１３日　１３：００～１７：００
場　所：長久手町まちづくりセンター集会場
講　師：愛知県立大学　山村　亜希氏
参加者：３４名
内　容：小牧・長久手の戦いで各隊がたどった経路を旧版地形図に書き込み、それを持ってフィールドワークを行うことで、日常の風景の中に歴史の痕跡を発見した。

教養・学び・生きること

愛知県立大学学術情報センター長　宮崎真素美

「学び」は、自分に理解できない「高み」に「巻き込まれてゆく」ことであり、自分の「ものさし」に固執していては限界を超えられず、「離陸」できない。教養教育プログラム公開講座「大学で何を学ぶか」の講演者として招いた内田樹氏が、著書『街場の教育論』他で説くところである。私たちは、本事業の教養教育プログラムで実に多くの「場」を、学生・地域の人々・そして私たち自身に提供した。それはつまり、ありとあらゆる事柄が「学び」であり、「教養」の獲得となり得ることの証左であり、同時に、大学における「教養教育」とは何か、という問いをいっそう深めることにもなった。そこに見えてきたのは、「生きること」との関わりである。

連携大学の教員が共同して専門性を発揮する、自由度も質も高いいくつかのプログラムを実践した。そのうち、名古屋市内のお寺を借りておこなった「映像と音で探る 東西地獄絵の旅―神曲と六道絵」は、県立芸大、県立大、そして連携大学外の愛知教育大学の教員によって、閻魔大王やダンテを模した本格的な装束に身を包み、芸大生による演奏をとり混ぜながら、東西の地獄に対する感覚の比較を最新の研究成果をもって徹底的におこない、話題となった。学生や地域の人々、そして研究者が来場した。東西の地獄の差異と共通性をとおして見えてきたのは、「現世をいかに生きるか」という現在的な問題である。

「地域に根ざして生きる」ことは、その土地の歴史・文化・自然を学び、土地柄への理解と再発見がなされることで楽しみを増す。フィールドワークを盛り込んだ「長久手学」の連続講座は、県立大・県立芸大・愛知淑徳大、そして連携大学外の三重大学の教員に加え、町役場の職員を講師として、地域の人たちと自分たちの生活に密着した発見・再発見を堪能した。先立っておこなわれた５大学長と地域首長とのシンポジウム「大学は地域にどのように貢献を進めるのか」で相互に確認した意識が、これらを支えた。

学生たちが自身の生き方に切実に向き合う就職活動。合同キャリア教育プログラムでは、「いかに就職すべきか」ではなく、「いかに生くべきか」に焦点を当てた点が、いわゆる就活講座とは一線を画した。「集団模擬面接」では地元有名企業数社の協力を得て、面接をとおした対話の重要性を学び、十年後の自分をイメジする、という自己の「生き方」に直結する視点の提案を受けた。このプログラムの発展としておこなった「五大学の先輩たちに聞く」、そして、「大学、企業、卒業生が共に考える学生のキャリア支援シンポジウム」において、学生たちは、「はたらく」ことと「生きること」の関わりに意識をひらいた。

教員たちの温度が一気にあがった「教養教育プログラム研究会」は、各大学の教務に関わる教員と、ときには職員も参加しながら、それぞれが抱える教養教育をめぐる問題を報告し、そのあり方について討議した。それは、教育機関としての大学自体が「いかに生きてゆくべきか」という根本理念に立ち返る探究を意味した。

多様なプログラムをとおして実感されたのは、「学び」と「生きること」との不可分な関係であり、そのことへの自覚を促す潤滑剤が「教養」の本質らしい、ということである。

教育部会の活動と成果

名古屋外国語大学総合教養主任　石田勢津子

近年、多くの大学で、教養とは何かという基本的な問題も含めて、教養教育の再構築が行われている。名古屋外国語大学の総合教養でも、外国語大学としての教養教育のあり方を模索し、10年程前から独自のプログラムを構築し、2008年度からは、大幅に拡大したプログラムを展開するに至っている。

このような状況の中で、近隣の大学と連携して、教養教育のあり方を考える機会を得て、他大学との連携による新たなプログラムの開発、また、他大学の教養教育の現状について情報交換を行うことができたのは、非常に有益であった。

とりわけ、「教養教育プログラム研究会」では、各大学が行っている教養教育の現状を、カリキュラムの方針はもとより、教養担当部局のあり方、時間割、教室、受講者数、といった情報が提供され、各大学が直面している問題点について話し合われ、多くの示唆を得ることができた。本大学で実施されている教育プログラムについても、汎用性の問題、教員組織のあり方など、今後の方向性を考える上で参考になった。

また、神戸女学院大学の内田樹教授の講演は、最近の学生に対して教員はどのような役割を担うべきか、共感すべきところが多いものであった。これからの教養教育にとって、広く知識を伝授することだけではなく、学生が自ら考え、行動する場を与えることが重要であると再認識させられた。

さらに、新たな連携プログラムの一つとして、「Tosho Ring」を活用した授業が各大学で実施された。本学の教養ゼミナールの授業も参加し、多くの書評を共有することができた。さらに、副次的ではあるが、本学で実践されている読解力や表現力を育成するためのプログラムとしても効果的であることが、担当教員によって報告されている。「Tosho Ring」が継続されることを期待したい。

「合同キャリア教育」の取り組みは、当初は、本学には学生のために設置されている『キャリアサポートセンター』が独自の取り組みを行っており、連携大学合同の事業は難しいのではないかと思われた。しかし、学生にとっては学内とは異なり、他大学の学生を交えて行われる模擬面接は、多くの情報が得られる場であった。大学間の連携なしには、このようなプログラムは実施できなかったであろう。ただ、今後も本格的な連携事業として、継続して行っていく際には、今回のように教養教育担当の部署ではなく、キャリア支援組織（部署）の連携で実施することが望まれる。

最後に、「長久手学」などのプログラムや各大学で開催された講演会などに、実施期日・時間等の問題もあり、本学の学生や教職員がほとんど参加できなかったのは残念であった。これを機に、連携校の教職員間の情報交換はもとより、学生の交流の場を広く提供していけるよう努めたい。

大学の前途

名古屋学芸大学教養教育委員長　大島龍彦

文部科学省の学校基本調査によると、平成21年に大学進学率は50パーセントを超えた。が、平成4年、205万人だった18歳人口は、平成22年122万人に減少し、今後増加する見込みがない。にも関わらず、平成元年、499校だった四年生大学は、年々増加し続け、現在（平成23年）778校で、279校が新たに開学している。平成元年、584校だった短期大学は、平成3年（1991）年、大学設置基準大綱化で一時増えたが、その後減少し続け、現在395校で189校が閉校と四大化でその姿を消した。姿を消した短大がすべて四大化したとしても、新たに90校が増えた計算になる。

近未来において、この現象は大学運営に大きな影響をもたらすことはもちろんのこと、教育の最前線にいる教職員にも、入学してくる学生の質（学力・生活力など）の変化を見越した対応（カリキュラム改革・授業改革・学生生活の指導）などが急務となる。

ところで、専門職の養成を主たる目的とした戦前の大学教育に対し、戦後の学制改革は職業準備教育と共に幅広い教養教育を学士課程に課した。ところが、新制大学の構成単位は相変わらず学部、学科に置かれ、その結果、大学における教養教育は極端な言い方をすれば、学部、学科を補完する二次的なものとして位置づけられた。

この新制大学発足後、戦後最大の大学改革と言われているのが平成3年（1991）に行われた「大学設置基準大綱化」である。この大学設置基準大綱化は象徴的に換言すれば、「大学設置基準の規制緩和」である。つまり、専門の更なる発展と教養教育の充実が、有機的連携（融合）という方向の中で、個々の大学に委ねられたのである。

ところが、専門教育と教養教育の区分の廃止は、多くの大学で教養教育の質の低下と量の減少（卒業要件単位数）という結果をもたらした。

現在、一部の大学を除く多くの大学に一般教養課程（教養部）の姿を見ることはない。

さて、「大学設置基準大綱化」の内容、特に専門教育と教養教育の区分の廃止に、今後も変化がないと仮定した場合、近未来の大学は次の3極に向かうものと予想される。

①専門に特化した大学
②教養教育と専門基礎のバランスがとれた大学
③教養教育に重点を置いた大学

いずれにしても全入時代を想定して、今一度教養教育を含めた大学教育の在り方を再考する時期に来ていることは間違いない。

主な参考文献

1. 金子元久編『近未来の大学像』玉川大学出版部 1995・4・10
2. 友野伸一郎著『対決！大学の教育力』朝日選書 2010・3・30
3. 2007年度『国立大学の教養・共通教育調査報告書』［資料］学校法人河合塾 2009・1
4. 絹川正吉著『大学教育のエクセレンスとガバナンス』高等教育情報センター 2006・12

「連携して行うキャリア支援・キャリア教育」の意義

愛知淑徳大学学生部長　石田好江

近年、大学におけるキャリア支援の必要性が認識されるようになり、多くの大学がキャリア支援の多様な取組みを進めている。私の勤務する大学も含め、そうした大学では、現在展開するキャリア支援を今後はどのように体系化していくのか、学部教育や大学全体の学生支援とどのように繋げていくのかといったところでの模索が始まっている。

学生に対するキャリア支援は入学者確保という大学の経営戦略と結びついていることから、競争関係にある大学間において共同でキャリア支援を行うことは本来難しい。しかし、今回、取り組んだ合同キャリア教育プログラムは、そうした困難を越えるだけのメリットを十分に持っているだけでなく、キャリア支援･キャリア教育を次のステージに進めようとしている大学にとって、「連携して行うキャリア支援・キャリア教育」というもうひとの方向性を示唆するものであった。

その第１は、企業との新たな連携である。企業関係者を招いての講演会はどこの大学でも実施されているが、同じ企業関係者を招いたものでも、合同キャリア教育プログラムのひとつであった「模擬面接」のような取組を個別の大学で実施することはなかなか難しい。企業の側も特定の大学のキャリア支援に対しては利害関係上協力しにくい面があろうが、大学連携事業ならば企業の地域貢献や社会的貢献として取り組み易いといえる。今回のプログラムの成功も、企業の利益を越えての協力があってこそのものであった。企業との協力関係に基づいた、連携事業だからこそできる魅力的なプログラム開発が期待できる。

第２は、第１のことをさらに進め、地域として中長期的に人材育成を考えていくことである。今回の戦略的大学連携プログラムにおいても、次代を担う社会の財産として「学生」をどう育てていくかを社会全体でバックアップする体制として「キャリア支援コンソーシアム」が構想されており、シンポジウムでも提案された。今回は提案にとどまったが、大学が企業、親・卒業生、行政、NPO などと連携協力し、地域の人材育成に貢献できる仕組みをつくることは社会的要請に応える重要な課題である。また、この取組みは、結果として、この地域を魅力的な知の拠点にすることで、この地域の大学の価値を高めることにも繋がる。

第３は、連携大学の持っている人材をはじめとする知的資源や教育的資源を生かしたキャリア支援・キャリア教育プログラムの共同開発である。相互作用こそが大学連携のメリットであることを考えると、相互作用によって個別の大学だけではなし得ないような効果的なプログラムが可能になろう。

厳しい就職状況の中で大学のキャリア支援は、とかく就職させることだけを自己目的化しがちであるが、学内のキャリア支援をそうした視野の狭いものに陥らせないためにも、大学間の壁を越えた共同の取組みは意義がある。今回の連携事業においても、名古屋外国語大学の「基礎力の育成」を重視した教養教育の実践から、大学における学びの充実がキャリア形成のために必要な能力を身につけることにいかに繋がっているか、そのために初年次の基礎教育がいかに重要であるかを再確認することができた。今回はプログラムの共同開発には至らなかったが、連携大学の実践を交流し、課題を共有するだけでも十分な意義があった。

連携によって可能になる地域貢献

愛知県立芸術大学教養教育等（音楽学部）21 年度主任　水野留規

私が企画・演出を担当し、講師を務めさせていただいた教養教育プログラムは、「映像と音で探る東西の地獄絵の旅―神曲と六道絵」（22 年 6 月 19 日）の神曲に関する部分と「伝説となったマドンナたち―イタリア文学・珠玉の名作への誘い」（22 年 11 月 3 日）である。いずれの催しも、連携大学教員を含めた複数の研究者および県立芸大の在校生との連携のもとで、県民と学生の両方を対象にしたセミナーとして開いた。内容は文学に関係するものであったが、通常の文学セミナーとは異なり、演奏、朗読、寸劇などを伴い、それらに合わせて制作した映像も上映した。企画に際しては、聴衆に学んでもらうと同時に、楽しんでもらうということを重視し、業者に特注した西洋中世の衣裳なども用いて、文学のテキストを視覚化・演劇化することを目指した。

イタリア文学の古典的な作品は音楽や美術とも関係が深いが、それらに学生や一般の方が触れる機会は少ないだろう、という想定から企画はスタートした。とくに中部・東海圏では、イタリア文芸に特化した専門課程をもつ大学がないので、その一端を紹介するという意図もあった。教養教育プログラムには、各大学の特色を生かした内容が求められていた。そのため県立芸大の学生たちにも、演奏家･役者として出演してもらった。芸術大学にはオペラ実習などの授業もあり、演奏能力・演技能力の高い学生は多い。音楽学部の学生たちの参画があったからこそ、二つの教養教育プログラムに芸術大学らしい色付けを施すことができた。学生たちにとって催しは演奏の実績を積むよい機会となり、私にとっても研究・教育活動を地域貢献と結び付ける絶好の場となった。

物語の視覚化に役立ったのが、戦略的大学連携支援事業の支援を受けて制作した映像である。これは「神曲」の地獄・煉獄篇に関するビデオコンテンツであり、そもそも私が授業用に作りかけていたものであったが、事業活動に加えていただいたお蔭で、連携大学の映像メディア学科の先生方から制作上のアドヴァイスを賜ることができた。制作の過程でも、朗読、演奏、イラスト、デザインなどを芸大の在校生・卒業生に担当してもらった。かくして完成した DVD（「芸術大学で制作したビデオコンテンツ・ダンテの神曲」）は、22 年度、芸大の教養教育科目「西洋の古典文芸」と県立大学教員が担当する授業でも試験的に使用された。教養教育プログラムではイタリアの文学や美術の世界を、聴衆にとってなじみが深い日本の文学・美術と比較する、ということも試みた。6 月 19 日の催しでは日本美術史の専門家を、11 月 3 日の催しではイタリア文学の著名な先生に加えて日本文学の専門家を、それぞれ連携大学の外からお招きした。聴衆の中には関心を持って下さった方もおられて、「ぜひ、翻訳ででも原作を読んでみたい」といった、企画担当者にとってはたいへん嬉しいお言葉もいただいた。

戦略的大学連携支援事業にはこの 1 年間の私の活動を支えていただき、その教育部会に出席されていた委員の方々からは、私がそれぞれの時期に連携を希望していた別の方を紹介していただいた。その結果、私の研究室が単独では実施できなかったような催しが実施できた。同事業が終了した後も、教員が試みる地域貢献の企画を支援してくださる部署が、大学間のネットワーク間の中に作られることを祈願してやまない。

図書館が元気な大学

愛知県立大学教育研究センター長　宮浦国江

戦略的大学連携支援事業「共同図書環（館）のネットワークシステムの構築と新たな教養教育プログラムの開発」は、本学においては、教員養成 GP「小学校への見通しをもった幼稚園教員養成」（平成 18—20 年度）、社会人学び直し GP「ポルトガル語スペイン語による医療分野地域コミュニケーション支援能力養成講座」（平成 19 － 21 年度）に続く 3 つめの GP として、平成 20 年度から 3 年間にわたり本学に新たな風を送り続けた。もちろん、学内だけでなく、地域の 4 大学、長久手町、愛知県立図書館との絆を築き、学生や教員にさまざまな学びの機会を提供し続けた。この壮大な取組名称が示すものは、3 年の間に「夢の構想」から「現実」へと見事に姿を変えた。この間の関係者皆様のご尽力にただただ頭が下がる思いである。

Tosho Ring が現実のものとして機能し、すでに 3000 人を超える学生や教員が利用しているという。一冊の本にもさまざまな感想文が寄せられ、そこからまた新たな知の世界へと誘われる。この新たな形態の知的交流の実現ひとつをとっても大きな進歩といえよう。直接顔を合わせてのコミュニケーションとはひと味違うネット上での独特の開放性と、その反面、どこの大学の人か分かっている安心感とを兼ね備えた空間で、利用者は存分に、本を介した交流を楽しみ知の翼を広げている。

また、その前段階にある「選書ツアー」も、参加した学生にとって夢のような本の世界での彷徨であったことだろう。学生時代の良い思い出となるのではないだろうか。本学図書館のしつらえも変わった。入るとすぐに、人目を引く企画展の関連図書が並び、つい足を止めたくなる。「長久手学」など、いくつもの興味深い企画が、複数専門分野からの教員の協力を得て開催された。一般市民の方や学生にとって興味深い催しだったと思われるが、教員にとっても、新鮮な組合せに新たな共同研究の可能性が感じられた。

加えて、教育研究センターが教養教育の企画・運営を業務としている関係で、教養教育プログラム研究会に参加させて頂いた。愛知県立芸術大学の水野留規先生のダンテ「神曲」を素材とした教材作成のご報告に、芸大ならではの見事な教養教育の形を見せて頂いた。名古屋外国語大学・石田勢津子先生、名古屋学芸大学・大島龍彦先生、愛知淑徳大学・石田好江先生からは、それぞれの大学における教養教育の現状と課題について率直に意見交換させて頂き、多くの示唆を得た。特に石田勢津子先生からは名古屋外国語大学での教養教育に関する FD 講演会に参加する機会を頂き、真摯な改善への取組に直接触れることができた。改めて感謝したい。

この事業が展開された 3 年間を振り返る時、私が実感をもって思い出すことばがある。それは、在外研究を過ごしたアメリカ・カリフォルニア大学バークリー校（University of California, Berkeley）のメイン・ライブラリーの壁に記された、第 11 代学長スプラウル（R. G. Sproul）のことばである。

The library is the heart of the university . . . The intellectual growth and vitality of every school and every division, of every professor and every student, depends on the vitality of the library.

（図書館は大学の心臓部である。各学部や学科が、また教授や学生各々が、知的に成長し元気かどうかは、図書館が元気かどうかにかかっている。）

3 年間ありがとう。

本事業に関わった 5 大学がこれからも「図書館が元気な大学」であるように！

外から三分の二見た大学連携事業

愛知県立大学学術情報センター長補佐　臼田 毅

はじめに

私が本大学連携事業に関わることになったとき、Tosho Ring はすでに稼働し、教養教育プログラムもかなり実施済みで、教養教育プログラム研究会に初参加した際には、その後に実施されることになる企画もほとんど立案済みで実施を待つのみとなっていた。このため、様々な企画の大多数に直接触れることはできなかったが、ある意味、第三者的にこの事業を見ることができる立ち位置にいたともいえる。

雑感　～三分の一だけ中から見て～

まず感じたのは、シンポジウム、講座、フィールドワークなど、何と盛りだくさんなのだろうかという点であった。平均して月に１回より多くの企画があったのではないだろうか。しかも、先入観なしの感覚で見てみても、一つ一つが充実し、実施している職員や教員が非常に生き生きとしていた。私が一部だけでも参加したり。実施直後に報告を聞いたものは。平成 22 年度後半の企画に限られるが、「長久手学 2010 のフィールドワーク」、「香音（カノン）なときによせて」、「大学、企業、卒業生が共に考える学生のキャリア支援シンポジウム」などなど、会議での報告時には、報告者は水を得た魚のように幸せいっぱいな感じで報告をし、実施時には、実施者の満ちあふれるエネルギーを感じた。これは、本報告書の他章を見ていただければ、理解していただけるのではないかと思う。

参加者のアンケートを見ても、各企画が非常に好評であったことがわかるが、「もっと広く案内して欲しい」という意見が出された企画があるなど、広報がもったいなかったものもあった。中には人が集まり過ぎても困る少人数企画もあっただろうが、企画の性格に合わせて適切な広報ができればもっと良かったかもしれない。ちなみに、私自身は、本事業に関わる以前は、本事業の企画は全く目に入らなかった。教員が主なターゲットではなかったこと、私自身が鈍感だったこともあるだろうが。しかし、継続事業では、学生自身に企画をさせたり、学生が主役となる場面を多くする方向であるため、学生向けの広報は、もっともっと充実させるべきなのであろう。長久手学 2010 などは、一般の参加が多く、学生の参加は少数だったようでもある。

おわりに

個人的には“盛りだくさん”と感じたが、事業継承が議論された学長懇談会では、「教養教育分野から新たな提案を期待したい」との意見があったそうである。それを聞いて最初は驚いたが、確かにイベントが目立ち、カリキュラムなどに関わる恒常的な取り組みは、意見交換されている段階で、具体的に実施される見通しが立っていないとも言える。そういった時間のかかることこそ、継続によって一歩でも進めていけると良いのかもしれない。

地域連携から見た長久手学の可能性

愛知県立大学地域連携センター長　加藤史朗

「昔がある」ということ

月に一度、長久手町内の愛知医科大学病院に通っている。春うららかな日、あるいは小春日和の時など、病院から大学まで1時間余りを歩くことがある。気が向けば、田畑のあぜ道、香流川の遊歩道を外れ、上郷や前熊の集落に入り込む。いつだったか春の一日、人気のない集落に迷い込んだ。春休みだっただろうか。突然、土蔵のかげから小学校5~6年ぐらいの少女が現れ、ニッコリほほ笑み「今日は!」と挨拶してくれた。懐かしい風景、デジャヴー（既視感）と言うのだろうか。「ここは昔のようだ」と感じた。よくよく考えてみると、つげ義春の漫画『紅い花』に影響を受けたイメージなのかも知れない。ともあれ実に幸せな一瞬として、この体験は今でも記憶に残っている。最近あまりにも「昔がない社会」が広がってはいないだろうか。「昔がある」ことの大切さを、「無縁社会」という言葉が飛び交う近頃しきりに思うのである。

「地域に根付く」ということ

愛知県立大学は1998年に瑞穂区高田町という「地域」から切り取られ、長久手の万博会場予定地の隣に接ぎ木された。大学にとって「昔」の記憶とは縁もゆかりもない場所である。同僚の間で「高田町の時代は良かった」という声が今も止まない。しかしすでに万博の喧噪もおわり、県大は13年の年月をこの地で過ごしてきた。ノスタルジアに浸るのは、時々のことでありたい。

地域連携センターの活動は、この間、多岐にわたり試行錯誤の連続であっただろう。だが基本路線は、揺るぎない。地域に根付き、堅実な歴史を刻むということである。果たして県大は長久手の地に根付いたであろうか。今それが切実に問われ始めていると思う。大学は研究の場であると共に教育の場であるからだ。大学における「教育」とは学生の自己形成を支援するシステムのことである。このシステムが機能するには、地域連携が必要不可欠な要素である。人と人との関係性、人と自然との共生が若者の自己形成の土壌だとすれば、県大のキャンパスはまさにエコロジカルな空間でなければならない。ブロイラーのように若者を育てる場であってはならない。今から13年前、初めて見た県大のキャンパスは極めて無機質な印象であった。しかし、キャンパスはいま「生徒」を脱皮した「学生」たちの努力で有機的な空間に近づきつつある。学生が主体でなければ、いくら植栽に気を配り菜園を設けても、エコロジカルな場とはならない。エコキャンパスには、若い生命力が必要なのである。

「長久手学」ということ

昨年9月、県大で地域学講座「長久手学2010」が開催された。愛知淑徳大学の谷沢明先生は、その中で「地域学」の基本は「あるく、みる、きく」ことだと言われた。私たちはすでに一昨年、本学日本文化学部の山村亜希先生の案内で、古地図を手にして「長久手を歩く」行事を行った。急速に変わりつつある長久手の町中で、たくさんの「昔」と出会った。長久手はテクストとして眼前に開かれ、万人に読み解かれることを自ら欲していた。言い換えれば「長久手学」は、すでに存在しており、「あるく、みる、きく」人を求めていたのである。県大の若い先生や学生たちは、リニモ沿線調査や「あぐりん村」に出かけて、すでにこの作業を実践している。こうして浮かび上がってくるのは、「地域連携から見た長久手学の可能性」というよりもむしろ「長久手学から見た地域連携の可能性」である。

長久手学の成果と今後の課題

愛知県立大学地域連携センター長補佐　福沢将樹

戦略的大学連携支援事業の一環として、約１年あまりの間、「長久手学」の立ち上げに携わってきた。但し多くの部分が事務職員の春日井部長の並々ならぬ尽力によって進められていった。

実際に開催された内容は､5つの講座と３回のフィールドワーク（同日に行われたものもあるので、合わせて６日間）であり、講座の受講者は 27 名、全８回の延べ参加者は 200 人近くに上った。

愛知県立大学には「地域学」の専門家もおらず、長久手町をフィールドとする研究を行っている教員も多くない。そのため愛知淑徳大学の谷沢明氏に｢地域学｣の講座を頂き、歴史、地理、植生、農業、料理、伝統芸能､芸術の諸分野において三重大学の藤田達生先生、本学山村亜希先生、本学非常勤講師小木曽学先生、瀬戸市南山中学校の村松正雄先生、長久手町役場の成瀬守様、大谷重治様、高野泰輔様、鈴木禮子様、本学今野元先生、町内の加藤康雄様、愛知県立芸術大学の神田毎実先生、その他本学事務職員坂元さん、石田さんや長久手町・尾張旭市施設関係の方、カメラマン、運転手の方々にもお世話になった。皆さん、こんなに快くお引き受け下さるとは望外のことであり、深く感謝申し上げる次第である。

参加した方々から寄せられた声にも、有意義な発見があり、来年度以降も続けてほしいとの要望がある。

しかしこの度は補助金があったのでできたという側面は否めない。「長久手学」とするからには長久手町からの金銭的な支援をも要望したい。或いは今後は長久手町に限らず愛知県全体に視野を広げて「愛知学」のような形に発展させ、愛知県との連携を考えたり、場合によっては特定企業・団体との連携を考える必要も出てくるかもしれない。また愛知県公立大学法人からも十分な理解を頂きたい。

必要なことは、金銭的および人的支援である。教員には長久手学や愛知学を専門にするスタッフは現在在籍していない。長久手学（愛知学）を行うのであれば、行わない場合に比べ、予算だけでなく教員・職員も必要になるのは当然のことである。実際、例えば立命館大学の「京都学」においては専任の教員を配置している。しかし増員が行われないと、職員全体の総仕事量は平均的に多忙になり、教員は自分の人生を賭けた仕事への力を削がれることになる。人疲れて成果あり、というのでは、長期的に見て大学全体の力が弱体化しかねないのではないかと危惧する。

なお今回は、講座・フィールドワークの様子を報告書のような形でまとめるまで手が回らなかった。しかし内容はそれぞれ興味深いものであり、次年度以降のために､見やすい記録として残しておく必要があった。とはいえ、立ち上げ１年目の成果としては予想以上のものに仕上がったと思う。今後の更なる発展を期待したい。

地域が盛り上がる気持ちを育てる

愛知淑徳大学　谷沢 明

長久手町の歴史・芸術・文化・地理の連続講座の概論として、「地域学とは何か」「地域学の必要性」「地域学の目指すもの」の三つの視点から話をした。いわゆる「地域学」が百花繚乱の時代を迎えたのは、1990年代後半に入ってからのことである。

ところで、「地域学」とは、どのようなものであろうか。それは、自分が住んでいる地域の風土・歴史・文化を見つめ直し、地域の魅力や可能性を発掘する方向性をもった学際的領域、すなわち、地域社会・地域文化の振興を目指す分野である、といってよいであろう。「地域学」は、研究者・行政はもとより、NPOをはじめとする地域住民を巻き込んだ「地域づくり」「まちづくり」に連動しながらの展開がみられる。

次いで、「地域学の必要性」は、どのようなところにあるのであろうか。今日、地域住民が一体感をもって、個性ある地域社会を創っていくことが求められている。このシティーアイデンティティーの醸成、それが現代社会の課題のひとつである。そのためには、地域住民一人ひとりが地域の個性を見つめ、地域の魅力を引き出してしていこうとする気持ちをもつことが必要である。地域社会が豊かになるための主体的な学びの機運を高め、それに並行する実践活動を呼び起こしていく。地域学の必要性は、そのあたりにあるのではないか。

三つ目に「地域学の目指すもの」は何か。それは一言でいうと、地域の価値を発見することを通じて、よりよい地域社会をいかにして創りあげていくか、を考えていくことではないだろうか。地域の価値は、「地域の宝」と言い換えてよいであろう。地域の価値には、風土的価値・歴史的価値・文化的価値がある、といわれている。その「宝」を見つけ、磨きあげるために、いかに創意工夫をこらしていくのか。そして、次世代にどのように引き継いでいくのか。その創造的行為が、地域学の目指すものではないか。

この、地域を見つめる手法として役立つのが、フィールドワーク。それは、「歩く」ことにはじまる。そして、出会った物事に対峙することにより、事実を事実として受け止め、歩く中での実感をもとに事象を考えていく手法である。フィールドワークは、自分の目を通して物事を見て、その背後に潜むものをとらえていく、そんな作業の積み重ねである。地域を歩くことによって出会うさまざまな発見、そして感動。その体験が、柔軟な思考を生み出していく。

「地域学」においては、単に知識としての「地域」を知ることに止まらず、熱い思いや、確かなノウハウをもった人材をいかに育てていくかが課題となろう。また、他地域の人々と交流して、その土地に必要なものを取り入れていく仕掛けづくりも大切である。それが、「地域学」の実践であろう。そして、人々が交流し、意見を交換する中で、地域が盛り上がる気持ちを育てていく。それが、実践において何よりも大切であろう。「長久手学」の今後の可能性を考えるにあたり、そんな思いが湧いてくる。

「長久手の古地図を読む・歩く―旧版地形図にみる長久手の原風景―」を通して

愛知県立大学日本文化学部 歴史文化学科　山村亜希

2010年11月13日に標題の講義とフィールドワークの講師を務めた。前半の講義では、明治期の地形図から、長久手町の地形的特徴と旧道のルート、溜め池の分布、集落の立地傾向を読み解き、明治期以前の長久手の「原風景」を復原した。次に、戦国末期の「長久手の戦い」の次第を地形図上に色鉛筆で辿る試みを行い、合戦を地理の視点から見直した。後半のフィールドワークでは、「長久手の戦い」にまつわる史蹟が多く残る旧長湫村を歩き、この地域の「原風景」と「長久手の戦い」との関係を現地で解説した。旧長湫村は区画整理が行われすっかり景観が変わったが、現在でも旧地形の高低差や旧流路の痕跡は残り、道の屈曲や神社の向き、高台を選んだ寺社・城、溜め池を埋め立てた公園などに、「原風景」の断片を見出すことができる。このような現代に息づく「地域固有の地理と歴史を反映した景観」への気づきが、町づくりに活かすことにつながれば幸いである。

4時間30分に及ぶ長丁場であったが、受講生は意欲的に学んでくださり、長久手の歴史・地理・文化に対する関心の高さが実感された。長久手町に長年居住・勤務されている受講生もおられ、区画整理以前の長久手の「原風景」の記憶を逆に教わることもあった。しかし、そういった受講生からも、長久手全体の景観の中で、過去の記憶がいかに統合され、どういった歴史・地理的意義を持つのかを知ることができたとの感想を頂いた。また、地理の視点から地域の歴史を見直す内容が新鮮で面白かったとの評価も頂き、全体として概ね好評であったことは、講師として大変有り難いことである。

今回の講義とフィールドワークの準備には相当の時間を要したが、これを機会に旧長湫村の明治期の景観復原図を詳細に作成したことで、研究の好奇心も喚起され、自らの研究の幅や可能性も広がった。地域貢献は既に終了した研究成果を還元するだけではなく、やり方によっては、研究のプロセスや原動力にもなり得る。そういう意味で地域貢献は、研究者にとっても「余業」ではなく、研究と両輪をなすものとなり得るものだろう。

ただ、「若い町」長久手町を構成する主力世代の20代~40代の受講生が極めて少なかったことは残念である。これは、歴史や地理、文化を学ぶことが「趣味」化し、現実の生活や社会に直結しないという現代の風潮とも関係しているのだろう。育児や仕事で土日も忙しい長久手町の主力世代には「長久手学」への関心は相対的に薄いのかも知れない。しかし、今の生活の舞台にこそ、「地域固有の地理と歴史を反映した景観」が残されており、それに気づくも気づかないも、町づくりに活かすも活かさないも住人次第である。これからの町を作っていく世代にも、それを発見する視点を伝えたかった。また、今後の「長久手学」が、「趣味」の提供ではなく、大学が主催する地域講座として、現実の地域社会とつながる形で発展する工夫を期待したい。

愛知郡長久手町の民俗芸能　―棒の手と馬の塔―

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻　今野 元

「棒の手」と「馬の塔」は、東尾張、西三河を中心に分布する民俗芸能である。「棒の手」とは農民武芸で杖術の一種だが、現在のものは寧ろ剣舞の様相を呈している。棒の手には複数の流派があり、杖を用いるものを「表技」、鎖鎌、薙刀、槍、十手など各種の武具を用いるものを「裏技」という。戦国時代の岩崎城主丹羽氏が農民を戦争に動員するために始めたとも、農具などに用いられる棒を農民が神聖視したとも言われ、いつどのように始まったかは定かではない。現在では長久手町を始め周辺各市町村で保存会が作られ、学校でも技能の継承が図られている。「馬の塔」は「オマント」と読み、社寺に農村から「標具」（ダシ）と呼ばれる装飾物を置いた馬を奉納する行事である。この馬の塔の成立事情も分かっていないが、室町時代にはすでに記録が見られるという。献馬の対象となる社寺で重要なのは龍泉寺（東尾張）と猿投神社（西三河）で、毎年ではなく豊作の年に周辺の数多くの村落から一斉に行われた（「合宿」）。このため標具の奪い合いや順番争いなど村落相互の紛争が絶えず、馬を「警固」するために大勢の棒の手隊や鉄砲隊が同行することになった。ちなみに近年の国史学では、織豊政権以降の「刀狩令」には数多くの抜け穴があったことが明らかになっており、江戸時代にも馬の塔には堂々たる鉄砲隊が同行していた。

愛知郡長久手町の「警固祭」は、棒の手隊や鉄砲隊を伴う馬の塔が町内で独特の発展を遂げたものである。広範な地域からの合宿は遂に大正期、昭和初期に流血の惨事を惹き起こし、更に総力戦体制への移行、戦後の農業衰退もあって、今日では行われなくなっている。大正期まで愛知郡長久手村では、大字長湫が龍泉寺へ、大字岩作、大字前熊、大字北熊、大字熊張が猿投神社へ献馬を行っていたが、これが途絶したのちは、他市町村とは無関係に長久手町独自の警固祭として、各大字の各社へ数年に一度献馬をするという簡素な「郷祭」の形態に変化していった。今日では長湫地区（景行天皇社、富士社）、岩作地区（石作神社）、上郷地区（熊野社、多度社、神明社）に別れて保存会が作られ、各々の周期で警固祭が開催されているが、平成 18 年には愛知郡長久手村百周年を記念して三地区一斉に開催された。毎年 10 月第 2 日曜日に長久手の田園に一日中鳴り響く火縄銃の一斉射撃は、かの「小牧・長久手の戦い」を彷彿とさせるものであるが、実は警固祭は合戦には何の関係もない農民の行事なのである。

長久手を象徴するこの「警固祭」も、いま課題を抱えている。滔々と進む都市化の波は祭礼の運営主体であった農村共同体を変容させている。また「犬山祭」（針綱神社）、「はだか祭」（尾張大國靈神社）、「津島天王祭」（津島神社）など他の有名な祭礼とは異なり、長久手「警固祭」は地域住民の内輪の祭礼という性格を変えておらず、見学場所なども未整備で、観光資源としては機能していない。従って噂を聞いてやってくる見物客と、馬や鉄砲の扱いで神経質になっている祭礼参加者との軋轢も絶えない。

さて今回の公開講座は、幸い参加者から好評を得ることができ、特に愛知県棒の手保存連合会顧問の加藤康雄氏による実情の説明は、講座に新鮮さを加えた。今後も調査を継続して、「長久手学」の学問的水準を高めていく必要がある。更に県立大学として「長久手学」を「愛知学」へと発展させ、愛知県下の民俗芸能を総合的に分析し、将来的には地域研究の専門科目の開講、更には担当専任教員の採用を考えてもよいではないかと思われる。

祭りを伝える

長久手町中央図書館　三浦 肇

私は、長久手町役場職員として、平成22年度から長久手町中央図書館に配属になり、戦略的大学連携支援事業に参加した。

事業開始後3年目ということで、特に「長久手学」の運営の一端に関わることになった。

具体的な私の任務は、町の施設で事業を行う場合の会場の確保と、「地域学講座」及び「長久手探訪」の、地元関係の講師を探すことであった。

「長久手学」は歴史、農業、祭りなど、様々な切り口から「長久手」に迫ろうとするもので、大変意欲的な試みである。学者ばかりでなく、実際に各分野で活躍している様々な人材を登用したいとのことであった。

特に「地域学講座『2010』」の「長久手の文化・伝統芸能」では、愛知県立大学准教授今野元氏が長久手町に伝わる「警固祭り」の概要を話されるとともに、実際に祭りの開催に関わっている方も講師に招くことになった。このため、祭りに詳しく、また受講者に説得力を持って祭りの実態を説明できる人材を探す必要があった。

さて、長久手町に500年ほども前から伝わっているとされる「警固祭り」は、大変勇壮な祭りである。祭りの日は町内全域から「エイサイ、ホウサイ」の掛け声とともに神馬を守る警固の隊列が繰り出して来る。行進の途中や、氏神の境内で発砲される火縄銃は、近隣でも一番数が多く、二列に並んだ鉄砲隊が次々に発砲する様は非常に迫力がある。隊列から離れて観ていても耳を聾するばかりの発砲音に驚かされる。また氏神で奉納される「棒の手」は昭和31年に愛知県無形民俗文化財に指定された格式ある民族芸能である。

しかしこうした祭りも火縄銃の発砲（空砲）のための火薬の規制や交通規制、地域共同体の変容など、多くの課題をかかえている。

祭りを運営する人々は、こうした課題を乗り越えて、今に祭りを伝えているのだ。

地元からの講師は、長年祭りの運営にたずさわってきた愛知県棒の手保存連合会顧問であり、長久手町文化財保護審議会委員の加藤康雄氏にお願いすることになった。

加藤氏は80歳という年齢をまったく感じさせない方で、力のある声ではっきりと話され、祭りや棒の手に関わる年号も非常によく記憶しておられた。

打合せのために県立大学に伺った折には、ちょっとした待ち時間などにも、小学校時代の思い出などを生き生きと語られたことが印象的である。

講座当日、加藤氏は、祭りの継承の実態などについて話された。受講者からは「警固祭りがこんなに盛大に実施されているとは知らなかった。」「警固祭りは全国に誇れるお祭りだと思います。」「歴史的背景も判り非常に勉強になった。」などの感想が寄せられた。私たちの生活、私たちが生活している地域を見つめ直して次の世代に引き継ぐ。「長久手学」はそのための一助となったと思う。

参画した教職員の「情熱」「思い」が『長久手学』を構築した

愛知県立大学学術情報部長　春日井隆司

「長久手学」のプログラムは、本学の佐々木学長の「学生に大学がある長久手町を知る機会があったら良いね」の言葉を数年間反芻した結果生まれた企画である。

実施に当たっては、立命館大学の「京都学」のプロセスや構成、展開についてご教示いただいたり、全国の地域学の現状や課題を１年間、調査・研究したりした。その結果、大学の知見に基づく地域学は専門性が高いため継続されており、体系化されたプログラムは地域の活性化に結びついていること、学生の参加はキャリア教育や新たな連携へ発展することなど幾つかの利点があることを確信し、企画を具体化するに至った。

プログラムの具体については、学内の企画会議を開き、社会学や文学、歴史学、自然科学などの教員に集まってもらい意見交換したところ、「長久手学」への参画に否定的な教員は数名いましたが、「面白そうだからやってみましょう」との今野先生の発言、「私は専門ではないが植物に詳しい人がいるので協力しましょう」との横田先生の言葉に救われ、前に進めることができた。本学の山村先生には海外研究中にも関わらず参画を快諾いただいたほか、愛知県立芸術大学の神田先生には初対面でのお願いでしたが意気に感じてのご賛同で勢いを得て、その後、「長久手学」コーディネーターの福沢先生の冷静なアドバイスでプログラムの素案がまとまった。

実は、最大の後押しは学外の先生方からだった。お一人は三重大学の藤田達生先生で「貴学に専門の先生もいるのですが、地域学を事務職員が企画しているのですか。羨ましいですね。」とあった。あまりの嬉しさに２時間かけ先生に会いに行き、地域学の将来性について貴重なアドバイスや激励をいただいた。また、淑徳大学の谷沢明先生には、地域学の意義や可能性、学生のフィールドワークの効果についてご教示や深いご理解をいただき、本学初の地域学講座「長久手学」のプログラムを実施することができた。

「長久手学」を終えて感じたことは、長久手町の職員の丁寧な対応やご参画いただいた講師の方々の情熱や思いの高さであった。そのことは参加者のアンケートにも「長年住んでいるが、新たな発見が多かった」「地理的・歴史的分析で地域を見ることができた」「初めて古地図を持ってのフィールドワークは新鮮であった」「次年度以降の継続を望む」の評価に表れている。

自然や歴史、地理、文化、芸術、食と初年度としては欲張った８つの講座とフィールドワークだったが、長久手町の魅力の発見やそれを支える人々へ感謝や理解への共感を広げる機会になったと思う。企画した私自身、この講座を通じて長久手の自然や風土、特に野菜に関心を持ち、その後の生活に大きな影響を受け、いつかは長久手町に住んでみたいと思ったくらいである。

反省点としては、大学連携支援事業を通じての悩みであるが、学生の参加の少なさで、PR の方法など工夫をしたが、学生の参加を促すのは極めて難しいことだった。学生のヒヤリングで分かったことだが、内容が分かりにくいことや関わりが見極めにくいなど複合的な理由があったようだ。次年度は、学生を地域学に参加させるのではなく、企画や運営に学生の新鮮な感覚や探究心を活かせればと考えている。数年間は先生方や市町の人にはご協力をいただかなくてはならないが、平成 23 年度は「愛知・長久手学」とエリアを広め展開し、将来的には新たな学問分野を形成する礎になればと願っている。

待てば海路の日和あり

愛知県立大学学術情報部　坂元理恵

戦略的大学連携支援事業の「連携」は大きな波紋をよんだ。

慌ただしくスタートした「連携」に携わることになった関係者は当初、その挑戦に戸惑ったことだろう。これまで接点のなかった組織同士である。事務局メンバーも同じく、にわか作りのメンバーであった。共同体として一つの舟に乗ってはいるが、その船首が沖を向いているのか、はたまた地上を向いているのか、しばらくの間判別つかなかった。しかし、優れた船長の下､その矛先は穏やかな速度ではあるが理解が得られ、現在では広く認知されている。着実に勢いを増し、明確な方角へ進んできたのだ。

その航路もいよいよ終着地点を間近に控え、これまでの活動を振り返る時期となった。教養教育プログラムは約3年間の間に9つのプログラムを実施し約1,700人の参加者があった。振り返れば、そのどれもが枠にはまらないユニークな取組であり、新風を巻き起こすきっかけとなった。例えば、長久手町文化の家で実施した「金原瑞人さんと代田亜香子さんのクロストークヤングアダルト小説を読む」は、連携事業として初めて展示と講座とを連動させたイベントである。「翻訳本の世界」とうたった展示は訳者にスポットを当てヤングアダルト小説というジャンルを根付かせるきっかけになり、講座はガラリと変わり感情移入した本や勇気をもらった本についてカフェで二人が会話をしている場面を垣間見る、という演出であった。講演者の二人もこの設定に快く賛同してくださり、カフェ風舞台は大盛況の内に終了、まさしく展示と講座とが期待通りコラボレーションした企画となった。

地域学として立ち上げた「長久手学 2010」は、ネーミングが現すよう「2010」で終わることなく今後も継続していく意味が込められている。さらに進歩を遂げることを目指し、来年度は「愛知･長久手学（2011?)」として成長する勢いだ。長久手町の史蹟を、受講者と歩いた時に印象に残ったのは、歴史の重みと共に彼等の生き生きとした姿であった。これはバラエティに富んだ講座内容も魅力であったが、何より受講者の“学びたい”、というやる気の高まりもあったからである。アンケートからは思いもよらぬ意見が飛びだした｡「講座を受けられた皆様と長久手町の歴史・文化などを継いで学ぶために何らかの会をもうけられたらどうでしょうか」。講座のみならず今後も意欲的に受講者との交流を持ち、且つ地域について学んでいく姿勢がうかがえる。このような意見は事務局としてはこのうえなく歓迎すべきことであり、次年度へ向けての励みとなった。

当初、懐疑的な眼でみられた事業ではあるが、その取組に一目置かれたことも事実である。誰もチャレンジしたことがない、またチャレンジしたがらない取組に一石を投じたわけだが、着実な効果が表れるまでにはもう少し時間が必要だ。従って、これからが連携事業の本格稼働と言えるのかもしれない。文部科学省の補助事業としての取組は終了であるが、今後いくつかのプログラムは試行的に継続していく予定である。現在、事業を通して広がった「連携」という波は、大きな「うねり」となりこの地域を旋風している。3年前に始動した「連携」は、今まさに新たな航路へと漕ぎ出すときにきているのだ。

フィールドワークは参加者に何を残したのか

愛知県立大学学術情報部　石田里美

フィールドワークの特徴は、実際に「見る」「触れる」ことである。今回、フィールドワークを担当し、「見る」「触れる」ことがどれほど楽しく、またどれほど自分の世界を広げるかを実感した。

「見る」「触れる」ことで、目の前のものを自分の感性で捉え、今まで頭でしか理解できなかったことを実感して理解できるようになる。十人いれば十人の発見があり、感動があり、疑問があり、理解がある。そして、それらを共有すること（意見交換）で無限大の魅力へとつながっていく。これに気がつくとフィールドワークが楽しくてたまらない。

第１回「長久手の農業を観る、食べる」では、長久手の農場を見学し収穫も体験した。

野菜が生っている様子を見たことはあっても、その花を知らなかったことに気付いた。こんな小さな気づきでも発見だ。誰かに知らされる発見より、自分で気づく発見の方がはるかに感動する。

長久手の固有種野菜に「真菜」があるが、料理人たちのアイディアと経験のコラボレーションによって創られた真菜を活かした新メニューも、長久手の新たな魅力発見だ。

第２回「長久手の植生観察」では、長久手町と周辺の多様な植生を観察し、自然を体感した。

伊勢湾岸のごく限られた湿地にしか見られない「シラタマホシクサ」は、白っぽく霞のように群生で咲く花だ。近づいてみると小さくて金平糖のような白い可愛らしい花である。目を閉じるとシラタマホシクサの香りを感じる。長久手にはこんな財産もあったのだ。

第３回「長久手の古地図を読む・歩く」では、古地図や資料を持って長久手を歩くことで、現在の風景からは想像し難い過去の合戦の光景を思い浮かべることができた。史跡を訪れるだけでも歴史に触れることはできるが、フィールドワークによって、日常の風景の中に歴史を「発見」「実感」する楽しさが加わった。

私は、「発見」「感動」「疑問」「理解」、これらはすべて楽しむことから始まるのだと思う。楽しむ気持は何ものにも勝るパワーを持っており、誰の中にも存在する。フィールドワークは参加者たちに「楽しむ」きっかけを与え、「発見」「感動」「疑問」「理解」そして「愛情」を残したのではないだろうか。

今回のフィールドワークへの参加者は、第１回 26 名、第２回 26 名、第３回 34 名。長久手町からだけでなく、名古屋市内からの参加も多かった。しかし、学生や若い世代の参加が少なく、フィールドワーク開催の情報がなかなか学生に伝わらないなどの問題が指摘された。

今後の課題は、①フィールドワークの目的を明確にし、存続のための体制を整える。②フィールドワークの題材の検討。アンケートなどを参考に需要も考慮に入れながら何をどう選んでいくのか。③学生や若い世代のフィールドワークへの参加者をどう増やすか、広報の方法や開催時期等の検討。将来、地域を支えていく学生や子育て世代が、地域のことをもっと知り愛着を感じながら生活することは、地域が活性化していくために必須である。より多くの人に、地域と関わりを持って地域に愛情を感じて欲しい。

東西の地獄絵のコーディネーターとしての成果と所感

愛知県立大学日本文化学部国語国文学科　中根千絵

東西の地獄絵のコーディネートをするにあたって、まず最も重要視したのは、学問的に最先端のご研究をなさっている講師の選定であった。幸いにも、連携校の愛知県立芸術大学には、イタリアのダンテの地獄に喚起された絵画収集において日本では類を見ない量の絵画の写真を現地調査によりおもちであり、それについての知識も大変深い水野留規先生がおられた。そこで、西の地獄として、ダンテの地獄煉獄を扱うこととなった。それに対して、東の地獄の講師は、日本で地獄絵のご専門で高名なのは、愛知教育大学の鷹巣純先生以外におられず、まずは、お引き受けいただけるかどうかが最大の課題であった。ご講演依頼も多い先生でもあり、4月にお願いして、半年以内で行うという日程は、発表の準備期間を考えても普通は無理な日程だと思いつつも、おそるおそるお願いしたところ、日程があえばということで、お引き受けいただくことができた。お二人とのシンポジウムの打ち合わせは、数度に及んだが、学問的に楽しいものであった。

次に、心をくだいたのは、その専門的で最先端の内容をいかに、効果的に一般の方々にお伝えするかというその方法であった。春日井部長のご提案により、太宰治の記した思い出の地獄絵の風景の再現さながらに会場を寺にするということになったものの、寺の方にご理解が得られないとまずは開催できない。そこで、春日井部長、宮崎センター長と共に、浄願寺にご説明にうかがったところ、ご住職の箕浦遵氏は大変知的な方であり、学術的な催し物であるならば、お貸ししましょうということで、話はトントン拍子にすすんでいき、浄願寺の空いている日程と講師の先生方の日程も無事、調整することができた。その中で、さらなる問題として浮上したのが、いかに古い時代の臨場感をだすようにするかということであった。ここでも、春日井部長から、衣装や音楽を使って感覚的に見ていただけるようにしたらどうかというご提案をいただいたが、普段、真面目に学会発表をしている研究者にそうしたパフォーマンスにも近い形のご講演をお引き受けいただけるのか、甚だ不安であった。これもおそるおそるお願いしたところ、お二人の先生方にはご理解をいただき、その上に、学生の皆さんのご協力を得て、当時の衣装を忠実に再現した凝った衣装（学術的にも意味のあるもの）を用意することができた。最後に残った課題は、音楽をどうするかということであった。ダンテの方は芸大の学生さん達が協力してくださることになったが、それならば、日本の方も謡曲「野守」を入れたいという鷹巣先生からのご提案もあり、あれこれ、交渉をしたものの、お金の問題もあり、プロにはお願いできず、学生にできる人がいないということで困りきっていたところ、浄願寺のご住職が謡いを習われているという情報を得、なんとかお願いをしてお引き受けいただいたのであった。そのお声の素晴らしさは、当日、参加された方々が耳にした通りである。

本企画は、講師の先生方、「野守」の謡いで演出にもご協力くださった浄願寺のご住職、事務方として支えてくださった春日井部長、様々な調整をしてくださった宮崎センター長、凝った衣装作成や演奏などにご協力くださった学生の皆さんの力がうまく一つの方向に働いた結果、学術講演とそれを効果的に見せる演出が見事に融合したものとなった。参加された方々の感想にも見られるように、学問とパフォーマンスが良い方向に働いた成功例だと考えている。

大学連携事業でのキャリア科目の開放

愛知県立大学キャリア支援室長　吉川雅博

大学生の就職内定率が過去最悪と報道され、大学生の就職難に対して世間の注目が集まり就職氷河期と呼ばれるようになった。折しも、平成23年4月1日から大学の設置基準が「学生が卒業後自らの資質を向上させ,社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を,教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう,大学内の組織間の有機的な連携を図り,適切な体制を整えるものとすること。」と改正され、大学内での学生の就業力の向上に向けた取り組みや体制を整えることが求められている。今回の「模擬面接」、「先輩に聞く」、「シンポジウム」の3つの合同キャリア教育プログラムは、このような状況で実施されたことになる。これらは他の大学と連携した場合の学生の就業力を向上させる実験的な試みと位置付けられる。各大学がそれぞれの個別事情をふまえた就業力向上策を強化している中で、他大学と連携した場合、何が効果のある就業力向上策なのだろうか。

「模擬面接」と「先輩に聞く」はおそらくどの大学でも毎年実施されてきている。面接は採用に直結する重要な場面（過程）であるし、先輩の経験談も貴重な情報である。他大学と連携することで、学生がそれらに接する機会が増えることはよいことだろう。しかし、他大学の学生の模擬面接場面に立ち会い、あるいは経験談を聞くことで、どのくらいのメリットを感じるだろうか。「模擬面接」や「先輩に聞く」についての学生のニーズは、質問の内容や受け答え方と関心がある企業の業種や個別企業などに関係する情報が得られることである。対象が他大学の学生でも自大学の学生でも大差がないのではないだろうか。

「シンポジウム」では、企業がどんな人材を求めているのか、学生の就業力向上のためのプログラムやサポート体制をどのように進めるのかについて現状が報告され、シンポジストが意見を述べた。今回のシンポジウムでは、学生のキャリア支援に関して重要な示唆がいくつも示されたので、多くの現役の大学生に聞いて欲しかった。このような内容のシンポジウムや講義を大学が連携して実施すべきであると思った。

国や県で学生の就業力向上策が検討され、いろいろな策が実施されている。しかし、いろいろな策を学生に対して実施すればするほど、「自主性」「自律性」「コミュニケーション」など企業が求める能力を、学生が伸ばす機会を奪っているのではないか。お膳立てをしてあげないとできない学生をつくっていることになってしまう。さりとて、何も策を講じないで放置しておくことがベストだとも思っていない。適度の見守りと適切なアドバイスが必要であるが、これは連携事業では困難である。学生の就業力向上策の基本は丁寧な個人対応であり、これは自大学の学生に対してだけでも十分にはできない。

大学生3年生にもなれば、少なくとも学生自らキャリア支援室の門をたたくことくらいはしてほしい。現状ではこれはキャリア教育の成果であることも多い。2年間「キャリアデザイン」という科目を担当して、キャリアデザインのような理論的なキャリア教育科目は今の大学生には必須科目であると痛感した。多くの大学生にできるだけ多くのキャリア教育科目を履修してほしい。大学連携事業として理論的なキャリア教育科目を連携大学へ開放（単位互換を含め、他大学の学生が履修可能とする）するのはどうだろうか。

プログラムのサポートを通して見えたこと

愛知県立大学学術情報部　刑部 理恵

合同キャリア教育プログラムを今回いくつかサポートして、改めてサポートする喜びというものを感じた。

3つの合同キャリア教育プログラムを振り返ってみると、第1回の「模擬集団面接」には、面接体験者、聴講者を含め、132名もの参加があった。聴講者ははじめ100名の予定であったが、申込が相次ぎ、急遽座席を増やして111名の学生に聴講してもらった。「模擬集団面接」はアンケート結果から見ても、学生にとって好評であったようで、面接体験者からは、「本番同様の面接体験をして自分の課題やつめの甘さがはっきりとわかった。」と、聴講者からは、「模擬集団面接の第2弾をやってほしい。」という声があった。

第2回の「5大学の先輩たちに聞く」には、卒業生、聴講者含め75名の参加があった。アンケートからも、「学内のセミナーでは聞くことのできない話を聞くことができ、大変参考になった。」、「人事には聞きにくい、“入社後のギャップ”などにも答えてもらえ、“リアル”が聞けて良かった。」という声があった。

第3回の「学生のキャリア支援シンポジウム」には学生、企業、大学の関係者らが52名参加した。大学や企業がキャリア支援としてできることは何か、企業や大学、学生たちからの声を聞き、意見を共有した。

プログラムにサポートとして関わり、学生たちの就職に対する強い思いを感じた。多くの学生たちと申し込みや受付など多くのやりとりをしたが、学生たちのメールの文面は学生とは思えないしっかりとした文章を書く学生が多かった。また、どうしてもこのプログラムに参加したい等熱意をぶつけてくる学生もいた。中には積極的な学生もおり、「5大学の先輩たちに聞く」に参加した先輩に質問をしたが聞きたいことが多く質問しきれなかったので、OB訪問をし、再度話をききたいといううれしい問い合わせを受けた。こういった前向きなリクエストはどんどんしてほしいものである。

サポートするにあたって気をつけていたのは、相手の立場に立って考えることである。相手のリクエストを読み取り、そのリクエストをかなえ、満足度を上げることを目標とした。組織に属している以上、できることとできないことはある。できないことをできないではなく、どこまでリクエストに近づけてあげるのか。それがサポートの醍醐味であると思う。また、サポートするにあたって、人とのかかわりは非常に重要であった。人と積極的にかかわり、サポートを進めていく。そんな姿勢もサポートには必要だろう。

今回5大学で連携して合同キャリア教育プログラムを開催したが、学生のアンケートからも「他校の学生と関わる機会があまりなかったので、この体験はおもしろかった。」「友人以外と情報交流する機会は少ないので、学生同士の交流プログラムを行ってほしい。」や「まだ2年なので、来年度も参加したい。」という声があった。学生のリクエストにどこまでこたえられるのか、是非来年度も事業を継続して、学生のリクエストに応えてあげたい。

自然豊かな東部丘陵からの提案

愛知県立大学非常勤講師 名古屋市立大学 生物多様性研究センター研究員　小木曽 学

伊勢湾を取り囲む東海地方には、マメナシやシデコブシなどの東海丘陵要素といわれる地球上でこの地域だけに自生、あるいは特に多く自生する 20 から 30 種の植物群が存在する。残念なことに、それらの植物の特徴や貴重さを、学生や一般の人に伝える教育環境は充分に整っておらず、都市化に伴う環境破壊や地球温暖化などにより、多くの東海丘陵要素植物は知られることなく、絶滅の危機に瀕している。2010 年 10 月に名古屋市で開催された「生物多様性条約第十回締約国会議」(COP10) を契機に、愛知県でも生物多様性や希少野生動植物に対する関心が高まったように感じられるが、決して安心できる状況ではない。

愛知県立大学が位置する愛知県尾張地域の東部丘陵にも、シラタマホシクサやフモトミズナラなどの東海丘陵要素植物が自生しており、多くの自生地は地元の市町村や自然保護団体などにより管理されている。今回の「長久手探訪 3 つのフィールドワーク」では、長久手町だけでなく、隣接する尾張旭市の湧水湿地でも、東海丘陵要素を中心とした植生観察を行なった。多くの参加者は、身近な植物が希少種であること、それらの多くが東海丘陵要素という固有種であること、を知ると同時に、外来種の侵入が無視できないレベルにあること、を実感したようである。観察後のアンケート結果で、このような観察会を季節ごとに開催して欲しいなどの要望が多かったのは、大きな成果であるといえよう。

歴史的にみると、この地域では伊藤圭介に代表される尾張本草学により野生動植物の採集、分類が江戸時代後期に始まり、西洋の近代植物学を我が国に導入するきっかけを与えた。その後、多くの市井の研究者による長年の調査、採集を経て、多くの固有動植物種が生息、生育する日本列島の中でも、特徴的な地域として現在の周伊勢湾地域が認められるようになった。しかし残念なことに、江戸時代から収集された標本などは散逸し、すでに愛知県に残存していないものも多く、自然史博物館の建設、資料や標本の保存が切に望まれている。

また、愛知県では生態系ネットワーク形成モデル事業の一つとして、名古屋市東部から東部丘陵地域にかけての市街地モデルを、大学や公共施設の連携をもとに構築する計画が進行中である。現在でも比較的良好な自然環境が残る東部丘陵の中心にある愛知県立大学には、戦略的大学連携支援事業での地元への教養教育プログラムの提供にとどまらず、大学環ネットワークの中核としても地域に貢献する役割が求められている。

今後は愛知県尾張地域の東部丘陵から、東海丘陵湧水湿地群としてラムサール条約への登録を目指している豊田市を中心とする西三河地域、豊川沿いに多くの固有種を育む東三河地域、さらに岐阜県東濃地域につながる広域での教養教育が、東海丘陵要素の自生地の保護、保全に必要と思われる。自然保護団体への教養教育プログラムの提案も、時として東海丘陵要素植物の無秩序な植樹や播種など、自然保護という名の自然破壊を引き起こしている現状を鑑みると、早急に対策を講じる必要があろう。

フィールドワークとしての私の農業について

長久手町役場 田園バレー事業課　成瀬 守

私が長久手に携わるようになってちょうど5年になります。縁あって長久手町の職員となり、「田園バレー事業」という長久手の農に携わる仕事に就いてから、長久手の農業について知るために、ちょうど5年前の今頃、片っ端から長久手の田園地帯をあるいていたことを思い出します。何でもいいから吸収できることはないかと、とにかく畑で出会う人にはどんな人にも声をかけ、自分が岡崎から来た人間で、今、長久手の農業のことを知ろうとしていることを告げて話を聞いて回りました。昼間、畑にいる人ですから、当然若い人はいなくて、お年寄りばかりと話していました。畑で長い立ち話をしたことを思い出します。

町の職員になる前、私は有機農業農家として２０年ほど畑を耕していました。特に前半１０年は、７０歳を超えた父親と一緒に農業をしていました。大学を卒業した後、有機農業を志し、愚直に篤農家としての父から教えを請い、農業を行っていました。わたしの父は自給的な兼業農家でしたが、私の祖父は篤農家として地域では知られた存在であったらしく、父はその祖父の教えを私に伝えてくれたのでした。それは堆肥の作り方から始まり、クワの使い方、縄のない方、肥桶の担ぎ方、味噌の作り方、蒔の割り方まで野菜の栽培だけでなく農家の生活全般にわたるものでした。当時は何げなく聞いていたこれらの言葉が、実はこの長久手に来て畑を歩き回り、地域の人たちと話をしているとき大変役にたっていったのです。

長久手の農家と農作業やその生活について話をすると、共通項も多いのですが、ほんの少しづつですが様々な点で自分の地域と異なることに気付いていきました。クワの使い方、溝の切り方、藁の使い方などの農作業やまた生活や地域の行事など、この少しの違いがこの地域の自然や風土から発生したもので、まさに長久手らしさだと私の眼に映ったのです。そしてそんな中で出会ったのが今回長久手学で紹介した「真菜」という青菜です。

「真菜」は長久手の雑煮に入れる青菜つまり餅菜のことです。愛知県では雑煮に入れる餅菜は黒葉系丸葉青菜が一般的です。ところが「真菜」は切葉の蕪や大根の葉のようにぎざぎざの葉をもっている。明らかに、一般の餅菜とは異なる形質をもっているのです。そんな野菜が長久手に残っていたということと、そして個々の農家が自分の家独自の真菜の種を持っていたことに驚きました。他にも長久手らしさと言える地域の伝統というものが本当に色濃く残っていることに驚かされました。そしてこれをどう残していくのか、どう活用していくのか、どう農業の活性化につなげていくのかが、今の私の課題となっています。

さて今回長久手学で地域学の実際をフィールドワークを含めて体験・学習した中で、これまでの自分と農業の係わりが、常にその地域の地域らしさを探すフィールドワークだったということに気付かされました。父と一緒に農業を行っていた時も、長久手で長久手の農業を知ろうと歩きまわっていた時も、地域の中から何かを探しだし、その地域の価値を見つけ出そうとしていたのです。きっと今回長久手学に参加された皆さんも同じような観点から参加されたと思いますし、歴史・文化・自然・食・農など取り上げられた事柄に関して、地域として何気なく続けてきたことが人と人、文化と文化、異なるもの同士が出会う時、そして新しいものが生まれてくる時に大きな意義を持ってくると気付かされたと思います。私も素直にそう感じました。このような意味で「長久手の農を観る、食す。」ということを長久手学に取り上げ企画された方の見識の深さに改めて感心しておりますし、また引き続き、私自身、長久手の農業に携わる中で「長久手の農を観て、食す」ことをさらに進化させていきたいと考えています。

そして次回はまた一歩進んだ長久手学に参加できることを期待しています。

長久手野菜に惚れて

高野泰輔

私は、藤が丘で御膳所「櫻」という日本料理店を経営している。そんな私、プロの料理人の目から見た長久手野菜について 、私的観点を交えて述べたい。

私は一言で「長久手野菜」と申しあげたが、ここでは産地直売の「あぐりん村」で仕入れている、尾張旭市、瀬戸市、豊田市、設楽郡等産の野菜を含めている。私事になるが、当店「櫻」開店の５年ほど前、お客様にあぐりん村の立ち上げに携わった方がいらっしゃり、プロの視点から一度見てほしいと言われ訪れたのが長久手野菜との出会いである。当初は、品揃えもわずかだったので、一度きりで、何も買わなかった。それから３年程した頃、また別のお客様から安くて新鮮な野菜があると、茄子とゴーヤをいただいた。その時の野菜がとてもおいしかったので、何処で買ったのか聞いたところ、あぐりん村だった。

早速仕入れに行き、その時の品揃えと品質の良さに、物凄い衝撃と感動を覚えた。と言うのも、私は食材にこだわりを持って仕入れをしている。それは、東京にいた時は築地の市場で、名古屋は、柳橋の市場で自分の目で見て仕入れている。そのどこよりも、品質とコストパフォーマンスにすぐれていた。鮮度は、朝採れ野菜の右に出るものはない。

また、安全については、有機栽培の無農薬野菜が多く揃っている。それぞれの野菜には、生産者の名前が記されており安心して仕入れる事ができる。品質管理も行き届いており、一週間毎日通った時でも、いつも鮮度の良い野菜がきれいに並べてある。生産者の方が丹精込めて作った野菜をあぐりん村のスタッフの方が、ていねいにきれいに陳列している姿も大変好ましく思う。もう一つ、スタッフの方の対応も好感がもてる。長久手町としての農業に向かう姿勢が隅々まで行き届いているなと、感動すらおぼえる。

そして、特筆すべき事は、その価格にある。スーパーの安売りに匹敵する価格設定は私の中では驚愕に値する。生産者の方とスタッフの方の手によって舞台に登った野菜はとても幸せだろう。いや、そんな探し求めていた食材に出会えた私が幸せであり、皆様に感謝の日々である。

そんな野菜達の特性、言い換えると鮮度と品質の良い野菜の味について述べたい。まず、多くの野菜に共通するのは、それぞれ特徴のある味わいを持ちながら新鮮野菜の特性と思える甘味が感じられる事である。甘味の濃淡はそれぞれあるが、生食で感じられる物、茹でたり煮炊きして火を入れると甘味が増すものなど色々ある。総じて私の感じる甘味とは、とうもろこしのような甘味である。例えば今の時期の野菜で言うと、水菜は独特の苦味が美味しいと思っていたが長久手のそれは、茎が太く葉が厚いのに煮ると甘くて柔らかい。

また、白菜は独特の白菜臭さがあり、あまり好きではない部類の野菜であったが、長久手のそれは生で食べても程好い歯ごたえと淡い甘味が感じられ、火を入れるとその甘味は増す。その雑味の無いクリアーな味わいは、まるで甘味のある水のごとき、とても上品である。見た目の色艶も明るい透明感を持ち、弾けそうな瑞々しさで、手に持つと見た目以上の重量感があり、とても重たい。大根も、とても瑞々しく見た目以上の重量感があり、何かにぶつかっても「パチッ」と弾け割れてしまいそうである。包丁を入れると割れるように切れ水がしたたる。生で食べると食感はしゃきしゃきととてもジューシーで、やはり白菜のように雑味の無いクリアーな味わいで甘味がある。市販されている物は、大根臭さや辛味が感じられるが、長久手のそれは一切無い。

大根と言えば切り干し大根も素晴らしく、生産者によって太さも色々あるが、私はシナチクのように太いものが気に入っている。湯で戻すと生の大根の数倍甘く、湯が切り干しの旨味と甘味で味がついてしまうほどである。そして煮ると市販の物よりも太いにもかかわらず短時間で柔らかくなり独特の食感に仕上がるところが大変気に入っている。にもかかわらず、売っている期間が短いのがとても残念である。

四季折々の長久手野菜の全てはとてもここでは語り尽くせない。これからも長久手に触れあいながら、公私共に生きていけることはとても幸せで、いずれは近い将来、長久手に住みたいとさえ思えてくる。長久手との絆を深める機会を与えて下さった、愛知県立大学 学術情報部の春日井様にこの場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

「長久手学 2010」参加日記

橋本暁夫・小夜子

＜始まる前に＞

「洒落た古地図のパンフレットだね。えっ？長久手学？」

「そう言えば長久手に住んでもう 20 年経つけれど、まだまだ知らない事が多いよね」

「色々な分野の講座があって面白そうだし、勉強になりそうだね。行ってみよう」

<9/12>

文化の家に集合。とても立派なバスで町内の田園を視察。特に東小周辺の変貌ぶりにはびっくりした。まだ残暑が厳しく、畑の野菜たちも暑そうだった!? 戻ってから、食文化室で 3 人の料理人の方達による豪華な昼食。各々持味を出されたメニューで、野菜の美味しさに感激した。長久手には特有の種類を含め豊かな野菜文化があるのを大発見できた。

<9/18>

谷沢先生はソフトな語り口で、色々な地域の町づくりをスライドと共に紹介して下さり、すっかり旅行気分に浸れた。藤田先生は明快な解説で、小牧・長久手の戦いをメジャーにし、歴史を掘り下げる面白さを感じさせてもらった。

<10/23>

県芸大の歴史と町のつながりの話が興味深かった。文化の家で、いくつかの創作も観察できた。欲を言えば、実際に学生さん達の作品をもっと観て、声も聴きたかった。それにしても我が創造力、絵心の無さを実感させられる。

<11/6>

警固祭、今までは鉄砲隊が町内をねり歩く認識しかなかったが、今野先生の詳しい解説でその歴史の奥深さに改めて驚かされた。

加藤先生の、祭を続ける上での色々なご苦労と続けていく事の大切さのお話が心に響いた。

<11/13>

山村先生のご指導のもと、天保時代の古戦場の図と明治時代の測図を参考に、現在の地形や地名を見比べた。又、香流川を中心に長久手の戦いでの徳川方・豊臣方の武将の布陣を色鉛筆でなぞり現在の地形を思い浮かべる事ができ、一層長久手を身近に感じる事ができた。実際に古戦場周辺を巡り、よく学び、よく歩き、充実した講義となった。

＜終わって＞

「各回ごとに新しい発見があって、長久手をまたまた好きになれた気がするね」

「もっと若い世代の人達が参加してくれると活気が出るし意見交換ももっとできるよね」

「県芸大との連携、次回は音楽分野（クラッシックなど）も企画してほしいな」

「それにしても、バラエティに富んだ楽しい講座を企画、運営して下さった委員会の皆様には感謝!」

地域社会の総力結集へ向けて

㈱電通名鉄コミュニケーションズ局長　古園井直紀

主に大学三年生に向けて10月より実施した一連のキャリア支援事業は、まさに史上最低の内定率という報道発表直後にスタートした。参加した大学生たちは、真剣な態度で企業の現役面接官のアドバイスをノートに書き取り、就職一年目から二年目の大学OBの経験談に目を輝かせ、シンポジウムの発表に耳を傾けていた。これらの試みの結果は、参加した大学生たちへのアンケート結果等によると概ね好評だったが、その意義と今後に向けての課題について総括的に整理してみたい。

最も大きな意義は、五つの大学が連携し、就職活動を前にした大学生、大学OB、大学キャリア支援関係者、企業人事担当者等が集い「就職」というテーマに同じ場で向き合った事にある。なんとか糸口を見つけたいと望む大学生となんとか少しでも応えたいと願う関係者が一堂に会し、知恵を振り絞るようにして語り合った事により、他では醸し出せない緊張感と臨場感が生まれた。おそらく、インターネットのWebサイトからの情報収集や就職系イベントの参加体験では決して得られない知見が、貴重な糧として参加した大学生には残ったはずである。

今回の試みで、もうひとつ意義を挙げるとすれば、「職に就く」事の意味の深さや「社会人（或いは職業人）になる」事の人生におけるインパクトの大きさについて、多くの方が真摯に自分の言葉で語った事にある。就職活動における対処的なテクニック論に終わらず、事の本質に踏み込んだ内容が一連の事業に通底していた事は、参加した大学生にとって新鮮で有益な示唆となったのではないだろうか。とりわけ、就職一年目から二年目の大学OBの方々が語った自分自身の就職活動や就職後の成功談・失敗談は、参加した大学生にとってリアルな話として心に突き刺さったと確信する事ができた。

昨今、声高に叫ばれている「就職氷河期」という名の社会問題は、着実に日本産業界の足腰を弱め、日本社会の将来展望を暗くしている。社会の事情や企業の都合が今後も優先され、若者のパワーを積極的に取込めない状況が続けば、間違いなく日本は早晩、活力のない社会に陥るはずである。そうした視点から、この地域に根差した自立的な活動として一連の事業が企画・実施された事は、地域社会の発展や地域産業の振興面からも意義深い取組みであったと位置づけたい。

一方で、これら一連の事業が一過性に終わる事のないよう願いたい。改めて、事態の深刻さを関係各位で共有し、若者に希望を抱かせる地域社会作りに向けて一致団結する事を切望するものである。そのためにも、例えば様々な企業等の職業人が大学生に向けて、仕事についてレクチャーする、また仕事に込めている志や情熱を語る会を継続的・日常的に開催するような枠組みについて検討する事を提言する。この枠組みは、地域の知見・資源を結集する意味からも、大学および企業関係者のみならず地方自治体やメディアの参画も呼びかけ、自らも地域社会全体で取組むよう微力ながら寄与したいと考えている。

がんばれ！大学生たち　~5 大学セミナーの現場から ~

中部日本放送（株）総務部長　北辻利寿

「母校のためなら何でもやります!･･･ ただし可能なことならば」と言うキャッチフレーズをことあるごとに口にしてきた私だが、文部科学省の「戦略的大学連携支援事業」の合同キャリア教育プログラムにおいてその機会が訪れた。5 つの大学がスクラムを組んで、大学生の就職活動を考えようという企画について、そのコーディネーターの 1 人として母校・愛知県立大学からお呼びがかかったのである。

2010 年 11 月 20 日（土）午後、参加大学のひとつである愛知淑徳大学で、企画『5 大学の先輩たちに聞く ~ 就活と就職後 ~』は行なわれた。この会は、入社 1 年目と 2 年目のフレッシュな卒業生が自らの就職活動体験、そして仕事に就いた今の思いなどを語るもので、3 人のコーディネーターがテーマごとに分かれて、6 人の卒業生から意見を聞くスタイルで進められた。

語る卒業生は、男性 2・女性 4 の 6 人で、メーカー・電力会社・製造業・広告人材業・広告代理店・福祉関係という業種で仕事をしている皆さん。会場には就職活動真っ只中の大学 3 年生を中心に 80 人の現役大学生がつめかけた。

就職活動の時期については、全員が 3 年生の夏から秋にかけて、就職活動に突入していた。3 年生といえば、大学生活の折り返し点を過ぎたところで、自分の経験では最も佳境に入る楽しい時期。この段階ですでに就職活動をスタートしなければならない現実にあらためて驚かされた。会社に入って感じたギャップについては、例えばこんな答があった。

「お客様への対応マニュアルも山のようにあり、『マニュアルを見るためのマニュアルが必要』と思ったが、上司からは『マニュアルは見るな。お前が考えるのだ』と言われて自分の考えこそ大切だと学んだ。」

「世の中でお金をもらうこと、社会でお金をもらうことがこんなに大変だとわかった。」

「自分自身で現場に行って、事実を確認することが大切だと学んだ。」

社会人 1、2 年生として、6 人それぞれが感じたギャップは “非常に健康的な” 内容だというのが私の感想である。皆さん、がんばっている。

さらに無事に就職をした現在の立場から、自らの就職活動をふり返ってもらった。浮かび上がったキーワードは 2 つ、「自己分析」と「企業研究」である。

「スポーツ・飲み会・友人とのバカ騒ぎなど、すべて一生懸命やったこと。」

「企業訪問でいろいろな業種の人と話をして、自分もこういう人になりたいとイメージが作れた。」

「親や友人たちと徹底的に会話し『自分は何者か』『自分は何をしたいのか』徹底的に自己分析を行なった」

それぞれがしっかり語ってくれた。

2010 年春に卒業予定の大学生の就職内定率は 7 割にも満たない現実。就職氷河期→長い時間を就職活動に費やさざるをえない→講義やゼミなどを欠席→専門教育が深まらない→企業が求める人材が育たない→就職超氷河期、という “負のスパイラル” が加速している。

仕事の喜びについての質問に 6 人の内の 1 人はこう答えてくれた。

「自分の喜びは『ありがとう』という言葉。1 日に人から『ありがとう』と言われる回数は誰にも負けない。」

この企画に参加した 6 人の若者とふれ合いながら、彼らのような真摯な姿勢があれば、氷河期の氷はきっと溶けると確信した。

合同キャリア教育に参加して～交流の場の重要性～

株式会社エンパワー代表取締役　橋本友美

今回、「模擬集団面接」、「5大学の先輩たちに聞く～就活と就職後～」、「大学、企業、卒業生が共に考える学生のキャリア支援シンポジウム」の3つの合同キャリア教育プログラムのコーディネートをさせていただいた。

今回のプログラムに参加した多くの学生から、「実際に企業の方と話すことができてよかった」という声を聞いた。「人と会う」というリアルな交流により得られるものが大きいということであろう。

ネット社会の発達により、ほしい情報がすぐに手に入る大変便利な時代になった。就活についても、就職情報の提供や募集についてネットを採用している企業が多く、また、面接ノウハウなどはもちろん、面接受験の感想などまでソーシャル・ネットワーク・サービス等を通じて瞬時に入手できる。しかし、多くの情報が入手できるだけに、ネットでは手に入らない、足を運んで人と会うという「リアルな交流」が不足し、自身が人に会って、話し、聞くことでしか得られない情報が不足している。

実際、「5大学の先輩たちに聞く」の卒業生パネリストたちも、就職活動でやっておけばよかったこととして、「もっと多くの業界、会社を見ておけばよかった」と言っており、人との出会いが自身の考えや仕事に影響するということを実感しているためであろう。

「模擬集団面接」では、実際に面接の経験がある企業の方に面接官を務めていただき、学生たちは本番さながらの企業の面接を体験、聴講した。重要なのは、面接テクニックの有無ではなく、「学生時代に何をしてきて、その時何を思ったか」、「今後何をしていきたいか」といった根本的な質問に、「自ら考え、表現すること」であることが伝わったのではないだろうか。

「5大学の先輩たちに聞く」では、3名のベテラン社会人によるコーディネートで、社会人1~2年目の卒業生6名に、彼らの就活の体験、現在の仕事について語ってもらった。聴講学生との意見交換も活発に行われ、先輩たちの実感のこもった言葉はリアルで説得力があり、学生たちが「社会人になる」イメージを描く助けになり、彼らを勇気づけるものとなった。

「大学、企業、卒業生が共に考える学生のキャリア支援シンポジウム」では、企業、大学、卒業生、学生が集い、互いに期待することについて意見交換を行った。

大学生の就職氷河期は依然とし継続しており、今年1月16日の文部科学省、厚生労働省の発表によれば、大学生の昨年12月1日時点の就職内定率が68.8%と、調査が始まった1996年以降で最低を記録している。また、近年では就職した学生が早期に離職してしまうケースも多く、大学はキャリア支援として、就職のみならず、学生の就業力アップのためのサポートプログラムが必要となってきている。

企業が求めるのは、人間的に魅力的な学生、学生時代に何かに打ち込んで、そこから何かを得た学生である。学生自身が充実した学生生活を送り、自身の夢を自身で模索することが第一であるが、キャリアデザイン、職業観の形成については、多くの先輩たちの意見を聞くことが必要となるだろう。人とのつながりが希薄になりつつある今、我々はそのサポートとして、様々な大学、世代、業種に従事する人々と学生たちの交流の場をセッティングしていくことが必要であり、その交流には、「大学、企業、卒業生が共に考える学生のキャリア支援シンポジウム」で確認されたように、企業、大学、社会が一体となって、若者を社会人として育てる体制が必要である。今後の体制作りに微力ながら尽力できれば幸いである。

大学連携事業 集団模擬面接に参加して

トヨタホーム㈱　服部 誠

私は模擬面接に２回参加し、いずれも学生の皆さんの真摯な眼差しに心打たれるものがあった。こうした試みは就職戦線の厳しさや企業に勤める人間との交流の少なさを物語っている。ただ、この機会を単なるテクニックを知る場と捉えてほしくない。私も数十年前に就職に臨んだ時の緊張と安堵と反省が今でも様々な場面と共に思い浮かぶ。時代や環境がどうあろうと、就職は人生の大きな岐路であることに変わりなく、同時に人間としての魅力や能力が初めて試されるのもこの時である。それまで偏差値さえよければ希望の高校や大学に入学でき、就職もその延長線でと思っていたところに大きな蹉跌が待っている。気ままな学生生活を過ごしてきた人間にとって気づいた時にはもう手遅れということになる。しかし、環境や運が良ければ、希望の会社に入社でき、入社してから、人間は社会に出てからが勝負、学生時代はよく学びよく磨けが一番大事だということに気がつく。会社ならさしずめ目標をたて、それを達成するためにいつまでに何をするかということになる。その間自分が何をやりたいのか、何に向いているのかじっくり見定めること、自分に心地よいことや楽なことではなく、嫌なことや辛いことを身を持って体験すること、これが社会を知り、自分を見詰め、自分を磨く良い機会となる。面接でアルバイトをしたと語る学生が多い。大事なことはそこでどんな苦労をし、何を考え、どう行動したかである。最近の社会経済情勢の変化は激的かつスピーディである。昨年のGDPで日本が簡単に中国に抜かれたように、どんな優良企業といえども明日の地位は約束されていない。将にグローバルな生き残り競争を勝ち抜くことがこれからの日本企業の宿命である。それを動かすのが人間であるかぎり、企業の人材競争に拍車がかかる。企業の成長は社員の能力の成長度と重なる。企業は、考える人材、物事に疑問を感じる人材、過去や習慣にとらわれない人材、諦めない人材、創造力のある人材など、様々な能力を秘めた人材を求める。その求める人材への要求度は高い。だから業績を上げ、会社の地歩を上げ、採用のやり方について毎年知恵を絞る。今や日本の企業が本社で働く人材を中国で採用する時代である。日本の学生諸君も内向き志向、安定志向に陥らず、海外に出て現地の学生と競って就職活動をするような気概や能力を養ってほしい。そのためにも語学力は必須である。大学サイドは海外や環境変化に合った新しい事業領域に目を向けると同時に学生と企業或いは社会とのコミュニケーションの場をもっとつくるべきである。それも単に講義を聴くという受身の場ではなく、意見を戦わす場であり、共に考える場であり、自分の将来を思い描く場でもある。最近の日本を見ると、国力は経済力であり、人材力だと感じる。有為な人材をどう育て、活躍できるフィールドをどう拡げるか、これは大学はもとより企業や社会に課せられた一番大きな責任であろう。今回の企画はそうしたことを改めて考え直すよい機会になった。

学生と企業間、双方向の“思い”を育む共同プログラムにするために

株式会社阪急交通社中部メディア営業一部長　田中 明

2010年1月と10月の二度に渡り、愛知淑徳大学を会場に、愛知県立大学を始め5大学の主催にて開催されました「模擬集団面接」に企業側より参加させて頂きました。それぞれ130名を超える学生さん達の見守る前にて面接希望学生各々10名と、本番さながらの面接体験を共有しました。そこで、これからも本プログラムをより有機化させるために、三者の役割について、自分なりに思うところを述べさせていただきます。

主催者に対しては、第一に参加大学の拡大が望まれるところであり、より多くの大学が携わるべき、と考えます。昨今の学生達の置かれている就職環境の厳しさの理解、その打開意欲に各大学間での温度差は無いはずです。事務手続き上の問題も不明な中で、このように申し上げているのも不遜ですが、参加大学が増えていく状況は、牽いては学生の心の支えになると思われます。加え、参加企業要請につきましても、その範囲の拡大が望まれると考えます。

参加企業に対しては、社名が出せないというもどかしさのある中での模擬面接となり、従いまして、その部分がある以上、会場にて臨場感が100%発揮できたであろうかという、不安感、疑問点は、自分も含め、面接官役の方々の思いとして残っております。メリット、デメリットがある以上、以後、この部分は、参加企業側に、その判断を委ねて、臨んで頂ければと、提案いたします。模擬とは言え、双方、真剣勝負の場を醸し出すためにも、必要であると考えます。

学生さんに対しては、二度の模擬面接、特にその体験者の臨みかたに接して、逆に企業側が試されているとの思いを強くし、決して模擬という仮想の中での出来事ではなく、いい意味での”重い”空気を感じました。よって、自己のアッピール法について、個々に鍛錬してきていることは明白であり、しかし、伝わり方の結果が思わしくなかったときの表情は、こちらから思わず、「これは模擬だよ」と、口を添えたくもなりました。その時は、こちら企業側も観られているのだと感じました。本プログラムへの取組は、当たり前とは言え、学生が主役になっていると信じられる局面でもありました。

本プログラム開催に際し、企業側より参加協力させて頂き、感謝申し上げます。益々、厳しくなっていく感のある就職環境、これは決して、学生達、大学だけに降りかかっている訳ではなく、企業側も、「ミスマッチ」と言われているように、片方の当事者になっております。人生、最初のお見合いを、お互いが成就させる為にも、「合同キャリア教育プログラム－模擬集団面接」の果たす役割に期待するところ大、と考えます。

本プログラムに関わる三者の益々の真剣度が、試されております。

振り返ってみてわかること

愛知県立大学文学部社会福祉学科卒業生　四日市社会福祉協議会　阿部希美

今回、「5大学の先輩たちに聞く」にパネラーとして参加させて頂き、自分自身改めて、就職活動から現在、実際に就職し仕事をしている期間を振り返ることでわかったことがたくさんあった。

就職活動に関して、辛い時期もあったが、その時期を乗り越え、現在就職し仕事をしている自分を振り返って実感することは、その辛い時期を乗り越えたこその今がある、ということである。そして、その時期をどう過ごしたか、その時期に得たものがいかに今に活かされているか、ということである。私自身は、社会福祉学科で学び、社会福祉士という国家資格を取り、それを持って社会福祉協議会で仕事をする、という目標を持ち、就職活動の後半は取り組んでいた。なかなか内定が出なかった時期も、必ず社会福祉士に合格し、仕事をする、そのために必要な知識を身に付けるのは今しかない、という気持ちで内定が出ていない中で早くから国家試験勉強に取り組んでいたことが、実際に国家資格を取れたこと、また社会福祉協議会の内定をもらい就職し、その資格を最大限に活かして現在仕事ができていることにつながっているのだ、ということを、今回パネラーとして参加させて頂き、自分自身を振り返り、それを話せたことで、改めて気づくことができた。やはり、早くからあきらめず、自分自身の進路が決まる時期を信じて待ちながら、その時できることを懸命に取り組むことの大切さ、そのように取り組んで良かったということは、学生の時はわからなかった、今振り返ってみてわかることである。

また、一般教養やパソコンのスキルを身につける等、なかなか学生時代や就職活動期に自分自身不十分だったことを、今どれだけ後悔しているかということも、学生の時にはわからなかったが、今実際にわかることである。特に専門的な知識は、就職し仕事をしながらでも十分身につけられるものであると思う。しかし、一般教養やパソコンのスキルは、なかなか改めてそれだけを勉強する、という機会が就職してからはないのが実際である。それがわかっていたら、学生時代や就職活動期の、それだけを勉強する時間がある時に、もっと勉強をしていたのではないか、ということも今になって実感している。

このように、あの時こうしていたから良かった、反対にあの時こうしていたら良かった、と思うことは、時間を経て振り返ってみないとわからないことばかりである。それを、生の声として、今学生の就職活動中やこれから就職活動を迎える後輩達に少しでも伝えられたら、と思い今回参加させて頂いた。自分が学生の頃に「5大学の先輩達に聞く」のような就活のイベントに積極的に参加し、自分が後輩達に伝えたような生の声をもっと聞けていたら、より充実した学生時代や就職活動期を過ごせていたのではないか、と思う。

そして、自分自身は今回パネラーとして参加させて頂けたことで、普段なかなか振り返ることが出来ない自分自身を振り返ることが出来たことで、多くのことに気づけた機会を与えて頂けたので良かった。良かった点はそれを更に仕事で発揮していけるように、また後悔している点に関しては、今からでもそれを補うために努力しなければならない、ということを真摯に受け止め、今後仕事をするにあたって活かしていきたいと思う。

ホームページはこちら

この事業報告書はホームページからダウンロードし、印刷することが可能です。

お問い合せ：愛知県立大学学術情報部 研究支援地域連携課

TEL：0561-64-1111　FAX：0561-64-1104

E-mail：dairen@lib.aichi-pu.ac.jp

http://www.bur.aichi-pu.ac.jp/dairen/